
えくすじえんしあ 魔獣召還学園物語

rubixcube

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

えくすじえんしあ 魔獣召還学園物語

【Nコード】

N8524K

【作者名】

rubixcube

【あらすじ】

『征儀』と呼ばれる力がある。それは選ばれし者だけに与えられる力。その力には二つの流派がある。スペイン系とギリシア系、お互いがその力に磨きを掛けながら高みを極めてきた。その中でも朱雀兄弟と言う二人は、学生でありながら、神童兄弟と呼ばれる程の力を持っていた。そして今、新たな第三の流派が世界を終焉へ導こうとしている。天才の兄と優しい弟、周りの助けを受けてかつて無い敵に立ち向かっていく。その先にあるのは、未来への栄光か、それとも世界の終焉なのか…

召還！ エクスジェンシア（前書き）

元となってる小説、「開校！征儀学園」の設定を直して新作小説としてアップしました。呪文は作者のオリジナルですが、解説も入れて書いていくので、よろしくお願いします。また、いるかどうかは分かりませんが、私の別の小説、「PRICELESS」と「ハーレムを作れ？」からの流用キャラが多数組み込まれております。もしそちらを呼んだことがあるなら、一度フレッシユしてから読んで下さい。

召還！ エクスジェンシア

とある場所、一人の女子が電話口で誰かと話している。

「ええ、大丈夫です。抜かりはありません。はい。必ず完遂して見せます。それでは、そろそろ時間なので失礼します。」

その女子が電話を切る頃、そう遠く離れてない、いや、程近い距離の場所で…。

「行くぜ、慶斗^{けいと}。手加減しないからな。」
「うん。」

【【エクスジェンシア！】】

同時に、離れた場所に立つ二人が呪文を叫ぶ。顔を見る限り、この二人は兄弟に違いない。それぞれが持つ白い宝石と黒い宝石が光りだす。ただ、黒い宝石は何かのカードの様な物に収められていた。互いの立つ位置から少し離れた場所に、宝石と同じ色の白と黒の魔法陣が展開する。その中から現れたのは二体のドラゴン。一体は穢れ無き純白の光り輝く龍。もう一体は、まるで漆黒の闇を龍の形に切り抜いたような感じだった。大きさは5m程度、しかし翼を広げお互いを威嚇する姿は雄雄しいものだった。

【主の命令です。光のオーロラで対象で包み込め。コーティナ・デ・ブライヤー！】

【主の命により、闇の弾丸で敵を撃ち抜け。バレ・デ・オスクリード！】

白の龍、契約者の朱雀慶斗^{すざく けいと}が“エンジェルドラゴン”と呼ぶその龍が、相手に向って光を見せる。相手の霍乱を狙う作戦らしいが、黒の龍を使う慶都の兄、朱雀龍夜^{すざく りゅうや}の唱えた呪文の効果で、漆黒の弾丸が光のオーロラを貫通したのだ。そのまま弾丸は慶斗のエンジェルに被弾し、慶斗自身を含めてダメージを与える。

【回復してください、リポルネルス！】

慌てて慶斗が唱えた回復呪文。光の属性を持つ彼の得意技でもある。受けたダメージを相殺するかのように、慶斗と彼の使役する魔獣に力を与えていく。力が回復した所で、新たに呪文を詠唱するのだった。

【主の命です。光の刃で切り裂け。コルト・デ・ブライヤー！】
【主の命により、闇の罫を仕掛ける。トラーマ・デ・オスクリード！】

慶斗のエンジェルの翼から放つ無数の光の刃。凄まじいスピードで龍夜に向う。だが、それは突然現れた闇の壁で全て消えてしまった。啞然とする慶斗。

「兄い、今の技は何ですか？今まで見た事無いです！」

「慶斗、よそ見してる場合か？」

次の瞬間、慶斗の前方にあった闇の壁が消え、その直後、彼の背部に現れた。そこから放たれたのは、先程慶斗自身が放ったはずの攻撃。防御をする間もなく己の攻撃にダメージを受ける慶斗。

「リ、リポルネルス！」

再び回復が始まる。しかし、ダメージが大きいせいか、回復が遅い。その間にも龍夜は、更なる呪文を唱え始めるのだった。

【主の命により、全てを飲み込む闇を見せる。ファイナーレ・デ・オスクリード】

龍夜の召還魔獣の口から、溢れんばかりの黒いガスの様なものが生成される。気体では無い、闇その物だ。それが吐き出され、今だ回復に専念する慶斗を襲う。光が闇を包み込む瞬間だった…。

「やっぱり兄いは強いです。」

「まあな。だが、学園で一年間も学んでれば慶斗だって直ぐに強くなれるさ。」

仲良く並んで歩く二人の男子。お揃いの制服を着ているが、どうやら慶斗と呼ばれる男子の制服の方が新しいようだ。同じ制服を着た生徒達が歩く中、兄の龍夜、弟の慶斗の二人も学園へ向うのだった。

た。二人が向う先、“国立南陽学園”は全寮制である。兄弟である彼らは同じ部屋に住んでいるのであった。やがて、学園の校門に着く。

「さて、俺は自分の教室に行く。クラス試験頑張れよ。」

「兄いにボロ負けしたから、自信ないです…。」

「悪い悪い。けどな、お前の力は強いんだ。2学年のDランクより強いかもしれないぞ？ただし、回復に頼ろうとするのがお前の悪い所だ。攻撃に専念してみろ。回復は限界ギリギリまでするな。いいな？ちゃんとSランクに入るんだ、母さん達が悲しむからな。それじゃ、時間があつたら試験見に行くからな。」

「はあい。また後です。」

「おっと、そうだった…。一つ良い事を教えてやるよ。耳貸せ。」

慶斗が龍夜と別れ、新入生の集まる場所に行く。そこにはたくさん
の
新
入
生
の
姿
が
あ
っ
た。
受
付
に
向
お
う
と
す
る
と、
後
ろ
か
ら
声
を
か
け
ら
れ
る。

「おっす慶斗。」

「あ、翔太。おはよう。」

彼は慶斗の中学時代からの友達で、名前を青龍翔太せいりゅうしょうたと言う。征儀の力に目覚めた若者が集うこの学園。即ち彼も征儀伝として覚醒していると言うことなのだろう。改めて受付に行き、名前を告げる。確認と同時に一枚の金属製のカードを渡された。南陽学園の校章が裏に描かれており、表の中心部分には円形の溝がある。

「そこに貴方の魔石を嵌めてください。」

実はこれ、学園の生徒手帳である。今年から2学年である龍夜は既に持っている。慶斗はキラキラした目つきで受け取り、ポケットから白い宝石を取り出した。この宝石こそが、“魔石”と呼ばれる征儀伝としての証であり、命より大切と言っても過言では無い代物でもある。カード型の生徒手帳は、これを守る役目もあるのだ。パチリと小気味いい音と共に、二人の手帳に魔石が嵌った。翔太は龍

夜と同じく黒い魔石である。

「では、向こうでテストの開始を待っててください。それとテストは二人一組のチーム戦の為、パートナーを見つけるのを忘れなく。」

「それなら心配なく。俺はコイツと組むので。」

翔太が慶斗の肩に手を置いた。驚いたのは慶斗の方である。

「駄目ですよ翔太！僕なんかでは足手纏いになってしまいます！」

「慶斗、いいか？お前はあの龍夜先輩の弟だ。Sランク候補筆頭だぞ？」

一部の人には元来、不思議な力が宿っている。“征儀”と呼ばれるその力を扱う者を育成する場所、それがこの南陽学園なのだ。そして、学園の配属クラスは試験によって決まる。試験では自分の征儀を用いて戦い、実力の程度でクラスが決まってくるのだ。上からSpecial, Advance, Basic, Common, Deadbeadクラス。略してSクラスなどと呼ばれている。

慶斗の兄、朱雀龍夜は成績優秀であり、特に征儀の扱いに掛けては右に出る者がいないと言われている。この学園もスカウトの上で入学した。実を言えば、慶斗も同じくスカウトされたのだ。本人は謙遜しているが、周囲からは“神童兄弟”などと言われている。

「コレより、クラス分けのテストを行う。手帳に現れるブロックごとにトーナメント戦をするから、直ぐに動くように。」

慶斗達が手帳を開くと、“1”の文字が浮かび上がる。即ち、第一ブロックに向かえと言う指示なのだ。

「…これからだな。」

「ええ。」

高いビルの上、そこから下を睨む様に見るこの二人の眩きに、

誰もまだ気付く事はなかった。

召還！ エクスジェンシア（後書き）

呪文について。作者が作ったものです。いずれ解説したいと思います。

爆発！ ブライヤー（前書き）

早速二話目です。二日に一回の投稿ですので、よろしく願いします。また、これは私たちの生きる現実とは違う世界の設定ですが、具体的な国名が出てきます。偏見とかを持っているわけではなく、設定に合いそうだなあと思ってるだけなので、作者に悪意があって国名を出している訳ではないとご理解ください。

爆発！　ブライヤー

数組の試合が終わり、とうとう慶斗達の出番が来る。相手はパツと見普通の生徒だった。因みに慶斗たちと同じく、男子二人組みである。

「俺はSランクとなる男じゃあ！」

「ここで圧勝し、ハーレムを築き上げる。ぐふふふ。」

前言撤回、暑っ苦しい奴とウザイ男子。試合開始の合図が出たので、4人同時に呪文を唱える。個人によって呪文に差異は見られるが、一番最初の魔獣を召還する呪文は、全征儀伝共通である。

【【【エクスジェンシア！】】】

黒の魔法陣が3つ、白の魔方阵が展開される。それぞれが使役する魔獣が現れた。翔太の魔獣は巨大な翼を持つコウモリだ。

「翔太、僕が防御をしますから、翔太は攻撃をお願いします。」

「おう。お前より魔獣の扱いは慣れてないが、力任せの攻撃なら任せろ。」

【主の命令です。光の盾よ、万物を跳ね返せ。エスクード・デ・ブライヤー！】

【主の命令だ。疾風の翼で破壊の音奏でろ！アジッタ・デ・トルメンター！】

慶斗のエンジェルが光のバリアを張る。翔太の蝙蝠コウモリが破壊音波を流す。相手の攻撃は全て跳ね返され、翔太の攻撃が襲い掛かった。これで相手は相当なダメージを負ってしまう。回復を使ったとしても、翔太の次の攻撃が決着をつけるはずだ。

「慶斗、俺に上級征儀の練習をさせてくれないか？」

「いいですよ。だけど、次の試合で不利にならない程度でお願いします。」

「分かってるって。んじゃ、必殺技行くか！」

【主の命令だ。疾風の針で相手を貫け。アグン・デ・トルメンタ！】

上級征儀、相手に与えるダメージが強い技をそう呼ぶ。既存の物もあれば、自分で編み出す人もいる。その呪文を考え出す一人が、朱雀龍夜なのだ。今の翔太の攻撃は龍夜が作ったものではないが、上級征儀では中レベルくらい。だが、慶斗より魔獣を扱っている期間が明らかに短いはずである翔太が、この呪文を使えるのは、それなりに資質があると言ふことだろう。

「俺はSランクに…」

「俺の、完全なるハーレム計画が…」

翔太の攻撃を受けて、完全に伸びてしまった相手二人。初戦はそれほど難しい物では無かったようだ。

「朱雀、青龍組みの勝利。流星は朱雀龍夜の弟。あの防御力は高かった！」

解説をする教師だが、褒めるのは慶斗ばかりである。やはり出来る龍夜の弟と言う概念の為だろうか？困惑する表情の慶斗。“僕は何もしてないですよ？止めを刺したのは翔太です。”と言いたげな顔だ。しかし、周囲の観客たちは“朱雀龍夜の弟”と知って慶斗を注視し始める。

「ごめんなさい、翔太。僕は特に何もしてないです。兄いの弟だからって、僕自身は全然強くないのに…」

「良いって良いって。お前の異常なまでの低姿勢な性格見ると、嫉妬さえ浮かばねえよ。」

何かと言って、翔太は優しいのだ。それを感じて慶斗も更に気合を入れるのだった。慶斗の頭に龍夜の言葉が思い出される。“攻撃もしてみる”と。

「やってみます。兄い。」

一人、兄との約束を決意する慶斗であった。

第一回戦の戦いが終わり、慶斗達は魔力回復に努める。身体的な外傷が無い限り、魔力は急速に回復するのだ。魔獣を召還しても、10分程度で元に戻るのである。観客席から他の戦いを観戦する二人。調度見ているのは、もう一つのブロック、第二ブロックの戦い

である。

【主の命令、雷の弾丸で相手を貫け、バレ・デ・ルエーノ】

【主の命令よ。鋭利な氷柱^{氷柱}で相手を穿て。アグン・デ・イーロ】

「あの二人、僕らと同じく、スペイン系とギリシア系の征儀伝チームですね。翔太。」

「まあ、征儀の種類は2つしか無い訳だから、ありえるんじゃないか？」

翔太の言う事はもつともなのだ。征儀の種類は二種類あり、それぞれ“スペイン系”と“ギリシア系”と呼ばれている。古来、中世ヨーロッパでは悪魔主義^{サタニズム}などの信仰などがあり、悪魔や魔物と言った物と密接に関係があったと言われている。またギリシャ神話などには、神や英雄、天使などと言った存在が深く関わっているのだ。

元々それらの神話は、古代に異能の力“征儀”を持って生まれて来た“征儀伝”の力が元となっている。召喚された魔獣を見た人々は、それらを悪魔や天使と呼び、それらを召還する征儀伝を、魔法使いなどと呼んで忌み嫌った。だが、ここ数百年で征儀伝が認められ、征儀伝も日常的に征儀が使えるようになった。因みに、征儀と魔力は同じ意味であり、黒の魔石を使う者達をスペイン系、白の魔石を使うのをギリシア系と呼称する。

基本的に征儀と言うのは、同じ系統同士の方が愛称が良く、相乗効果を狙える点がある。逆に別々の系統では相性が悪いパターンがほとんどであり、最悪の場合、味方の力を相殺してしまう事もあるのだ。よって、チーム戦で別系統の征儀伝が組むのは珍しい。勿論、慶斗と翔太の組もそれに準じる。ただ、彼らは気の合う友人同士、力を相殺すると言う状況には陥らないのであるが…。

【主の命令、雷纏^{いかずち}うその牙で対象を砕け。モルド・デ・ルエーノ】

狼の形をした召喚魔獣の牙に電撃が纏い、そのまま相手の魔獣に喰らい付いた。遠距離タイプの攻撃を行う慶斗達とは違い、近距離での必殺技だったのだらう。相手の魔獣は消えてしまった。

「勝者、椎名・泉チーム！」

ニコニコする女の子と、無表情な女の子。圧倒的な勝負、スクラス候補で間違いないだろう。同じブロックじゃなくて良かった、と思う慶斗であった。「あつ、今度は僕らの番です。準決勝ですね。」
「ま、お気楽に行こうぜ。」

「それでは、始め！」

【「【エキスジェンシア！】】】

相手は男女の組。それぞれ黒豹とウサギの魔獣を召喚していた。魔石の色を見る限り、二人ともスペイン系である事が伺える。

【主より命令する。炎を纏いて突撃せよ。アジエツト・デ・フェーゴ！】

黒豹が体に炎を纏う。そして俊敏に動き、体当たりを仕掛けた。防御に徹する慶斗は光のバリアで防ぐ。龍夜との練習試合でも、基本的に防御と回復に努めていたせいだろうか、この二つは慶斗の十八番なのだ。

「無駄よ！私の魔獣の攻撃を食らいなさい！【主の命よ。旋風で加速された針で貫け！アゲン・デ・トルメンタ】」

ウサギ型の魔獣から放たれる無数の針が、慶斗の張るバリアにヒビを入れていく。そこに黒豹が爪で止めを刺した。慶斗のバリアは壊され、慶斗と翔太は攻撃を受けてしまう。

【主の命により、対象を疾風で押し戻せ！エジョン・デ・トルメンタ】

翔太の咄嗟の判断で、どうにか酷い状態になる前に攻撃を阻むことができた。向こう側の連携は慶斗達のものより優れている。持久戦に持ち込めば不利になることは必須だ。

「早く回復しないと。【リポルネ…】」

“回復はギリギリになってからだ”

“攻撃に専念してみろ”

再び慶斗の頭に龍夜の言葉が過る。

「やってみます…、兄い。」

【主の命令です。森羅万象を無形と化す変革の光を見せよ。エクスプロ・デ・ブライヤー！】

慶斗の今まであまり使うことの無かった攻撃呪文。実を言えば、慶斗は龍夜の作った呪文を数多く知っている。そして、彼もまた作る事が出来るのだ。エンジェルが眩いばかりに輝く光弾を生み出す。それを相手の魔獣の頭上へ吐き出し、大爆発を起こした。幾千もの光の筋が地面とぶつかって弾ける。一つ一つの威力を考えれば弱い攻撃だが、瞬時に大量に浴びる事により、多大なダメージを与えるのだ。光が収まる頃、呪文の通り魔獣は蒸発して無形と化していた。「やりました！成功です！」

「け、慶斗…。なんだよ今の技？トップレベルの上級征儀か！？」

「ううん、兄いと一緒に考えたからよく分からないです。」

兎に角、慶斗達の勝利が決定した。残すは決勝戦のみである。

「慶斗。やればできるじゃないか。」

「あ、兄い！見てくれたんですか？」

「当たり前だ。魔力の量は大丈夫か？何なら保険医に頼んでやるぞ。」

「はい、大丈夫です。寝起きでもないですし、兄いの攻撃には到底及びませんでしたので、消費はほぼ皆無です。」

「そっか。その調子でSランク目指せよ。決勝戦、もしもピンチになつたら“あれ”を使え。失敗を恐れずにやるのがポイントだ。」

「はい！」

「じゃあな。慶斗をよろしくな、青龍。」

「は！はい！分かりました！！」

再び観客席へと戻っていく龍夜。その姿に気づいた新入生達が彼の元へ駆け寄っていく。

「翔太、そこまで緊張する事無いですよ。だって兄いですよ。確かに学年トップクラスの、と言つか生徒最強の征儀伝だし、女子の人にはもててるし、頭も良いですけど…」

「それだけで十分恐れ多いよ。でもさ、将来を約束された超有名人だぜ。やっぱり弟のお前も期待されてるんだなあ。」

「つくづく、ごめんなさい。」

「あの、さ…。その敬語いい加減やめようぜ？」

翔太の言う様に、慶斗は誰に対しても敬語を使う。教師や大人は勿論の事、友人である翔太達や兄の龍夜にもなのだ。それが彼のスタンスなのかも知れ無いが、話される相手としてはどこか思っ所があるものであった。

「決勝戦を開始する。朱雀・青龍組と、天馬・一角獣組。フィールドへ。」

爆発！ ブライヤー（後書き）

まとめ

- ・ 征儀Ⅱ魔力
- ・ 征儀伝Ⅱ魔法使い
- ・ ブライヤーⅡ光属性
- ・ トルメンタⅡ風属性

などです。何か分からない設定が会ったら教えてください。どれかの話で大きく解説しようと思います。また、わざわざ魔法を征儀と呼ぶのか、これは後半の話の内容にも関わってくるので、今は魔法と征儀は同義とだけ覚えてください。

融合？ ユニルス（前書き）

今回でクラス決定試験は終わりです。二日に一回の投稿と、前回宣言しましたが、すいません。前言撤回させてください。“最低二日に一回”とします。もしかしたら、毎日投稿するかもしれないし、一日に複数話出すかもしれません。少なくとも、二日に一回は投稿します。

融合？ ユニルス

【主の命令でさあ！研磨されし剣よ、攻防可能な鎧を作れ！アルマ・デ・メタル】

【主が命令する。己の力で仲間を助け、相手に更なるダメージを。アポール・デ・ビオレンシア！】

決勝戦の相手、超がつくほどの高身長と、慶斗と同じ程度の身長
の凸凹コンビである。慶斗達と同じく、それぞれ別系統の征儀を使
うチームだ。しかもかなり前からチームを組んでいるようで、準決
勝の相手より連携に磨きが掛かっている。急造のチームで編み出せ
るはずのない共同技を放ってくる。無数の剣が魔獣に纏わりついて、
堅固な装甲となる。それをもう一体の魔獣がバックアップする戦法。
慶斗達はずつと防戦一方である。慶斗の十八番のバリアでさえ、た
った二発の攻撃で砕けてしまった。元々攻撃派の翔太は、防御系の
扱いには慣れてなく、まるで防御になっっていない状態。このままで
は慶斗は兎も角、翔太が魔力切れに陥ってしまうだろう。だが、慶
斗には一つ起死回生のアイデアがあった。龍夜直伝の特別な技が。
「翔太、兄いの直伝の技があります。失敗すれば元も子もありません
が、使いますか？」

「何もやらないで負けるより、派手にやろうぜ！」

「翔太らしいです。では、呪文を教えますので覚えてください。」

【主の命令です。光学迷彩で僕らを不可視の状態に。トウアル・デ・
ブライヤー】

光のオーラが、魔獣ごと慶斗や翔太を覆い隠す。慶斗の属性、“
光”を使った虚像の効果で、ある程度の時間なら相手に場所を悟ら
れないのだ。

「どこだ？」

「兄貴、落ち着いてください。このフィールドからは逃げられやせ

ん。あの併せ技を使えば何とか成りやすぜ！」

「うむ。」

【主の命令でさあ！相手を打ち負かす強固な球となれ！ボーラ・デ・メタル】

【主より命令する。仲間を以って敵を殴り飛ばせ。ペガル・デ・ビオレンシア】

兄貴と呼ばれた男子の召還した魔獣が、もう一人のアルマジロ型魔獣を持ち上げる。そのまま腕を振り回し始めた。円形の競技フィールドを半周した所で、その動きは止まった。いや、止められたのだ。慶斗の張った迷彩の壁で。そしてその壁も砕け散ってしまった。

「兄貴、見つけやしたぜ！」

「うむ。」

【主の命令でさあ！研磨されし剣よ、攻防可能な鎧を作れ！アルマ・デ・メタル】

江戸っ子口調の身長が低い方の男子が、最初に使った技を繰り出してくる。棘の生えた魔獣は、一直線に慶斗達へ向っていった。

【主の命令だ。疾風で対象を射抜け！バレ・デ・トルメンタ！】

しかし、結界を破壊したと同時に、内側の翔太が呪文を詠唱。魔獣に疾風の弾を浴びせ、後退させることに成功した。

「準備はいいですか、翔太？」

「いつでもOK。」

慶斗達は同時に呪文の詠唱を始めた。

【主の命令です。光を司りし魔獣よ、疾風の力を受け入れてください。】

【主の命令だ、風を司りし魔獣よ、光の力を受け入れろ。】

【【ユニルス！】】

次の瞬間、慶斗のエンジェルと翔太の蝙蝠が溶け合い、銀色の球体となった。そして中から首や手足、尻尾が出て来る…。白銀色の

超巨体、蝙蝠の様な四枚の漆黒の羽…。しかし、それは使い古された様にボロボロである。盲目の頭を掲げ、フィールド内に響き渡る声で鳴いた。啞然とする目の前の二人。歓声を上げる周囲の観客。慶斗がチラッと見やると、龍夜が親指を立てていた。稀代の天才、朱雀龍夜が考え出した、今までの魔獣の理論を覆す業、“魔獣合成”^{ユニルス}。異なる系統の魔獣同士のみが出来る特別な儀式。まだ理論しか完成していないはずだが、慶斗と翔太によって証明されたのだ。

「慶斗、これマジでやばいぞ…。魔力がどんどん吸われてく…。」

「僕も少しきついですね…。一気に型を付けましょう。」

【主の命令です。対象に…！？】

^{ストームエンジェル}

呪文を唱えようとした瞬間、合成魔獣が地面に倒れ伏したのだ。そして体の末端から、キラキラとした粒子に変わって行く。どうやら理論上は possible の魔獣合成だが、実際には厳しい技のようだ。

「慶斗、回復を！」

【リポネルス！】

急いで慶斗が回復呪文が唱えられるが、それは叶わなかった。ほんの少しだけ粒子化が収まるが、依然として魔獣の崩壊が止められない。このままでは失格となる可能性がある。

「僕は、兄いとの約束を…」

その言葉を最後に、慶斗の意識は深く深く堕ちていくのだった。

「大丈夫か、慶斗？」

龍夜の声と呼ばれ、慶斗がベッドの上で目を覚ました。隣では翔太が今だ眠っている。白い壁に白い天井。どうやら保健室のようだ。

「兄い、僕は…」

「すまない。魔獣合成の呪文は、まだ改良の余地が有るみたいだ。結果的には成功だったが、魔力の消費量が相当激しいみたいだな。お前を実験台にしてしまった。本当にすまない。」

頭を下げる龍夜。彼は慶斗なら合成魔獣の理論を証明できると推

測していた。なぜなら、理論の完成時点で問題だったのは、魔力の消費量。呪文の質に関しては常人離れた龍夜だが、魔力の保持量は人並みなのだ。そこで目を付けたのが自分の弟、慶斗。慶斗は戦闘でこそ龍夜に負けてしまいが、魔力の保持量は異常なのだ。本人は気付く様子は無いが…。しかし、その慶斗でも合成魔獣は負担だった。

「兄い、謝らないでください。僕こそ謝らなくてはいいけません。兄いと約束、Sクラスに入ることは出来ませんでした。ごめんなさい…。」

「ああ、その事か。学園長から配属クラスの決定通知を預かってる勝手に開けた。Sクラス合格おめでとう。」

一瞬慶斗がポカンとした顔をする。その顔には、“トーナメントで優勝できなかったのに、何故ですか？”と書かれている。それを悟ってか、龍夜は話を切り出した。

「別に優勝する必要は無いんだよ。確かにトーナメントで良い順位に入れば配属クラスだって良くなる。けどな、勝ち負けだけが審査対象では無いってことさ。」

龍夜が言うには、“連携の良さ”や“使う征儀のレベル”も審査対象なのだ。それを見極める為にチーム戦を組んで試験を行う。即ち、史上初の合成魔獣をやったのけた慶斗達に対する審査ポイントは非常に高かった事になる。

「でも、決勝戦の相手だって連携が凄かったです。」

「ああ、天馬のコンビか。学園長もSランクに入れたがってたが、当人達が拒否したんだよ。“あのコンビに完全に勝てたら、Sランクに呼んでください”って言ってた。んで、Sクラスは第二ブロックの優勝者を含めて4人だってさ。確かにこの学園は少数精鋭だから納得が行く。…さて、お前らも十分ん休んだろ？俺は教室に戻る。間違えずにSランクの教室に行くんだぞ。勿論青龍を連れてな。ああ、それと。今日は帰り遅くなるから適当に晩飯食っておいでくれ。」

それだけ言い残して、龍夜は去って行った。

「兄いはまた玲奈さんですか。」

そう呟きながらも、慶斗は翔太を起こそうとする。魔力が慶斗に比べて少ない翔太は、今だ眠りながら魔力回復に努めているようだった。

「あら、起きたのね？」

白衣を着た女性が入ってくる。保険医だろうと気付くのにそう時間は掛からなかった。慶斗が事情を説明すると、なにやら怪しげな薬を取り出し、翔太に飲ませ始める。

「元氣１００倍、シヨウタマ〜ン！」

どうやら回復は終わったらしい。だが、心なしか頭がパーになっているようだ。 “直ぐ元に戻るわ” と言う保険医の言葉を信じて、慶斗は半ば翔太を引き摺るように保健室を後にするのだった。Ｓラックの教室を目指して。

融合？ ユニルス（後書き）

解説

・ユニルス スペイン系とギリシア系の魔獣を合成させる呪文。慶斗の兄、龍夜が考えた。ただし、魔力消費量に問題あり。

征儀？ フェーゴ（前書き）

今回、伏線を一つ回収します。第一話で、ビルの屋上にいた謎の影です。

征儀？ フェーゴ

生徒手帳に搭載された3Dマップを見ながら、ランク教室を目指す慶斗たち。学園の二年生である龍夜曰く、“学園で3ヶ月も過ごしてれば、生徒手帳は魔石を嵌める以外用途が無い”そうだ。それでも新入生である慶斗は、近未来的科学を使ったこのカード型の生徒手帳が気に入っているようである。やがてSランク教室へと辿り着き、ドアを開いた。

「すいません。遅れました。」

「遅れました。」

「お、来たな二人とも。席に着け、色々やる事もあるしな。」

指定された席に座る二人。慶斗の隣は、あの狼型魔獣を使役する無表情な女子だった。

「それじゃ、自己紹介からするか。俺がこのクラスの担任だ。これからよろしくな。さて、4人しかいないが出席番号順に行こう。まずは泉可憐。」

立ち上がったのは慶斗の隣的女子だった。すっと立ち上がり、誰の顔を見るでもなく、黒板を見つめて喋り出す。…何故かメイド服を着ているのが気になる慶斗と翔太であった。

「泉可憐^{いすみ かれん}。服装に関しては気にしないで。」

そして着席。しばらく沈黙が続いたが、それを破る者がいた。可憐とチームを組んでいた女子である。

「はいはい！私は椎名^{しいな}風沙^{なぎさ}だよ。征儀のタイプはギリシア系で、属性は氷。可愛い物と面白いことが大好きです！因みに可憐のメイド服は、私が着せました！だって無口メイドって萌えない？以上です、ありがとうございました。」

また沈黙が訪れる。どうやら可憐は風沙のおもちやにされてるらしい。一つの疑問を解決した所で、担任が“次は朱雀、頼む”と言った。

「朱雀慶斗です。ギリシア系の征儀で、光属性です。兄いの弟だから出来ると思われてるみたいですが、実際全然強くないので、よろしく願います。」

「青龍翔太だ。スペイン系風属性の征儀を使う。これからよろしく。」

こんな感じで自己紹介の時間は終わったのだった。

「さて、授業を始めるか。」

授業、と言っても今日はクラス決定試験がメインの為、慶斗達は特に筆記用具を持ってきていない。だが、内容は征儀伝なら知っている内容ばかりなので、簡単な復習と言う感じだった。

「さて、征儀と魔力は同じ物だとは知っているはずだ。それを用いて自分の魔獣を召喚する。それが出来る者が“征儀伝”と呼ばれる訳だ。さらに、征儀には2つの種類がある。スペイン系とギリシア系、この二つの見分け方がわかる者は？」

「征儀伝が生まれながらに持っている“魔石”の色です。ギリシア系が白、スペイン系が黒です。また、魔石は征儀伝の命と直結しており、壊されれば死に至ります。」

翔太が答える。担任教師は一度頷いてから話を続けた。

「そうだ。さらに、そこから細かく征儀は分類される。自己紹介にもあったように、属性と呼ばれるものだ。属性の種類を答えられるものは？」

誰もが黙ってしまう。属性は5つあり、更に特殊属性もある為、なかなか全てを覚えるのは大変なのだ。

「風、炎、氷、金、雷が一般的な征儀伝の属性。光と闇属性の征儀伝は少ない。また特殊属性も幾つかあり、確認されている限りでは、暴力と鏡。」

可憐が淡々と答える。しかし、その声には全くと言っていいほど感情が込められていない。

「上出来だ。朱雀達の決勝戦の相手、天馬の属性が暴力に属する。」

暴力と相性がいいのは金属性だ。あのコンビは理に叶ってると言えるだろう。さて、次だ。つい最近、と言うか、たった数時間前に覆された理論がある。異なる系統についてだ。元来、異系統の征儀同士は相性が悪いと思われてきた。だが、技を併せるだけなら相性は良くなる時がある。そして、その概念は今日それは完全に覆された俺の目の前にそれを証明した人物がいる。」

即ち、慶斗と翔太だった。やはり慶斗は畏まってしまうのだが……。「この話は置いておこう。次は呪文についてだ。呪文は三文さんぶんからなる。」

そう言つて、ホワイトボードに教師が書き始めた。

“ 主の命令により、炎の弾丸を放て。バレ・デ・フエーゴ ”

と書かれている。どうやら教師自身の呪文の一つらしい。

「コレは俺の攻撃呪文だ。第一文で魔獣に攻撃の発動を伝える。第二文で攻撃の具体的内容を告げる。そして、一番重要なのが第三文だ。これは三音節で出来ている。第二音節の“デ”は全征儀伝共通だ。第三音節は自分の属性を表している。第一音節は、第二文と意味が同じだ。よし、テストをしよう。それぞれ自分の呪文の第三音節を書き出してみる。」

4人がそれぞれマジックを持って、ホワイトボードに書き記していく。“ブライヤー”“トルメンタ”“イーロ”“ルエーノ”。それぞれ慶斗（光）、翔太（風）、凧沙（氷）、可憐（雷）の物だ。「よし、分かっているな。呪文の第三文だけでも技は発動できる。威力は劣るが、緊急時にはいい有効手段となっている。覚えて置くように。」

「先生。」

手を挙げたのは、なんと可憐だった。ピツと真っ直ぐ伸ばされた腕は確実に地面と90度の角度をなしているに違いない。

「なんだ泉？」

「中国系征儀伝について教えなくてもいいのですか？」

無表情を崩し、一瞬だけニヤリとした可憐。教師はギクツとなったが、直ぐに冷静を装う。

「何だ？中国系征儀伝とは？今の授業で言ったように、征儀の種類は二種類。スペイン系とギリシア系のみだ。」

きっぱりと言い切る教師。だが、可憐は更に続ける。感情の込められていない声がやけに響く。

「認められている”のはその二種類で確かです。ですが、“認められていない”征儀伝がいるとしたらどうでしょう？」

「これで授業は終わりだ。泉は適当な事は言わないように。他の生徒も信じてはいけない。今日はこれで終了だ。明日からは普通の授業に入る為、筆記用具を持参するように。」

教師は教室を後にした。これで解散らしいが、可憐以外の三人は可憐を見る。あの風沙でさえ笑顔を消し、頭にはてなマークを浮かべている。

「泉さん、中国系征儀伝って何ですか？」

慶斗が代表して可憐に聞く。

「何でもない。帰る。」

可憐は席を立って教室を出た。風沙もその後を追い始める。

「帰るか、慶斗。」

「そうですね。帰りましょうか。」

残った二人も寮へと戻るのだった。

夜、ほとんどの人が寝静まった頃、南陽学園から少し離れた場所でその事件は起こった。

「あなた達は何者なんですか！？」

一人の女性が追ってくる二人の影から逃げる。頭から爪先まで黒いフード付きマントを羽織っており、顔もよく見えない。女性は必死で逃げるが、何時の間にか路地へと追い込まれてしまった。

「ひいひい…。こ、こうなったら…。【エクスジェンシア】！」

この女性、実は征儀伝である。彼女が学生の頃は、まだ南陽学園がない頃だったので、特に魔獣を召喚し戦闘をすることもなかった。胸元に下げていた白い魔石の嵌ったペンダントが光り、白鳥の魔獣が召喚される。魔獣は契約者を守るように地面に降り立った。

【主が命令します。氷で相手の動きを封じよ。オブヘルト・デ・イロー！】

白鳥が羽ばたき吹雪を巻き起こす。生身の人間相手に征儀を使うのは法律で御法度とされている。だが、女性に限っては、正当防衛としての威嚇・牽制程度なら使っても罪に問われないのだ。今この女性も吹雪を巻き起こして足元を固定しようと考えてのことである。しかしだった。脚を氷付けにされる直前、二人の影は上空へジャンプしたのだ。しかも人間の常識では考えられない程の高度である。既に飛んでいると言っても過言ではない。予測範囲を大きく超えた相手の行動に驚く女性。それは影にとって最大のチャンスだった。上空に見えない物体でも在るかの様に、空中から加速して地面へと向う。ミサイルのように突っ込んでくる2つの影に、女性はバリアを張って対応する。しかし、いとも簡単に破られる始末であった。一つ目の影がバリアを破壊し、二つ目の影が魔獣に対当たりをした。相手が魔獣なのか人間なのか、はたまたそれ以外なのかは定かではないが、たった一発の攻撃で相手の魔獣を消滅させたのだ。いくら女性が魔獣による戦闘経験を積んでいないからと言っても、影が強すぎる。

「ひい！？え、エクスジェ…」

再び魔獣を召喚しようと試みるが、影が素早く動き女性の喉を締め上げた。地面から体が浮き、脚をバタつかせる。それでも影は気にする事はなかった。更にもう一体の影が、女性の胸元に下がるペンダントを引き千切り、魔石を取り外した。女性は投げ捨てられ、喉を押さえる。だが、魔石を取られた事に気付き、影を見る。

「だめ、返して…」

「やだね。だつてこうするんだから！」

魔石を拳で握ると、パキンと言う音がして白いガラス質の粉が風に舞った。影の一体が女性の魔石を粉々にしたのだ。征儀伝にとつて魔石を壊してしまうのは死と同義。“あっ”と言う小さな悲鳴と共に、女性の体は崩れ落ちるように倒れた。

「任務完了。」

「待つて。まだコイツ、使えるから。」

影の一体が女性の亡骸に近付き、マントの袖を捲く。現れたのはめ込まれた宝石だった。形や大きさを見る限り、どうやら魔石のようだ。しかし、その色はエメラルドの様な緑色をしているのだった。

【我主幻獣命、写彼魔姿鏡。模似】

征儀？ フェーゴ（後書き）

良かったら感想などください。

装甲！ アルマライズ

「とうとう4人目の被害者だな。」

「うん。巷ではクラッシャーなんて呼ばれてるみたいですね。」

クラス決定試験から1ヶ月と少しが経とうとしていた。龍夜の言う通り、生徒手帳に内蔵された3Dマップの需要が少なくなってきた頃の話である。あの試験の当日の夜から、一定の間隔で殺人事件が起きているのだ。一週間に一度、征儀伝が殺されている。死因は魔石を壊されると言う最悪の手段。同じような死因が続いた為、警察も連続殺人事件として捜査に乗り出したのだ。特例として、護身に男でも魔獣召還認められたほどである。しかし、犯人の手がかりが掴めず、捜査は難航していると言う状況。

「スペイン系が3人、ギリシア系が1人。何か意味があるのでしょうか？」

「無い。これは中国系征儀伝の仕業。近い将来の活動を暗示している。」

「だからさ、中国系ってどう言う意味なんだよ？」

「言ったら信じる？」

慶斗の疑問に、無表情なメイド服の少女、可憐は真っ直ぐ黒板を見つめながら答えを返す。入学当初より幾分かは口数が多くなった彼女だが、あの日から謎の存在、中国系征儀伝の事ばかり話そうとするのだった。

「もう、可憐ッたら不思議ちゃんだね！」

「中国系なんて、見た事も聞いた事もないからなあ……。」

風沙と翔太は、特に聞く耳を持っていなかった。具体性が無さ過ぎるのだ。誰もその様な存在を見聞きした事も無く、教師は真正面から否定する。唯一慶斗は、考え込む表情をしているのだが……。

「ただ言える事は一つです。ここは征儀伝が集う学園。クラッシャーなどと呼ばれている殺人犯が狙うなら、ここの学生は格好の獲物

です。気を付けなくてはなりませんね。」

征儀伝のみが狙われる事件の最中、確かに慶斗の言う事は正しかった。これまでに南陽学園の生徒が狙われていないのは偶然なのだろうか？

「よし、今日も授業するぞ。」

担任教師の入室によつて、一時的にお喋りは中断された。

「中国系征儀伝は必ずいる。だって…」

可憐の呟きに、隣に座る慶斗でさえも気付くことは無かった。

それから一週間が経った。放課後となり、慶斗も帰り支度を始める。龍夜との取り決めで夕食は交代制で作る事になっているので、慶斗は今日早めに帰らなくては行けなかったのだ。

「慶斗っちゅ。一緒に帰らない？」

声を掛けて来たのは風沙だった。自己紹介において、可憐のメイド服は自分が着せたと云った女子である。面白い事好きな彼女は、勝手なニツクネームを入学の翌日につけていた。慶斗は“慶斗っちゅ”、翔太は“しょうたん”である。

「ごめんなさい。今日は僕が夕食当番なので、早めに帰らないと兄に怒られるので。」

「えゝ。折角面白い事考えたのにゝ。そうだ、私のお姉ちゃんに頼んで、夕食は作ってもらうからさ、買い物付き合つてよ。」

「お姉さんが、いるんですか？」

「うん。詳しく言えば従姉妹なんだけどね 二学年だよ。」

最終的には了承してしまった慶斗。翔太が少しニヤニヤ顔で見送っていたのが気になる。相変わらず可憐は無表情だったのだが…。

さて、街へ繰り出した二人。風沙に引き摺られるように連れて行かれる慶斗。慶斗がいくら行き先を尋ねても、“いいからいいから”で返されてしまう。

「着いたよゝ。さあ入ろう！」

「ちよつと待ってください。ここって何のお店ですか!？」

「ん？コスプレ衣装のお店だよ？今日は、慶斗っちが明日から着る服を買いに来たんだ。うゝん、執事服よりは可憐とお揃いでメイド服が似合うかもね。」

「凧沙さん、止めておきましょうよ。僕は男ですし、メイド服なんて似合いませんから。」

「レッツ、トライ！」

「嫌ですゝ！」

ジタバタする慶斗を押さえ込んで、凧沙は無理矢理彼を店の中へと連れ込む。10分後、南陽学園の制服をだけさせて、慶斗が店を飛び出してきた。その後を凧沙が追いかける。

「待つてよ慶斗っちゝ！」

「嫌です！そんな服は着たくありません！」

「絶対似合うはずだからゝゝ！」

辺りもすっかり暗くなり、いつの間にか人通りも少くない道に入り込んでしまった二人。先を走る慶斗がふと足を止めた。それに追いつく凧沙、ガツチリと慶斗をホルドする。

「凧沙さん、気を付けて下さい。嫌な感じがします。ゝ伏せてください！」

二人が地面に伏せた瞬間だった。頭上を何かが横切った。ヒュンヒュンと言う音を奏でて、それは弧を描いて闇に吸い込まれていく。ゝ外したか。」

闇から現れたのは、黒マントをすっぽりと被った人型だった。以前女性を襲った影の片割れであるが、慶斗達は知る良しも無い。影は戻ってきたブーメラン型の暗器を袖にしまう。

「誰ですか？」

「クラッシャー、と言えば分かるかな？」

その言葉にハツとする慶斗。凧沙でも笑顔を消し、真面目な顔になる。

「お前らは南陽学園の生徒か。ならば征儀伝。征儀伝は死、在るのみ。」

その言葉と共に、男の右腕から淡く緑色の光が灯った。次の瞬間、影がすごいスピードで迫ってくる。一直線に慶斗達を狙うつもりなのだ。しかし、凧沙が慶斗を弾き飛ばし、彼女自身も反動を利用して避けた為、怪我を負う事は無かった。

「凧沙さん。行きますよ。」

「うん。」

【「エクステンシア！」】

魔方阵が展開され、その中からエンジェルと鹿が現れる。しかし、二体の魔獣を前にしても、影は薄気味悪く笑うのだった。

「無駄だ。そんな巨体で俺を追えると思うのか？」

次の瞬間、再び高速で突進を仕掛ける影。慶斗が光の壁でバリアを張って応戦するが、横に回られてしまう。そこを凧沙が自身の魔獣で攻撃しようと試みるのだが、影は降り注ぐ氷の弾を時には避け、時には素手で碎いて身を守ってしまう。

「素手で魔獣に太刀打ちできるなんて、信じられないです！」

「喋ってる暇は在るのかな？」

いつの間にか、影は二人の背後に回りこんでいた。手には先程の暗器が握られており、完全に息の根を止める事が伺える。影は遊んでいたのだ。わざと魔獣と戦い、そしてそれに飽きたのか、契約者の方を狙うようにしたのだ。

「魔石を渡してもらおう！」

その言葉と共に突っ込んでくる影。銀色の刃がキラリと鈍く光った。魔獣で太刀打ちする時間は無い。慶斗と凧沙が諦めかけたその時だった…。

【「アジエット・デルエーノ」】

「何っ！？グオア…」

横から影に突進した巨体。雷を纏う狼だった。

「あれって！」

「凧沙、朱雀慶斗。怪我は無い？」

現れたのは可憐だった。偶然にも通りかかったらしい彼女は、魔

獣でクラッシャーからの攻撃に横槍を刺したのだ。

「くそっ、舐めやがって…。【召還！】」

さっきより右腕からの発光が強くなった。影がマントの袖を捲くと、そこには腕輪とそれに嵌る緑色の宝石が見えた。次の瞬間、魔方陣が展開され、その中から魔獣が姿を現す。蛇の首を持った亀だった。幻獣の“玄武”にそっくりである。

「あれって、魔獣じゃないですか！？でも、呪文が僕達と違ってます…」

「アレが中国系征儀伝。その内の一人。油断しないで。」

可憐の言葉に身を引き締める慶斗と凧沙。中国系征儀伝の魔獣、いや、幻獣と言った方がいいたろうそれは、異様な雰囲気を感じていた。

【我主幻獣命、滅対象内以風牙！】

スペイン系、ギリシア系とは程遠い呪文を唱える影。幻獣が口から風の刃を飛ばしてくる。さながら、“風の牙”だ。

【エスクード・デ・ブライヤー！】

すかさず慶斗がバリアを張るが、第三文だけの呪文詠唱のせいか、簡単に破られてしまう。相殺されたのが不幸中の幸いだろうか？

【ボーラ・デ・イーロー！】

【アジエット・デ・ルエーノ】

凧沙と可憐の攻撃が幻獣に迫るが、氷の弾は首で、狼の突進は硬い甲羅で受け止めてしまった。

「弱い。まだまだ弱いな。いくら征儀を学んでいるからとは言え、相手にもならん。それに、戦い方も綺麗ごとを並べただけだ。本当の戦い方を教えてやる。」

【我主幻獣命、滅対象内以豪風！】

幻獣が勢いよく回転し、巨大な竜巻を発生させた。それは魔獣ごとと慶斗達を吸い込んでしまう。竜巻から吐き出され、三人が壁や電柱に激突してしまった。凧沙にいたっては気絶してしまう始末である。影の言った、“本当の戦い”の意味。それは、魔獣だけでなく、

契約者さえもまとめて葬り去る事だった。基本、南陽学園の生徒同士の模擬戦においては、魔獣と魔獣を戦わせる。つまり契約者を狙う事は無いのだ。

「他愛も無い。今夜は三つの魔石を壊すことになる。明日は世間が騒ぐはずだ。殺しの規則性が変わるんだからな……」

既に三人の魔獣は消えてしまっている。慶斗と可憐は必死になって再び召還しようとするが、うまく魔力を練る事ができない。

「まずはこの女からだ。寝てる間に死んでもらおう。魔石ではなく、首を切られてな……」

影が狙ったのは風沙だった。しかも魔石を破壊するのではなく、首を切ると言っている。殺し方さえ変わったのだ。影がずっとあの暗器を取り出す。銀色に光る三日月形の刃物を。

「止めてください！彼女を殺さないで！」

慶斗の必死の叫びも虚しく、影は一步、また一步と風沙との距離を縮めていく。

「死ね、征儀伝！」

【主が命令する。】

「ん？」

影が刃物を振り上げた時だった。誰かの声が聞こえた。そして、暗闇の中から誰かが走ってくる。

【力の一部を契約者に譲渡しろ。アルマライズ！】

「兄い！」

現れたのは、龍夜だった。手には闇色の刀を握っている。それを振りかぶって影に斬りかかった。影は自分の刃物でそれを弾き返し、バックステップで後退する。

「大丈夫か？俺がコイツの相手をするから、お前らはこの女子連れで逃げる。」

「はい！」

風沙を慶斗と可憐が担ぎ、安全な場所へと運んでいく。影はそれを特に追う事は無かった。

「なかなかジエントルマンじゃないか。手負いを追わないなんて。」
「お前と遊んだ方が、楽しいと思っただけだ。」

次の瞬間、銀色の刃と漆黒の刀が火花を散らした。リーチの差では龍夜が勝っているが、振り回すスピードに置いては影が勝っている。それでも龍夜は攻撃を受け止め、反撃を返すのだった。

「なかなかやるじゃないか。名前を聞いておこう。」

「朱雀龍夜。」

「ああ。呪文を開発する天才学生か。こんな所でお会いできるとは、身に余る光栄。こちら名乗るのが礼儀だが、生憎名乗る名前は持つてないのでね。まあ、強いて言えば中国系征儀伝と言った所か。」

「やはり学園長の言う通り……」

「首領の最も恐れる人物の事か。まあいい。今日は引く事にしよう。」

「おっと。そういう訳には行かないから！」

今度は龍夜が刀を振るう。影も負けずに攻撃を受け流す。一旦距離をとった二人。再び接近し合い、互いの武器をぶつけ合う。影の武器が吹き飛ばされた。続いて影のわき腹に峰打ちがヒットする。体勢を崩し、地面に倒れこむ影。そこに光が差した。

「その二人！動かずに大人しくしなさい！」

どうやら警察の人間のような。それを見て龍夜は刀を杖に膝をついてしまった。影の絶好のチャンスに見えたが、警察の応援が来ては不利な状況。魔石を淡く発光させ、夜空に飛び上がって逃げた。

「っ……。意外に魔力食うな、この技……。」

装甲！ アルマライズ（後書き）

アルマライズ 数話後に解説予定。征儀を具現化して武装する、征儀伝の物理的手段。

中国系征儀伝 いまだ謎が多い存在。魔石の色は緑。魔獣を召還できる上、人間離れた運動能力を持つ。（魔獣を素手で相手にできるほど。）

組織？ トルメンタ

「天才学生、またもお手柄。 昨日午後8時過ぎ頃、再び連続殺人事件が発生した。狙われたのは南陽学園の3人の生徒。いずれも今年の入学生であった。しかし、持ち前の征儀で応戦する。情報に拠ると、クラッシャーの正体は征儀伝らしく、魔獣を召還したと言う。圧倒的な力の差に危機に陥るが、そこに現れたのが今注目されている天才学生、朱雀龍夜さん（南陽学園2年、17歳）だった。彼は最近異系統の魔獣に関する理論を、根本から覆した事によって学会を騒がせているが、更に昨日は新しい呪文を発動した模様である。クラッシャーとの互角の戦いの後、何と撃退に成功。当初狙われた三人も怪我を負った物の、無事だったと言う。このことは事件解決の大きな一歩となる事が予想されており、警察からは感謝状が当人に送られる事が発表されており……」。すごいな、龍夜先輩。」

長い記事を朗読し終えた翔太が、新聞の切り抜きから顔を上げて慶斗を見る。教室にいる翔太以外の生徒は、包帯を何処かしらに巻いていた。

「うん。だけど兄が寮に帰ってきた時、本当に疲れた顔してました。今日も警察でお話してくるそうです。」

「中国系征儀伝はいた。昨日の奴が証明。」

「そうね。ゴメンね、可憐。今度もっと可愛い服持ってくるから許して？あつ、そうそう。今日は慶斗っちに服を着てもらおうと思つて、徹夜して作りました。」

紙袋から出したのは、この学園の女子の制服だった。わざわざ作らなければならないが、風沙が元気である事は分かった。

「い、嫌ですよ……。そんなの僕、着られませんから……。」

「えー、折角作ったのに……。ほら、胸の部分にパット入れたから、慶斗っちでも大丈夫だって。」

「そういう問題じゃないんですう！」

昨日の追いかけっこの続きが始まってしまっ。だが、昨日慶斗は脚を痛めており、直ぐに捕まってしまった。

「更衣室へ連行しまっす！面白いことが始まるよっ。」

ルンルン気分の凧沙と、半泣き状態の慶斗が教室を後にした。だがやはり、メイド服の可憐は我関せずと言った様子を見せるのであった。沈黙が続く教室内。いつもなら凧沙が騒ぎ出したり、慶斗に話しかける事が出来る翔太だが、どうも気まずい雰囲気である。

「あ、あのさ…」

「何？」

「慶斗たちの話で、お前の言ってた中国系征儀伝の存在が本物だった分かったじゃん。聞き流してて悪かった。ごめん…」

「別にいい。」

「でさ、泉はどうやって知ったわけ？」

「秘密」

「もしかして知り合いがいるとか？」

「…いない。」

そこで初めて可憐が動いた。首を回して、黒板から翔太を見る。特に感情の込められてない瞳は、何でも吸い込んでしまっブラックホールの様だった。

「もしあなたが、中国系征儀伝でないなら。」

「俺はスペイン系征儀伝だから。」

冗談を言っ たつもりなのか？と戸惑う翔太。そこに担任教師が入ってきた。

「あれ、朱雀と椎名は何処に行った？泉も含めて話があるんだが…」
「俺は抜きですか？先生…」

「まあな。昨日の事件の事だから。学園長が呼んでたんだ。何処にいるか知らないか？」

「ああ…。ちよっと人生の転換期に入ったらしくて。」

翔太の言葉に、頭にクエスチョンマークを浮かべる教師。可憐の

視線は再び黒板へと移っていた。再びの沈黙。それをいい具合に破った声があった。

「先生おはようございま〜す！」

「ああ、椎名か。朱雀を知らないか？…ん、誰だ？」

教師の目は、凧沙が手を引く一人の学生に注がれた。凧沙と同じ制服を着ていることから、女子だとは伺えるのだが…。

「はい。慶斗っちならここにいますよ。ちょっと昨日の事件に遭遇してから、こうなっちゃって…」

盛大に突っ込みを心の中で入れた翔太。どんな事件に遭遇したら女装に走るんだ！と言おうとする。しかしだった。教室の中に入ってきた慶斗を見て、啞然としてしまう翔太。

いつもは目の上までかかる前髪は、ピンで押さえられている。サイドもヘアバンドが何かでアクセントが付けられていた。目を赤くして、半泣き状態でスカートの端をちょこんと摘み、俯いていた。

「慶斗、だよな…？」

「剥かれました。ぐすん…。僕は赤ちゃんではないのです…。でも、裸に剥かれました。もうお嬢にいきません…。」

目の前のか弱そうな美少女（実際は慶斗）に、“お嬢じゃなくてお嫁に行けないだよ”と思わず心の中で突っ込んでしまう翔太だった。

「えっと、あー、朱雀…。心理カウンセラーが必要ななら、先生に相談してくれ。いい人知ってるから。」

どこをどう言う方向性に勘違いしたのか、先生は朱雀に対してこう優しく言うのだった。

さて、とりあえず学園長の元まで向う慶斗、凧沙、可憐。担任教師もついて来ていた。即ち、翔太のみが教室に残っている状態である。“学園長室”と書かれた看板のドアを軽く叩き、ドアを開いた。「すいません学園長。遅れました。この三人です。」

「やつほ〜、お爺ちゃん来たよ〜。」

「風沙、学園内では爺の事は学園長と呼べと言っただろ。」

風沙を咎める若い青年。何を隠そうこの南陽学園の学園長である。しかし、年齢は見た目20代程度。しかも、風沙の祖父だと言うのだ。見た目と実年齢にギャップがあるが、それは公にはされていない。

「そんな事より。昨日の事件だが…。あれ？確か朱雀龍夜の弟がいるはずだと思っただが…。全員女子だな…。」

兎に角、メイド服の可憐に突っ込むかと思われたが、どうやらどうでも良かったらしい。

「この娘がその弟だよ。お爺ちゃん 昨日の事件でこんなになっちゃいました。」

「そうか。それは大変だったな。」

この学園の未来が大変心配になる会話だった。果たして、この見た目青年の学園長は大丈夫なのであろうか？

「まあ、話は置いておき。昨日の一件で色々君達には怖い思いをさせてしまった。すまない、学園側の失態だ。生徒会が動き出した直後の為、警備が行き届いていなかったんだ。で、今日来てもらったのは他でもない。クラッシャーについてだ。あいつは、朱雀龍夜が駆けつけるまで、何か特別なことを言ったりしていなかったか？どんな些細な事でもいい。警察よりこの方が話しやすいだろうと思っただけだ。」

そこで一息つく、三人に座るように促す。自ら紅茶を入れて三人に手渡した。口を開いたのは可憐。

「昨日の彼は中国系の征儀伝。自分でそう言っていた。」

そこで学園長と教師がビクツとなる。今の可憐の視線は紅茶に注がれている。一口飲んだ。心なしか、口元が緩んでいるようにも見える。

「そうか…。予測はしていたが、やはり…。」

可憐の言葉を聞くと、学園長は卓上の電話を取り、二言三言。そして学園長の指示で、学園長室から空き教室へと場所を移すのだっ

た。

「集まってるな。」

慶斗たちが空き教室に入ると、そこには既に10人程度の生徒がいた。その中には、龍夜や翔太もいる。

「あ、兄い。警察から戻ってたんですね？」

「えっと…。誰だい？」

「兄い！？僕の事が分からないのですか？」

「えっと、まさかとは思うが…、慶斗？」

「そうです、慶斗です！よかった、兄いが僕の事を覚えててくれました…。」

「…こんな妹、欲しかったんだよね…」

「兄い？何か言いましたか？」

少々龍夜の変な性癖が見えたところで、誰かがやって来た。ロングヘアの少女である。

「龍夜、どうかした？…あれ、この子可愛い！」

この少女、名前を橋本玲奈はしもと れいなと言って、龍夜の彼女だったりする。

しかも学園長の孫だ。その為、龍夜は学園長ともそれなりに面識があるのだ。

「そうでしょ、お姉ちゃん。」

即ち、同じく学園長の孫である風沙とは、従姉妹の関係にある。

しかし、女装のシヨックから立ち直れない慶斗は、気付かずにいた。因みに、この教室に集まっている生徒たちは、全員Sクラスの生徒である。大雑把に言えば、各学年トップクラスの生徒たちを集めて、学園長が何かを始めようと言うのだ。

「それでは、生徒会長。よろしく頼む。」

眼鏡を掛けた知的な男子生徒が、教壇に立って話を始めた。

「生徒会長の籐馬とうまだ。最近起こっている連続殺人事件について、我々生徒会も動き出していた。だが、その矢先に昨日の事件だ。このままでは、いつまた生徒の誰が襲われるか分からない。そこでだ、

学園長より一つ提案があつた。Sクラスの生徒を集めた学園守衛組織を作る案。目的は生徒の安全の確保を第一に掲げている。今日はその是非を問いたい。異論はあるか？」

生徒会長の言葉に、誰もが真剣な表情で聞いていた。誰も異論をしようとはしない。それを見て生徒会長は一度頷いた。

「よし、では異なる論がないならこの案は成立だな。Sクラスの生徒の有志を募りたい。時間がある者だけでいい。すまないが俺は生徒会の仕事で手一杯の為、辞退する。」

ザワザワと話し始めるSクラスの生徒。特に三年生としては、大
学へ進学するか否かの大切な時期であるのだ。

「翔太はどうしますか？」

「そうだな…。因みにお前はどうかんだ？慶斗。」

「僕は…、入ります。誰も傷ついて欲しくないんです。だから、僕、頑張りたいです。」

「んじゃ、俺もやりますか。」

各個人の意見が固まった頃を見計らつて、生徒会長の籾馬が話を続ける。

「今日の放課後、有志は再びこの教室へ。それでは解散。」

中国？ イーロ（前書き）

はい、このところ毎日更新してます。今日で5日連続？でしょうか？読んでくださる皆さんには感謝です。

中国？ イーロ

その日の放課後、慶斗と翔太、そして凧沙と可憐は再びあの教室を目指していた。やはり慶斗の女装と可憐のメイド服は変わらないのであったが…。

「失礼します。一学年の希望者です。」

「入りなさい。」

四人が教室に入ると、既に数人の人影があつた。学園長に龍夜、そして玲奈に見慣れぬ二人の人。

「兄い！」

「お姉ちゃん」

それぞれが龍夜と玲奈に駆け寄る。この時初めて、4人は互いの関係を知ることとなるのだった。

「兄いもこの集まりに入るんですね！嬉しいです！玲奈さんもお久しぶりです。」

「慶斗君、久しぶり。よく似合ってるわね。さっきは気付かなかつたよ。」

「嬉しくありません。椎名さんに…」

「凧沙にやられたんだ。アハハッ、あの子らしいね。」

「お知り合いですか？」

「うん。従姉妹なんだ。」

その時、後ろから凧沙が現れる。女装の慶斗にギューツと抱きついた。

「可愛い可愛い。可愛くて面白い あれっ、お姉ちゃんも入るんだ。慶斗っちと知り合い？」

「まあね。」

「玲奈さんは兄いの彼女なんです。」

「えっっ！お姉ちゃん彼氏いたの？しかも慶斗っちのお兄さんって、あの朱雀先輩だよな？お爺ちゃんの権力使ったの？」

「それはないよ。俺は玲奈が好きだから。なあ、玲奈？」

龍夜が玲奈の肩を抱き寄せる。そんな龍夜の態度に玲奈は顔を赤くした。慶斗は“いつもの事だから”と特に気にしていない様子だったし、凧沙は凧沙でニヤニヤしている。どうやら彼女の中では、目の前の光景が面白いものとして認識されているようだ。

「それにしても、慶斗もやるな、このこの。」

龍夜が慶斗と凧沙の関係を勘違いしたのか、冷やかしてくる。今度は慶斗が顔を赤くする番だった。

「あ、兄い！僕と凧沙さんは別にそんな関係ではありませんん！！」

「そうですよ 慶斗っちは私のおもちやですから。」

何かと突っ込み満載の言葉を放った凧沙。慶斗が何か言おうとしたのだが、それは誰かの入室に遮られた。

「すまぬ、遅れたの。」

「類、遅い。」

なかさとい

彼の名前は、中里類。龍夜と同じく二年生のSクラスで、スペイン系風属性の征儀伝である。龍夜とは小学生時代からの付き合いで、クラス決定試験でもチームを組んでいた経緯があるのだ。時代掛かった喋り方だが、それも彼の特徴の一つである。

「では、これくらいにして、始めるとしよう。」

学園長が話を始めた。

「巷ではクラッシャーと呼ばれる殺人鬼の話だが、一部の人間にしか知らされていない事実がある。君達には教えておくべきだろうと思う。…実は、あの者はスペイン系でもギリシア系でもない征儀伝だ。」

慶斗、翔太、可憐、凧沙、龍夜以外が驚いた表情をする。それもそうだ。征儀伝であるのに、どちらの系統にも属さないと言うのだから。

「あれは、中国系征儀伝と言う。隠された第三の系統と言うべきだな。だが、その存在は闇に葬られていた。それが最近になって、活

動を始めたのだ。因みに、我々が召還するのは“魔獣”だが、中国系が召還するのは“幻獣”と呼ばれている。これはまた後で話をしてもらおう。決して命を落とすことはない様に。後は龍夜君、頼んだよ。」

その言葉を残して、学園長は去っていった。やはり歩き方一つ見ても、歳を感じさせない。いや、見た目ほどの若さを見せ付けるのであった。学園七不思議のひとつでもあるだろう。学園長が出て行った後、代わりに龍夜が教壇に立った。

「学園長から、この集まりで手ほどきをする事になった。俺にできる事は全て教えようと思う。三年の先輩に笑われないよう努力するのでよろしく。早速だが、思い立った日が吉日だ。模擬場^{もぎば}へ向ってくれ。」

模擬場とは、慶斗たちがクラス決定試験を行った場所でもある。征儀伝が召還魔獣を用いて模擬戦をする場所だ。今は観客席は取り外され、閑散としていた。「一列に並んでくれ。コレから中国系征儀伝と、それに対処する方法を教える。」

龍夜の話に抛れば、中国系征儀伝は幻獣を召還出来る他、征儀を体全身に纏うことにより、身体能力の大幅な向上を可能にするのだ。一連の事件において、魔獣の対応できないような超高速は、この能力によるものだという。

「そこでだ。俺の新しい呪文なら中国系征儀伝にも対抗する事ができる。適当な名前だが、^{アルマライズ}“装甲征儀”と名付けた。」

- 装甲征儀。魔獣による攻撃が効かない中国系征儀伝への唯一の対抗策。征儀伝の物理的手段と言ってもいいだろう。魔獣の力を一部だけ契約者である人間へ渡し、それを具現化する呪文だ。具現化された征儀は武器となる。

「一番最初に学ぶのはコレだ。各自練習してみろ。」

慶斗たち一年生組みは、一塊になって練習を始めた。同じ呪文を詠唱するにしても、征儀伝の口調などから微々たる差異が見られる事がある。この時もそれに則るのだった。

【主の命令です。力の一部を契約者に譲与せよ。アルマライズ！】

【主の命令だ。貴様の力を俺に宿せ。アルマライズ！】

【主の命令、お前の力を契約者に渡しなさい。アルマライズ！】

【主の命令よ。あなたの力を私に貸して。アルマライズ！】

上から慶斗、翔太、可憐、風沙である。普段の口調が大きく関係しているのだ。それぞれ自分の魔石がはまる生徒手帳を構える。魔石が発光し、4人の手の中で収束し始めた。しかし、そう簡単にはいかないのが現実。

「あれ？」

風沙が怪訝な声を出す。風沙を初めとして、翔太や可憐の武器は消えてしまったのだ。慶斗一人を除いて……。魔石からもれ出た光が収縮するとそこには、白い刀があった。形や大きさは兄である龍夜と同じもの。だが、龍夜の漆黒の刀とは違い、色が白銀に統一されていた。まるで、自分のエンジェルドラゴンの鱗を削って作ったかのような。

「すごいな慶斗。一発でできるなんて。」

翔太が感嘆の声を漏らす。恥ずかしそうに頭を掻く慶斗。龍夜がやって来た。

「できたか、慶斗。」

「はい。兄いとお揃いです！」

嬉しそうに微笑む慶斗。だが、今の彼は女子の制服を着ている。

もはや妹だった。因みに、一学年の中で慶斗のみが装甲正義を成功

アルマライズ

させたのには訳がある。それは、慶斗の魔力の量にあった。慶斗の魔力保持量は非常に高い。また、魔力や征儀を練り上げ武器を作るなどという技術は、征儀の扱いに長けている必要がある。入学したばかりの一年生にそう簡単にできるはずがないのだ。慶斗は溢れるばかりの魔力を人より余計に使う事によって、武器の形を維持しているのだった。即ち、いくら慶斗であろうとも、魔力保持量が人並みであればアルマライズは成功できないと言う事だ。

「いいか、普通に作るだけでは魔力の消費量が高い。コツは魔力の

密度を高めることだ。そうすればさつきより少ない魔力で武器を作れる上に、強い武器を作ることが可能になる。難しいが、お前らSランクならやれるはずだ。」

再び意識を集中させる4人。魔力の練成とでも言うのか、文字通り魔力を練り上げるのだ。意識を集中させ、それぞれが使役する魔獣の力を自分に纏わせる。

「おお！」

閉じていた目を開けた翔太が歓喜の声を上げる。彼の手には槍が握られていた。先端部分に蝙蝠の翼を模した装飾が施され、十文字槍のようだ。

風沙の手には、弓が握られている。まるで氷の様な透き通った青色をしている。

可憐の手は見えなくなっていた。両手甲に纏ったガントレット、彼女の魔獣である狼の頭部を模したそれは、狼の牙に相当する刃を不気味に光らせている。

「今年のSランクの新生、潜在能力高すぎないか？」

後ろの方で装甲征儀に四苦八苦する三年が、ポツリと呟いた。今のところ、男子女子の一人ずつが三年からこの集まりに参加している。周りの下学年が成功させていく中、少々焦っている様にも見える。

「一旦終了にしよう。日ごろから練習してくれ。それじゃ、魔獣で模擬戦でもやってみるか？」

中国？ イーロ（後書き）

分からない点、批評がありましたら、送ってください。直ちに納得のいく様に説明させて頂きます。自分だけ突っ走って、読者の方に伝わらない事があるのは、作者としてどうかと思ひまして。（私が言えた義理じゃありませんけど。）

嫉妬？ アジエッタ（前書き）

今日も投稿〜。

嫉妬？ アジェツタ

龍夜の提案で、突然始まることとなった模擬戦。ランダムに決められた相手同士で戦うのだ。そんな中、三年生は比較的余裕そうな顔をしている。確かにこの集まりの中では、一番征儀を扱っている時間が長い。まあ、危険視するべきは神童などと呼ばれる、二年生の朱雀龍夜一人だろうか。

「それじゃあ、第一回戦。」

龍夜が二枚の紙を抜き取る。それに誰かの名前が書いてあるのだ。椎名風沙と玲奈。」

呼ばれたのは従姉妹同士だった。それぞれ壁の隅から中央まで出てくる二人。風沙はにこやかに、玲奈はお淑やかに。それぞれが向かい合った。

「お手柔らかにね、お姉ちゃん。」

「分かってるわよ。風沙。」

【「エクスジェンシア」】

風沙は立派な角を持つ鹿、玲奈は鷹だった。魔獣と言うのは、一人につき一体が原則であり、どのような姿勢を持つのかも個人で変わる。また、系統にも寄る場合がある。時たま、異なる系統同士の征儀伝が同じ種類の魔獣を召還する事例が見られる。だが、それは大半が兄弟の場合である。龍夜と慶斗の様に。

「ギリシア系同士か…。玲奈の属性が雷、椎名が確か氷だったな？」

慶斗の隣に腰掛ける龍夜が話しかけてくる。慶斗はうなずいて肯定の返事を出した。基本的に属性間に優劣の差はない。征儀伝自身の魔力保持量や経験、スキルなどに関わるのだ。レポートを取る龍夜。新たな呪文研究の為だろうか？

【主の命令よ、氷の弾丸で相手を穿て、バレ・デ・イーロ！】

風沙の鹿型の魔獣が前足を上げ、一気に振り下ろす。角から無数の氷の弾丸が発生し、玲奈に襲い掛かる。

【主の命令よ。雷の盾で攻撃を防げ、エスクード・デ・ルエーノ！】
幾分落ち着いている様子の玲奈。焦る事無く氷の弾丸を全て、雷の盾ではじいてしまった。これが経験の差なのだろうか。だが、凧沙も持ち前の明るさゆえか、ニコニコしている。

「やっぱりお姉ちゃんって面白いね。でも、あの時の格好してもらうと、もっと可愛くなれるよ。」

「お願い…、あの記憶を掘り出さないで…。」

なにやら二人にしか理解できない話をし始める。今だニコニコとする凧沙に、少々顔を引き攣らせた玲奈。慶斗が龍夜のレポートを覗き込むと、“玲奈の過去に何かあり。確認の必要あり”と書かれている。研究に必要だろうと思ったのか、慶斗は特に何も言わなかった。

【主の命令よ、脚を掬う氷の罠を仕掛けよ。トラーマ・デ・イーロ！】

経験の違いから、通常の攻撃では不利と思っただらしい。凧沙の魔獣は角から冷気を発生させ、フィールド上を氷付けにするのだった。しかし、玲奈側の魔獣は鷹である。いくら今は地面に脚をつけてるとは言え、上空に上がってそこに留まってしまうえば意味がないのだ。
「凧沙？どう言うつもり？」

「ふふうん。お楽しみ。」

「まあいいわ。折角だけど、決着を付けさせてもらうわ。」

【主の命令よ。全てを燃やし尽くす天の雷を。ファイナーレ・デ・ルエーノ！】

以前龍夜が慶斗に対して使用した技。属性が闇から雷へ変化していることを除けば、必殺技級の上級征儀には変わらない。鷹型の魔獣の翼に電撃が通り、凧沙のいる場所へいく千もの雷が落とされた。逃げ道を塞がんとばかりの落雷。通常では逃げ切れない。

「行くよ、用意はいい？」

ただ技を受けるしか無いと思われた凧沙だったが、ここで予想外の動きに出た。何と、魔獣に飛び乗ったのだ。それだけではない。

凍ったフィールドを勢いよく滑り出す。電撃を器用に避け、ついには上級征儀をかわしてしまった。

「残念だね、お姉ちゃん。別にお姉ちゃんを罠に掛ける為の呪文じゃなかったんだよ。」

フィールドを滑り切り、玲奈に接近する風沙。最初からコレが目的だったのだ。フィールド上に一見無駄に見える罠を仕掛ける。だが、それは自分の高速移動手段としての物だったのだ。しかも、契約者さえ倒せば問答無用で勝つことができる。

【主の命令よ、対象を跳ね飛ばす突進攻撃を。アジエッタ・デ・イロー！】

氷をアイスリンクの様に滑る魔獣と、それにまたがる風沙。一度円を描くようにフィールドを一周し、そして一直線に玲奈へと向う。いくら玲奈がバリアを張った所で、この突進攻撃は免れないだろう。「私の勝ち」

しかし、突然異変が起こった。玲奈の頭上に滞空する魔獣が忽然として消えたのだ。前だけを見る風沙は気付こうとしない。当の玲奈は後ろ手を組んで、目を閉じている。次の瞬間だった。

【アルマライズ！】

龍夜の新呪文、装甲征儀。それを使用した玲奈の背中には、彼女の魔獣の翼が装着された。それを用いて飛び上がる玲奈。角での攻撃を仕掛ける風沙の魔獣だが、対象が小さすぎた為不可能だった。

突進する対象を失った為、急停止する鹿型の魔獣。風沙は玲奈の姿を探した。

「どこ！？」

「ここ。」

カチツと、風沙の頭に銃が当てられる。魔獣の翼を持った玲奈だった。

「えゝ！私の負け！？」

「そういう事。だからいつも風沙は詰めが甘いって言われるの。」

「勝者、橋本玲奈。」

龍夜の声がフィールドに流れる。風沙と玲奈の二人が戻ってきた。
「龍夜あゝ。勝ったよ、褒めて褒めてゝ！」

戻ってくるや否や、一目もはばからずに龍夜に抱きつく玲奈。

「あ、あのさ、それは二人きりの時につて…。」

小声で龍夜が呟くが、玲奈は言う事を聴こうとしない。周囲の間は、“まあ朱雀龍夜だから”と言う理由で何も言わないし、冷やかもしない。全てにおいて完璧な朱雀龍夜なら、これ位はおかしくないだろうと言いたげだった。

【アルマライズ…】

次の瞬間聞こえた呪文。龍夜が何かを感じ取ったのか、玲奈を突き飛ばした。離れた二人の間に、白い斬撃が走る。横を向いてみれば、白銀に輝く刀を持った慶斗が立っていた。もちろん、女子の制服を着ているが。

「兄いにそうやってベタベタくっ付くなんて、僕が許さない。…あれ？どうして僕はいつの間に刀を持っているのでしょうか？あ、しかも兄い達に向けてます…。ご、ごめんなさいです！」

スゴスゴと下がる慶斗。フィールドにいるほぼ全員が硬直した。白い魔石を持つギリシア系の慶斗のはずなのに、黒いオーラを纏っている様に見えたのだ。実の兄の龍夜でさえ、戦慄が走ったほど。普段の敬語も忘れるほどの慶斗だったが、口調が元に戻るとオーラも消えるのだった。

「うわあ、ブラコンの妹キャラだゝ。やっぱり可愛い！」

呑気に笑う風沙であった。やはりメイド服を着た可憐は無口無表情だったが。

嫉妬？ アジエッタ（後書き）

・一見、慶斗がチート立場に見えますが、彼はそうではありません。基本的に彼は魔力が多いだけで、呪文だって基本的に龍夜に頼りきりです。龍夜がチートなのです。だって、本来魔力量で押せば勝てる慶斗ですが、龍夜は呪文の多様さで慶斗を倒すんですから。しかも自分で呪文を作ってるとか、かなりチートです。魔力量任せの慶斗と、技の龍夜ですね。

双剣！ モルデイス（前書き）

今回も戦いばかり。

双剣！ モルデイス

「まあ、気を取り直していか。んじゃ次は…」

龍夜が引いた二枚の紙。“青龍翔太”と“中里類”だった。呼ばれた二人は前に出る。龍夜の掛け声で二人は召喚呪文を詠唱した。

【「エクステンシア！」】

お互い黒の魔石が発光し、黒い魔方陣を展開する。そこから召喚される翔太の蝙蝠に、類の鮫^{サメ}。

「へえ、氷属性ですか？」

「いいや、お前と同じ風属性ぢや。」

「奇妙な組み合わせですね。」

「よく言われるぢやき。」

鮫型の魔獣で風属性。翔太の言う通り、奇妙な組み合わせである。しかし、魔獣と属性は生まれつき決まっており、生きている間に変更する事ができない。その為、時たま類の様な征儀伝が現れるのだが、その様な征儀伝は基本的に魔力で劣ることが多い。類もその範囲なのだが、Sクラスにいますと言う事は…

【主の命令ぢや、対象を吹き飛ばす竜巻を成せ、トルナ・デ・トルメンタ！】

鮫型魔獣がその場で急速回転し、竜巻を作り上げる。

「先輩がその技なら、俺も！」

【主の命令だ。対象を吹っ飛ばす竜巻を作れ、トルナ・デ・トルメンタ！】

蝙蝠の羽から竜巻を生成する。類の魔獣と違い、翔太の魔獣は両方の羽から作れる為、竜巻は二つとなった。合計三つの竜巻がフィールドの中心でぶつかり合い、互いの力を負かそうとする。

「慶斗。青龍には悪いが、この模擬戦は青龍が負ける。」

龍夜が己の推測を慶斗に告げた。確かに同じ属性を使うにあたっ

て、類の方が長く征儀を扱っている。だが、先程も述べたように、類の魔力は弱い。今この時も、類側の魔獣の放った竜巻が力負けしている。

【主の命令ぢや、風の弾で相手を穿て。バレ・デ・トルメンタ！】

【主の命令だ、風を纏いて己を守れ、エスクード・デ・トルメンタ！】

風の弾丸と風の盾がぶつかる。しかし、クラス決定試験でも防御の甘さが表に出ていた翔太だ。いくら弱い類の攻撃でも、数発に一発の割合で攻撃を受けてしまう。苦手な防御に徹しながらも、必死にこの状況を覆す策を考えていた。

「椎名みたいに魔獣に乗るか？それともあの先輩みたいに装甲正義を使うか？」

どちらにしろ、不利なこの状態を脱出したとしても、次の攻撃で更に厳しい状況になる事は必須だ。だからと言って、この状態を続けたとしてもいずれは負ける。

「どちらにしてもやられるなら、足掻くか。それが俺らしいしな。」
絶え間なく打ち込まれる弾丸、そのタイムラグを狙って飛び出した。自分の後方で風の弾丸が炸裂する。脚をとられて転びそうになったが、それでも走る。呪文を詠唱した。

【主の命令だ、突風を巻き起こせ、トルメンタ・デ・トルメンタ！】

呪文の第三文、その第一音節と第三音節が同じ。これが意味するのは、“最弱”。征儀伝がまず手始めに覚えるのが、属性名をそのまま呪文にしたものだ。魔力消費が小さいが、攻撃威力は皆無。しかし翔太はそれを逆に利用した。呪文詠唱と同時にジャンプする。魔獣の作り出した突風に乗って、翔太は一直線に類の方へ突っ込む。その速さに風の弾は追いつく事ができない。

【アルマライズ！】

続いて装甲征儀を発動する。今だ突風に乗る翔太の手に、十文字槍が握られた。

【主の命令ぢや、敵に喰らい付け、モルデイス！】

「何!？」

今までに無い呪文詠唱の仕方。通常なら、呪文の第三文には自分の属性を表す単語が付くはずなのだ。風属性の征儀伝なら“トルメント”という様に。

「なるほど。類のやつアレを使っただけだ。」

「うん。アレですね、兄い。」

「アレって何？」

頷き合う朱雀兄弟に、問いかける風沙。

「^{ノー・ティガ}無属性呪文”です。”

慶斗が質問に答えた。無属性呪文、慶斗もこの呪文の開発には関わっていたので、よく知っていた。いや、類の為に開発したと言っても過言じゃないだろう。これは文字通り、属性に関する攻撃ではない。この呪文発動時は、魔獣その物の力が決め手となる。魔獣の大きさは一概に5m程度。しかし、魔獣自体の攻撃力は違う。類の魔獣は属性との組み合わせが、そこまでいい物ではない。その為、魔獣自体の攻撃力を上げたのだ。よって、他の征儀伝の魔獣より素早い動きが可能となっている。

「でも、しょうたんのバリアに勝ってたよね?あの先輩。」

「あいつはヘラヘラしてる様に見えるが、影で相当な鍛錬を積んでいるんだ。」

人は見かけに寄らずというが、彼によく合う言葉だ。

一直線に突っ込む翔太。それに喰らい付こうとする鯨。中国征儀伝の様な肉体的チートスキルは使えない為、槍をつつかえ棒に危機を逃れる翔太。地面に降りた。

【アルマライズ】

類も翔太のように装甲征儀を発動する。類の武器は、鯨の歯を模した双剣だった。翔太も落ちてきた槍を拾い、構えた。

リーチの長さで類を追い詰めようとする翔太。それを双剣で器用

にはじく類。確かにリーチの長さでは翔太が有利だ。しかし、振り回しに難があるのは事実。攻撃も何時の間にかパターン化されてしまう。

「せいやっ！」

上から槍を振り下ろす翔太。重さも含めた攻撃だ。だが、それを類は双剣をクロスさせて受け止めた。

「甘い、攻撃のパターンも魔力の練り加減もぢゃ！」

双剣で槍を軽くはじき、槍を蹴り上げた。バランスを崩してよるける翔太。その隙を見て、類が双剣を構えて突っ込んできた。慌てて槍の持ち手でガードし、バックステップで逃れる。

「喧嘩では負けないつもりだったんだけどな……」

弱気になる翔太だが、類は攻撃の手を緩めようとはしない。両手の双剣で変則的な攻撃を出してくる類。防戦一方の翔太。両腕を横に開くように双剣で切り裂く。先程のように持ち手でガードするが…

「嘘ッ、やばいっ！」

双剣によって槍が三つに切られてしまった。驚きのあまり動けなくなってしまう翔太。類が首筋に双剣を当てられ、勝負は付いたのだった。

双剣！ モルデイス（後書き）

・呪文の第三文の、第一・第三音節が同じ場合、最弱の呪文となる。
しかし、人間相手には効果大。例：トルメンタ・デ・トルメンタ（
風属性）

ノイ・ティボ
・無属性呪文は、属性の魔力攻撃ではなく、魔獣自体が攻撃をする。
可憐の魔獣（狼型）などが行う突進攻撃があるが、あれは属性の魔力を纏っている攻撃なので違う。

手甲 モルド

「三回戦いくか。」

引き出した二枚の紙。“泉可憐”と三年生の男子だった。三年生の出番はこれ以降ないかもしれないので、名前は伏せておこう。

「あれ？泉は何処だ？」

龍夜が辺りを見回す。確か可憐の姿が見えなかった。

「私はここにいます。」

いつもと変わらず無表情でメイド服の可憐が模擬場に入ってきた。何時の間にか何処かへ行き、何時の間にか戻ってきたのだ。もし、翔太の模擬戦が長引いていれば、可憐の出入りは誰にも気付かれていなかっただろう。改めて、可憐と三年生と向かい合う姿でフィールドに立った。

「始め。」

龍夜の言葉に、二人の口が動く。二人とも魔獣召喚呪文を唱えたかに見えたのだが…。

【エクスジェンシア！】

【アルマライズ】

可憐以外の全員が驚く。普通なら魔獣同士の戦いのはず。装甲征儀を最初から使っては不利になるのは確実なのだ。

「君、いったい何を考えてるんだ？」

「どうでもいい。」

狼の頭部を模したガントレットを装着する可憐は、淡々と答えた。既に三年の方は魔獣を召喚している。彼はにやりと心の中でほくそ笑んだ。最上級生である自分の力、十分に思い知らせてやると。今まで、上級生としての威厳が見せられなかった、と地団太踏む彼。実はまだ装甲征儀アルマライズが使用できないのだ。それを知ってか知らぬかの可憐の装甲征儀。少しムカついていた。

【主が命令する。鋼鉄の牙で相手を噛み砕け。モルド・デ・メタル

！」

蛇型魔獣が、己の牙の硬度を増して生身の可憐に襲い掛かる。もともと三年男子の方には、可憐を傷付けようという気持ちはない。せいぜい怖がらせて投降させるつもりであった。しかし、可憐はそんな危機的状況の中でも、無表情を崩さず、両手に持ったガンレットを構えるのだった。魔獣が鎌首をもたげ、噛み付かんと襲い掛かった。

鈍い音が聞こえる。そして何かが砕け散った音も。皆が注視する中、それは意外な展開となっていた。

「なっ……」

魔獣の口に並ぶ歯が、可憐のガンレットによって砕かれていたのだ。詳しく言えば、切り取られたと言うべきか……。兎に角、可憐は生身で魔獣の攻撃を防ぐどころか、反撃さえしてしまったのだ。地面に着地し、再びガンレットを構える可憐。メイド服のスカートは絶対領域を作り出している。三年男子はありえないと言った風に可憐を見た。

「アルマライズで魔獣を打ち破った？しかも硬度に秀でた金属性に……」

龍夜が感心半分、驚き半分で可憐を見ていた。きつと、彼の理論の中では“装甲征儀＜魔獣”と言う方程式が成り立っていたのだらう。呪文にもある通り、魔獣の力の一部を纏うだけなら、そう考えてもおかしくない。

「終わり？」

可憐が挑発する様に言う。その言葉でふと我に返った三年。再び呪文を詠唱した。上級征儀のようである。

【主が命令する。鋼の鞭を唸らせる。ラティゴ・デ・メタル！】

魔獣の尾が銀色に光り、鞭の様に可憐に振り下ろされる。やはり無表情な彼女は、ガンレットをスツと顔の前でクロスさせ、防御の姿勢をとる。いくら何でも無茶がありすぎる。魔獣の必殺技を防

ぐことは不可能だ。

【主の命令、対象を焦がす雷を流せ。エスクード・デ・ルエーノ】
誰にも聞こえない声で可憐が呟く。すると、ガントレットが電流を纏い始めたのだ。皆が啞然とする中、三年の攻撃は可憐のガントレットに当たる。しかしだった。鋼の属性を受けた魔獣の体に、大量の電流が流れ込んだ。電流の発生源は勿論の事、可憐のガントレット。魔獣は多大なダメージを受けてしまった為、消えてしまった。
【エ、エクスジェン…】

慌てて呪文を唱えようとするが、言い終わる前に喉元に冷たい鋭利な刃が当たっていた。

「これで終わり。」

「泉の勝ち。」

龍夜の宣言に可憐はガントレットを離し、三年はその場にへたり込んでしまった。そんな先輩に見向きもせず、まっすぐ慶斗たちの方へ向ってくる可憐。両手の武器も消えた。

「可憐すごい！ やっぱり、メイド服のお陰だね。」

「装甲征儀だけで魔獣を倒すなんて…」

「はしゃぐ風沙に、一人納得のいかない龍夜。」

「兄い、大丈夫ですか？」

「あ、ああ。まあな。」

自分が完璧だと思っていた理論は、とある少女によって崩された。しかも、自分でさえあの様な長時間の戦闘において、アルマライズは使えない。弟の慶斗でさえも無理かもしれない。だが、可憐本人に聞いた所で、正直な答えが返って来るとは思っていなかった。

「ま、次いくか。」

こんな感じで、手合わせは進んでいく。やはり基本的に高学年の方が強い。そして、戦いが進んでいくに連れて、慶斗の顔が段々冴えなくなっていくのだ。

「どうしたんだ、慶斗？」

「うーん、嫌な予感がするんです。何となく、策に嵌められてると言うか…。」

そして、最後から二番目の試合が始まった。そこで完全に慶斗の考えが固まったのだった。

「兄い、最後の試合って…」

「ああ。俺とお前だな。」

“兄いに嵌められました！”と嘆く慶斗であった。

進化 レクスジェンシア（前書き）

慶斗のすごい呪文が…

進化 レクスジェンシア

「兄いに、兄いに騙されました…。絶対、あのくじは兄いの策略によるものです…。酷いです、僕は兄いを信じていたのに…。」

「ああ、慶斗、悪かったって。本当にごめん。」

女子の制服で泣き崩れる慶斗。頬を紅潮させて泣く姿は、さながらの女子だった。頭を撫でながらあやす龍夜と併せれば、完璧な構図だと思ふフィールドのほぼ全員であった。“ほぼ”と言うのは、可憐は無表情だったし、玲奈は慶斗に嫉妬していたし、可憐と戦った三年男子に至っては、膝を抱えてドンヨリしていたからだ。

「誰か、慶斗と対戦する相手代わってくれないか？」

龍夜のその言葉に、膝を抱えていた三年が駆け寄ってきた。もはや上級生の威厳の欠片も無い。

「いいです。僕は兄いと戦います。」

最後に“ふんっ”とばかりにそっぽを向く慶斗。ツカツカとフィールドの一端へ向うのう。龍夜は“ヤレヤレ”と“計画通り”の中間の表情で向って行った。

「それじゃ、慶斗。一ヶ月での成果を見せてみる。」

「兄い、絶対許しません！」

【【エクスジェンシア！】】

漆黒の龍と、純白の龍が出現する。その荘厳な姿に観衆は溜息を漏らす。無論、可憐と三年男子は除外する。

【主の命令です。全てを無形と化す革新の光を見せよ。エクスプロ・デ・ブライヤー！】

クラス決定試験で使った、あの上級征儀だった。エンジェルの放った無数の光の筋がドラゴンを襲う。

「すごいな。あの時よりも質が上がってる。」

感心しながらも、自分を守る龍夜。確かに慶斗の攻撃の質は上がっている。威力は勿論の事、攻撃範囲もだ。これが純粹に慶斗の練

習の賜物なのか、怒りに任せた為ゆえなのかは誰も知ることがない。闇のオーラを盾に、慶斗の攻撃に耐えしのいだ龍夜。

【主の命令です。光の矢で貫け。アグン・デ・ブライヤー！】

再びの攻撃。次は光が収束して、多数の矢が襲い掛かる。龍夜はまた盾を構築して技を受け流す。

【主の命令です。光の弾丸で打ち抜け。バレ・デ・ブライヤー！】
続いて光の弾が襲う。連続三つの攻撃に、いくら龍夜でもきつそうな表情が伺える。心なしか盾も弱く見えている。

【主の命令です。光の速さで相手を打ち砕け。アジエット・デ・ブライヤー！】

翼を羽ばたかせ、加速をつけるエンジェル。そして一気にドラゴンに突っ込んだ。首をもたげ、闇の盾ごとドラゴンに叩き付ける。見事なまでに粉々になった盾。ドラゴンと龍夜もダメージを追ってしまった。

「おい、慶斗が龍夜先輩と互角にやり合ってるぞ？」

「妹キャラ、恐るべしだね……」

「ちつち。甘いねえ。」

翔太と風沙の会話に横槍を刺したのは玲奈だった。人差し指をスツと立て、左右に振っている。

「そうぢゃき。龍の次がまだ本気を出してないだけぢゃ。」

時代掛かった口調で類も言ってきた。龍夜と一年間同じクラスで学んだ仲間だ、翔太たちより龍夜の事を知っていて当然だろう。そして、その証拠は直ぐ起こった。

【主の命令だ、闇の弾丸で打ち抜け。バレ・デ・オスクリード】

闇色の弾丸がエンジェルに向って襲い掛かる。

【エスクード・デ・ブライヤー】

第三文のみの呪文詠唱。威力は全呪文を詠唱した時より弱くなるはずだが、龍夜の攻撃を全て跳ね返したのだ。

「すごいな、慶斗。たったの一ヶ月少しでここまで成長したのか。」

ズルして慶斗の対戦相手になったかがある。」

独り言を呟く龍夜。入学初日の朝に行った模擬戦では、防御と回復を中心とした奥手的な戦いだった。それが今では龍夜が故意で防御に徹するとは言え、攻撃的な戦いになっているのだ。大きな進歩である。元々多い魔力も助け、慶斗には魔力が足りなくなる様子も見られない。

「さて、こっちの魔力が切れる前に……」

龍夜が新たな呪文を詠唱する。ここで大きな攻撃を繰り出し、慶斗に回復をさせる。その隙を狙うつもりなのだ。

【主の命令です。光学迷彩で僕らを不可視の状態に。トウアル・デ・ブライヤー】

光のオーラを発生させて、魔獣ごと慶斗の姿を覆い隠す。クラス決定試験の決勝戦において使った技。あの時は暴力と金属性の征儀伝に物理的力で負けてしまったが……

「なるほど。だが、俺の属性は闇。この意味がわかるか、慶斗？」

【主の命令だ。周囲を闇で包み込め。コーティナ・デ・オスクリード】

ドラゴンより闇が吐き出され、フィールドを闇で覆う。観客である翔太達は見た。闇の中で唯一キラキラと光る半球状のもの。慶斗の不可視迷彩である。

「そこか、慶斗。」

【主の命により、全てを飲み込む闇を見せる。ファイナーレ・デ・オスクリード】

再び闇が吐き出される。しかし、今の闇は攻撃的だ。全てを飲み込むとばかりに高速で進み、不可視の迷彩の壁を壊さんとはかりに穿つ。そして、ヒビが入り始めた。しかし、まだ闇の攻撃の威力は衰えない。これが生徒最強の征儀伝、朱雀龍夜の力なのだ。いくら魔力をつぎ込んだ壁とは言え、魔力の密度の差では劣る。闇が晴れた時には肩で息をする慶斗の姿があった。

「や、やっぱり兄いのその攻撃は、強いです。」

【リポルネル…】

その時を待っていたとばかりに、龍夜が再び呪文を詠唱する。龍夜としても、魔力の量に余裕がないのだ。ここら辺で決着を付けないと龍夜が負けてしまう。

【バレ・デ・ブライヤー！】

龍夜は耳を疑った。確かに慶斗は回復の呪文を唱えていたはず。

しかし、突然聞こえてきた慶斗の声は、完全に攻撃呪文だったのだ。「意図的に呪文をやめたか…」

呪文の詠唱を終了せず、新たな呪文を詠唱した。慶斗は龍夜の考えを読んでいたのだろうか？とにかく、龍夜は不意打ちの攻撃を盾を作ること以防いだ。咄嗟の判断でここまでできるのは、流石は龍夜と言うべきか…。

「ちっ、魔力量が計算外に減った…」

これでは次に放とうと考えていた攻撃ができない。しかし、まだ負けたと決定した訳ではないのだ。勝機はまだある。

「兄い、絶対許しません…。僕は騙されたのですね？しかも、人前で玲奈さんとイチヤイチャして…」

「お、おい…、慶斗？」

龍夜でも、慶斗の変わり様には驚かざるを得ない。雰囲気が違うのだ。下をうつむいて喋ってる筈なのに、声がよく響いている。光属性の征儀伝なのに、ドス黒いオーラを放っているように感じるのだ。

「許さないです！」

カッと慶斗が顔を上げる。龍夜を始めとして、フィールドにいる全員が驚いた。慶斗の瞳が赤く染まっているのだ。スッと魔石のはまる生徒手帳を取り出す。白かったはずの魔石も真紅に染まっていた。

「僕の考えた呪文、兄いに使います。」

【主の命令です。その姿を変え、契約者の下に再降臨せよ。レクスジェンシア！】

轟音が響き渡った。そして、慶斗の魔獣に変化が訪れる。エンジンドラゴンが完全な二足歩行で立ち上がったのだ。まるで人間の直立歩行をするかの様に。そして、巨大な翼で体を覆いつくした。一瞬眩く光り、翼が開かれた。そこには、あの長い首はなく、その代わり中世ヨーロッパの騎士の様な仮面を被った姿、そして人間と同じような腕、その両手には慶斗が装甲征儀を行った時に出現する刀が握られていた。人間と同じようなフォームを持つが、龍の尻尾が生えている。

「竜人？」

翔太が呟く。確かにその呼び方がピッタリな姿である。その姿は龍夜のドラゴンの大きさを超え、上から見下ろしている。

【主の命令です。対象を切り刻む光の刃を…】

その途端、慶斗が倒れた。意識が途切れた為、召喚された竜人も消えてしまう。全員が慶斗の周りに集まった。龍夜が起こそうと試みるが、起きそうにない。顔面は蒼白であり、呼吸も浅い。

「保険医の所へ連れて行くぞ！」

進化 レクスジェンシア（後書き）

最近一日一話の投稿をしてきましたが、やはり、最初に取り決めた
とおり、二日に一回の投稿にペースを戻そうと思います。私のもう
一つの小説、P R I C E L E S Sと一日交代で投稿です。では、ま
た明日の投稿をお楽しみに。その日から二日一回のペースに入ります。

秘薬\$ ルエーノ

試合は一時中止、翔太が慶斗を背負って保健室へ向う。大人数で押しかけた為、保険医は驚いた。特に、翔太の背中に背負われた彼、慶斗の顔は血相が悪く、死人ではないかと思ってしまうほどだ。

「どうしたの、その子!？」

「魔力を使いすぎたようです。少し見てやってください。」

保険医がメンバーを追い出し、早十分。そろりとドアが開いた。

保険医が“静かに”と言いながら手招きをしている。全員は保健室へと入った。ベッドには先程より顔の色が良くなった慶斗が寝かされている。

「確かに魔力の使いすぎの样ね。一体何したの？」

「上級征儀を何発か放って、その上で新しい呪文を試したんです。」

龍夜が答えると、保険医は龍夜に掴みかかった。

「あなたね！何を考えてるの！いくら天才だからって、第一人の安全も確保できないの!？最初の試験だって、あなたの呪文のせいでここに二人運ばれてきて…。貴方の弟は呪文の実験台じゃないのよ。」

保険医だからこそ、思うことなのであろう。いくら珍しく凄い呪文でも、使用する征儀伝がこんな状態になつては、元も子も無い。

「違つんです！今日は龍夜の呪文じゃなくて、慶斗君が作つた…」

玲奈が龍夜を弁護しようとするが、それを龍夜が遮った。悔しくて唇を噛み締める。彼だって、天才や神童などと言われても、一介の学生でしかない事は事実なのだった。

「すいませんでした。全て俺の失態です。慶斗が目覚めるまで付き添いしてもいいですか？」

“当たり前です！”と怒りながら、別の部屋へ行ってしまう保険医。ガチャンと乱暴に扉が閉められ、静寂が訪れた。龍夜は皆を振り向く。

「悪いな。今日はこれで終わりだ。次の練習は日を追って連絡する。」

“疲れた”などと言いながら、三年生が保健室を立ち去る。類も、“すまぬ、今日は買いい物もあるからの。”と言って保健室を出て行った。残ったのは、龍夜、玲奈、そして慶斗のクラスメート三人だった。

「駄目な兄だな、俺。」

自嘲的に呟く龍夜。玲奈がそんな彼を優しく抱きしめた。空気に耐え切れなくなったのか、翔太が口を開く。

「龍夜先輩、慶斗のあの呪文って……」

「俺にも良くわからない。あれは本当に慶斗のオリジナルだ。詳細は良く分からないが、召還呪文に改良を加えたんだと思う。」

龍夜の話に寄れば、慶斗の魔獣の姿が変わったのは、与える魔力量の増加に寄る物だと言う。赤い瞳と真紅の魔石は、その影響の一部だろうと言う見解だ。まさに、魔力保持量の高い慶斗のみが為せる業だった。しかし、上級征儀の大量使用の後の為か、慶斗は倒れる始末であった。

「新しい呪文を作った時に必ず問題視されるのは、魔力の消費量の高さだ。合成魔獣^{ユニルス}も勿論。あの先生の言う通りだな。俺は慶斗を実験台にしてるんだよ。」

玲奈が更に龍夜を強く抱きしめる。翔太と凧沙は慶斗を見た。可憐だけは保険医の消えたドアを見ている。スツと立ち上がる可憐。メイド服をヒラリと反してそのドアを叩く。保険医が出てきた。可憐の姿を認めると、その部屋の中へと招き入れるのだった。

「泉の奴、何しに行ったんだ？あいつも怪我してるのか？」

「分からないや、可憐はメイド服さえ着てれば可愛いから」

質問の答えにはなっていないが、直ぐに可憐は部屋から出てきた。一体何をしていたのか、それは誰も知る事が無い。

「無理に付き合わなくて良い。帰って貰って十分だ。」

「私はここにいるよ、龍夜。」

「俺も慶斗が心配ですから。」

「私もいるね、慶斗っちの寝顔可愛いし。」

玲奈と翔太、風沙が残る事を宣言する。しかし、可憐だけは無表情のまま保健室を出て行くのだった。まるで龍夜が帰ることを勧めたから、帰るかの様に。

「泉の奴冷たいなあ……。」

「会った時からあんな感じだよ。でも、私には分かるよ。あの娘、クーデレだもん！」

弁護しているのかを疑問に思う言葉だが、彼女は彼女なりに慶斗を心配しているのかもしれない。……無表情のあの顔からは何も伺えないのだが。

「一つ、気になることが有る。あの泉って言う女子、アルマライズを使いながら魔獣の力を引き出していた。」

それがどうしたのか？と言う顔のメンバー。しかし、龍夜は腑に落ちない顔をしている。なぜなら、龍夜の組み立てた理論では、アルマライズとは征儀伝の物理的攻撃手段であり、魔獣を用いた魔法の攻撃ではないのだ。即ち、可憐のガントレットから電撃が放たれた現象がおかしいと言っているのである。

「泉の潜在能力じゃないんですか？」

「無理だ。潜在能力とかの問題じゃない。」

口が滑つても、“龍夜先輩の理論に穴がある”とは言えない翔太達。難しい顔をする龍夜だが、それも一瞬の出来事だった。

「ここは何処でしょう？」

ポーツとした目で起き上がる慶斗。回復が早い事を見ると、どうやらあの保険医は、翔太に投与した物と同じ薬を飲ませたらしい。皆が慶斗が気が付くのを喜ぶ中、慶斗の視界に龍夜の姿が入った。

「お、お、お兄たん！」

龍夜に飛び付いた慶斗。いつもと違う慶斗に戸惑うメンバー。特に抱きつかれている本人の龍夜は驚く。

「慶斗？」

「僕が起きるのを待っててくれたんですね、ありがとうございますお兄たん！」
頭をグリグリと、龍夜の胸に擦り付ける様にする慶斗。慌てたのは玲奈だ。無理矢理龍夜と慶斗を引き離そうとする。しかし、キツと玲奈を睨み付けた慶斗は、いつの間に取り出したのか、白い刀を玲奈に向けた。

「お兄たんは僕だけのものです。横取りしないでください。」

目がマジの慶斗。怖がる玲奈に、今だ状況が飲み込めない翔太。何故か興奮した感じの風沙。当の龍夜と言えば、“よしよし”と言いながら慶斗の頭を撫でている。それに満足しているのか、慶斗も気持ち良さそうに目を細めている。

「そ、そんなの無いよ！龍夜に撫で撫でとか、私だってされた事無いのに！」

いつもは美人で冷静な、頼れる先輩キャラの玲奈だが、今はそんな欠片さえ見えない。苦笑いする一年二人。玲奈も含めて三人に龍夜が話し始める。

「実はさ、慶斗って小さい頃からこうやると落ち着くんだよ。ここ数年は無かったけどさ。」

サラッと言う龍夜だが、他の三人は慶斗を“ブラコン”と認識したのだった。

「もしかしたら…」

呟く翔太。慶斗を除く三人が彼を注視する。翔太が少し恥ずかしそうにクラス決定試験の後のことを話し始めた。あの保険医の薬を飲むと、やたらとテンションがハイになる事を。つまり、あの薬が魔力を回復させる副作用としてこの様な状態になるとしたら、納得が行くのだ。

「直ぐに直ると思いますよ。俺もそうでしたし。」

翔太の話を聞いて帰り支度を始めた5人。慶斗は薬の効能が切れるまで龍夜に抱きついていたが…。薬が切れた時に慶斗が赤面したのはご愛嬌。それぞれが各自の寮へと戻っていくのだった。

「っ！……はぁはぁ……」

一人の少女が自分の部屋に駆け込むなり、倒れこんだ。しかし、必死の思いで這いずり、部屋まで辿り着く。そして棚からビンを掴んだ。その拍子に物が落ちてしまうが、彼女は構おうとしない。ビンの蓋を開け、震える手で薬を取り出す。5錠ほどが出てくる。薬の規定量から見たら多いのだろうが、少女はそれを一気に飲み込んだ。すぐに手の振るえは止まり、荒い呼吸も収まる。

「な、何とかなったよ……」

そのまま深い眠りへと落ちて行くのだった…。

秘薬\$ ルエーノ（後書き）

次はあさつての投稿です。

試験のコーティナ

「おはようございます。」

慶斗が一学年のSクラスの教室に入ってくる。既に他の三人は揃っており、思い思いの事をしていた。凧沙は可憐にネコミミを付けようとしてるし、可憐はそれを無表情で受け入れている。翔太は本を読んでいたようだ。

「お、慶斗。調子はどうだ？」

「はい。お陰様で。昨日は心配をお掛けしてすいませんでした。」
深々と頭を下げる慶斗。やはり腰の低さはいつも通りだ。それを見て、翔太も一安心する。しかし、凧沙は少し怒っている様だった。慶斗に近付く。

「あ、あの…、凧沙さん？ 頬つぺたに跡ついてますよ？ 床で寝たんですか？」

「そんな事はどうでもいいの！ それより、服！」

「え？」

「どうして女子の服着てないの！」

凧沙の怒りの原因。それは慶斗が女子の制服を着ていないからだ。余程慶斗の女装姿が気に入っているのだろうか？

「だって、あんな格好恥ずかしいじゃないですか！」

必死に弁明する慶斗。しかし、凧沙の目は本気のような。後ろで翔太が何か言っているが、二人には聞こえていない。その内、凧沙が慶斗の手を掴んだ。反対の手には紙袋が握られている。あれよあれよと言う間に、慶斗たち二人は教室を出て行ってしまった。

「…と言っのが俺の見解です。」

ここは学園長室。椅子に座る若い男性、この学園の長、神谷浩輔に話をするのは、慶斗の兄である龍夜だった。彼は昨日の一件から、

二度と慶斗が傷つかない事を誓った。学園長の神谷も難しい顔をしている。

「それでは、君は一学年の泉可憐が中国系征儀伝であるかと？」

「もしくは、その手先だと思います。」

昨日のSクラスの有志を集めた警護部の顔合わせにおいて、可憐は龍夜の理論を越えた技を披露した。それを龍夜が奇妙だと感じたのだ。確かに、中国系征儀伝は未だ謎の存在である為、可憐がそのような特別な力を使えたとしても納得がいく。

「可能性がない訳じゃないな。書類に拠れば、彼女の両親は既に他界、保護者もいないようだ。そこに漬け込んだとも考えられる。」

「どうしますか？」

「様子を見よう。まだ彼女が怪しいと決まったわけじゃない。口外は禁物だ。…そろそろ授業だな、遅れないように。」

一礼をして去っていく龍夜。静かになった学園長室。神谷はため息をついた。その姿はどことなく年寄り臭く、本来の年相応の雰囲気であった。

「さて、今日も授業始めるぞ。…朱雀、なんで泣いてるんだ？」

「先生、服装については何も突っ込まないんですね。」

翔太の突っ込みの通り、またもや慶斗は風沙の手によって、女子の格好をさせられていた。前髪はピンで留めて、額を出す。また、服装はメイド服だった。どうやら、可憐の予備らしい。しかも慶斗の男子用制服は取り上げられてしまったのだ。

「今日はDランクと対戦してもらおうぞ。」

「は？先生、どう言う事ですか？」

Dクラスと言えば、5つに分けられたランクで一番低い。しかもその一学年となれば、この学園で最弱だろう。失礼だろうが、全くと言って良い程の実力差がある為、勝ち負けは既に決まっているのだ。

「それが違ったなあ。Dクラスの担任と協議した結果、5対1の戦いだ。コレくらいならフェアだろ？」

相手は数で相手をすると言う。確かに、少数精鋭のSクラスとは違い、Dクラスには生徒がたくさんいる。一度に大量の人数を裁くことを取り上げれば、効率的と言っても過言ではない。

「しかもだ。この試合は今学期の最初のクラスアップ試験でもあるんだ。相当力入ってるだろうから、舐めて掛かると痛い目みるぞ。」

クラスアップ試験。その名の通り、上級クラスへ編入する為の試験。学園で実践を積みばスキルアップし、自分の所属するクラスより能力が高くなる可能性がある。そんな生徒に施されるのが、この試験だ。毎学期に1回行われ、10人程度が上に上がっていく。また、逆に落ちる場合もある。慶斗たちはSクラスであり、これ以上上がることは出来ない。しかし、下手をすればクラスを落とされる可能性があるのだった。

「別に勝ち負けでクラスの上下が決まるわけじゃない。征儀の使い方やスキル、連携だって審査対象だ。まあ、今日は対多数戦闘の練習だと思ってくれ。じゃ、既にDクラスはお待ちかねだ。行くぞ。」

格技場へ向う5人。既にそこでは戦闘が行われていた。クラスアップ試験はSクラス以外に適用される為、Dクラスを始めとし、CクラスからAクラスまで揃っている。

【主の命令さ、炎で包んで燃やせ。コーティナ・デ・フェーゴ】

【主の命令だ。水で包み込め。コーティナ・デ・イーロ！】

炎と水がぶつかり合って、水蒸気を発生させる。一対一で戦っているのを見ると、どうやらクラスの階級は一つしか違わないらしい。近くには審査をしているだろう教師がいる。

「お前らはこつちだ。来い。」

担任教師に連れられて、慶斗たちは自分の持ち場へと向う。そこには調度20人のDクラス生徒がいた。

「やつと来たか。」

「勝者の余裕だつての。」

それぞれの担任教師が笑いながら言葉を交わす。

「…今日の飲み代はお前持ちだな。」

「アホ。Sクラス舐めんな？」

実はこの二人、今日のクラスアップ試験において、賭けをしているのだ。Dクラスのグループが一つでもSクラスの生徒に勝てば、Sクラスの教師がDクラスの教師に奢ると言うもの。教師の風上にも置けない連中である。しかし、生徒には聞かれない場所にいたので、ばれることはなかった。

「慶斗。頑張ろうぜ。」

「女装は嫌です…」

試験 ☿ コーティナ（後書き）

慶斗「えっと、この小説に登場する呪文ですが、作者がとある言語を使っています。所々英語に似た言葉があるので、ラテン語をルーツにしている言語です。いずれ解説するそうなので、その時はよろしくお願いします。あと、こんな呪文を考えました！って言う読者の方、感想のほうから送ってください。採用するかもしれません、と作者が言っていました。では、僕はこれから兄いに会わなくてはならないので、失礼します。」

秘策^① トラーマ

さて、クラスアップ試験を間近に控えた両クラス。

「いくらSランクって言っても、五人掛かりなら倒せるだろ。」

「そうだよな……」

「しかもさ、あっち美少女三人だろ？チラリズム、はあはあ……」

明らかに気持ちが悪い組だ。しかもやはり慶斗を女子だと勘違いしている。Dランクの教師に呼ばれ、フィールドに出てきた。この戦闘では、下級ランクの生徒が対戦相手を選べるのだ。

「お前ら、あの4人の中で誰にするんだ？」

「黒のメイド服、はあはあ……」

どうやら、選んだのは可憐のようだ。因みに今の慶斗は白を基調としている。可憐もフィールドに出てきた。

「それでは、始めなさい。」

【【【【【エクスジェンシア！】】】】】

【アルマライズ】

合計五体の魔獣が現れる。しかし、やはり可憐はガントレットを装備するのだった。見慣れない技に一瞬驚くDクラス生徒だが、相手が自分たちに比べたら貧弱な武器しか持っていない事に安堵する。コレなら勝利は確実だ、と。しかしだった……。

【トラーマ・デ・ルエーノ】

ガントレットをフィールドの床に刺した可憐。すると、雷が地面を走った。地上タイプの魔獣が三体いた為、まともにその攻撃を受けてしまう。だが、完璧な攻撃技では無い為か、魔獣は消滅していないが。

「なんだよ、あの技……」

「そんな事より、俺達も力を合わせるぞ。」

「そしてパンチラ、はあはあ……」

この五人チーム、風属性と炎属性がそれぞれ二人と、雷属性がい

る。しかも全員がスペイン系。即ち、同系統の為、技を合わせれば高い攻撃力を誇るのだ。

【「…デ・フエーゴ！」】

【「…デ・トルメンタ！」】

【「…デ・ルエーノ」】

同時に五人が呪文を詠唱する。暴風が吹き荒れ竜巻と為す。炎の弾丸がそこから弾き出された。追撃とばかりに雷が可憐を襲う。Dクラス生徒も、慶斗たちも完全に可憐が負けたと思った。

突然、竜巻が内側から引き裂かれた。炎の弾丸が跳ね返される。咄嗟の判断でバリアを張るDランク生徒たち。中から出てきたのは、無傷の状態の可憐。ガントレットを顔の前で交差している。なんとあの合わせ技をやり過ぎしたのだ。啞然とするDクラス生徒たち。風沙は風沙で拍手喝采だ。なにやら叫んでいるが、無視した方が身の為である。

「弱い技が合わさった所で、特に問題はない。」

自分達の技が、たった一人に破られた事に驚きを隠せないDクラスチーム。しかし、可憐にとってはチャンス。一気に間合いを詰めてジャンプ。一体の魔獣にガントレットの爪を立てた。魔獣は消えてしまう。今回の試験のルールに則り、その魔獣の契約者は失格となった。

「なるほど…」

「どうしたんですか？翔太。」

顎に手を当てて、何かを悟ったような翔太。慶斗が問いかける。

「いや、どうして泉が装甲征儀を使ったのか、それに納得がいったんだよ。」

「？」

「今日の試験は、魔獣が消えればその場で失格。だから最初から対多数の魔獣戦は避けたんだ。」

ここで慶斗も納得がいった様な顔になる。アルマライズで敵を仕

留め、後から魔獣で攻撃をする。それなら自分が失格になる可能性も低くなる。未だ相手の攻撃をガントレットで受け止め、反撃する可憐。更に相手の魔獣を一体仕留めた。これで残るは三体となる。

「なんだよ、生身で魔獣の相手をするなんて…」

「あれがSランクの実力…」

「スカートの絶対領域、ハアハア…」

舐めて掛かった事を後悔するDクラス。作戦を変えたようだ。可憐を中心に三人が包囲する。どうやら攪乱作戦のようである。三方から可憐を狙う。ガントレットで前方からの攻撃は受け流せたが、三方は難しいようだ。それぞれ炎、風、雷の攻撃が襲い掛かる。

【エスクード・デ・ルエーノ】

ガントレットから放出された雷が、球体となって可憐を包み込む。全てのDクラスの攻撃は弾き返されてしまった。自分の技を打ち返され、そのまま食らってしまうDクラス。一気に雷属性の生徒の所まで走った。首筋にガントレットを当てる可憐。

「あなたの負け。降参しなさい。」

「こ、降参です…」

とうとう三人目も失格にしてしまった。残るはあと二人。

【エクスジェンシア】

ここに来て、初めて可憐が魔獣を召還した。スペイン系を象徴するかのような黒い毛並みを持つ狼。牙を剥き出しにして威嚇している。

【主の命令、雷の弾丸で相手を貫け、バレ・デ・ルエーノ】

地上型魔獣に雷の弾丸が襲い掛かる。必死で防御するDクラスだが、やがてヒビが入り始め、そして砕けた。黄色く輝く光弾が魔獣に襲い掛かり、その姿を消した。

【主の命令、雷纏うその牙で対象を砕け。モルド・デ・ルエーノ】

可憐の魔獣が牙に雷を纏い、助走をつけて宙に飛んだ。狙うは最後の天空魔獣。恐怖で動けない契約者のせいで、魔獣はその攻撃を避けることができなかった。首筋を噛み、一瞬にして魔獣を消滅さ

せた。

「勝者、Sクラス、泉可憐。」

「チラリズムがあ……」

などと言っている馬鹿はいたが、可憐は対多数戦闘で勝利したのだ。しかも、魔獣を使わず、龍夜でもそう長時間は使えない装甲征儀アルマラを使用した上でだ。彼女もまた、慶斗と同じように魔力保持量が高いのだろうか？

「やはり、泉は中国系征儀伝に加担している……」

遠目から可憐の試合模様を見ていた龍夜。疑惑が確信に変わった瞬間だった。自分にもできない装甲征儀での技、何より、Dクラスと言えども一度に複数の攻撃を受けたのにも関わらず、無傷でいるのが不自然だ。いくらガントレットの武器が攻防に優れた物とはいえ、限度というものがある。何より、魔獣を素手で倒すと言う荒業、中国系征儀伝と同じであった。

「少し調べる必要があるな……」

龍夜はその場を後にした。

偽作 アジッタ

対可憐との戦闘で、いくら大人数で掛かろうとも油断してはいけない事を悟った。やがて教師から次のDクラスチームが呼ばれる。

挑戦相手は青龍翔太だった。

「さあて、やるか！」

「頑張ってください、翔太。」

計6人がフィールド上に立った。

【「「「エクスジェンシア！」」」】

【主の命令だ。お前の力を俺に宿せ。アルマライズ！】

翔太は可憐と同じ様に装甲征儀を使用する。蝙蝠の意匠が施された十文字槍を構えた。相手も周囲を囲む。そして同時に技を放ってきた。

「ふっ、跳ね返してやる。」

【主の命令だ。全てを跳ね返す風で守れ。エスクード・デ・トルメントー！】

十文字槍を持ちながら防御呪文を発動する。槍から竜巻が出てきて契約者である翔太を守り、らなかった。まずもって呪文が発動できなかったのだ。その為、翔太は攻撃をまともに受けてしまう。四方八方とまでは行かないが、5つの方向から雷、炎、氷、風が飛んでくる。防御呪文が発動できない今、翔太を守るものは何もない。

「ぐあっ！」

吹き飛ばされる翔太。制服の所々が焦げている。衝撃を柔らめる効果でもあるのだろうか？何とか大丈夫だった翔太。しかし、翔太が怯んだのをチャンスと見て、Dクラスが追撃をかける。

「やられるか！」

【エクスジェンシア！】

槍を消し、己の魔獣を召還する。あまりなれていない装甲征儀アルマライズより、慣れ親しんだ魔獣召還エクスジェンシアを使う。蝙蝠の背に飛び乗り、追撃を避

けた。相手は全員地上魔獣である為、有利な状況となる。

「やっぱりこっちの方が俺の性に合ってるぜ。」

【主の命令だ。疾風の針で相手を貫け。アグン・デ・トルメンタ】
上空から疾風の針を飛ばす翔太の魔獣。上級征儀の為もあってか、相当なダメージを負ってしまふ。やはりSクラスの実力は高いと言うことだろう。その上、地上戦力ばかりの相手五人に空中を自由に動く翔太を捉える術がない。翔太の力任せの攻撃は、Dクラスの弱いシールドでは貫通してしまった。基本的に翔太は魔力の質より量で勝負している。単純明快な作戦ではあるが、この場合はそれが有利に働いたのだ。

【主の命令だ。全てを巻き上げる嵐の群れを成せ！ファイナーレ・デ・トルメンタ！】

上級征儀の中でもオーソドックスな技として、『最終』を意味する“ファイナーレ”を使うことが多い。これは上級征儀の中でも初期の頃からあるもので、長い年月と共に洗練され、上級征儀でありながら消費魔力量が少ない。南陽学園でも最初に教える上級征儀がコレだ。即ち、Dクラス生徒も使えると言う意味だが、威力はやはり違ふのだろう。

合計10の竜巻を発生させる。それぞれ2つずつがDクラスの生徒の魔獣に襲い掛かった。左右から挟まれ、持ち上げられる魔獣。上空から落とされた。5体の内3体が消滅してしまふ。残るは二体。「さあ、どうする？」

既に勝ったような様子の翔太。確かに翔太が優勢だが…

「お、おい…。このままだとCクラスに上がれないぞ。」

「こ、こうなったら…。我が家系に伝わる必殺征儀を使うぞ！」
なにやら相談を始める二人。翔太はスポーツマンシップに則っているつもりなのか、それをわざわざ待っていた。

【【魔獣よ分身せよ！】】
「何っ！？」

驚いたのは翔太だけじゃない。周りの周囲の観客も驚いた。さっ

きまで通常の属性で戦っていた生徒が分身を使おうとしているのだ。魔獣を分身させられるのは、“鏡属性”の征儀伝のみ。となると、この二人は属性を二つ使えると言っのだろうか？

「なぐんてね、嘘だ！」

【バレ・デ・フェーゴ！】

【バレ・デ・イーロ！】

本当の作戦はこっちだった。使えないような技を発動しようと思せかけ、隙を誘う。その上で本来の攻撃を仕掛けたのだ。しかも弾丸を打ち出して翔太ごと魔獣を撃墜しようとしている。慌てて避けようとするが、数発当たってしまった。体勢を立て直す翔太。

「よくも騙してくれたな。」

一度サラツと髪を払う翔太。何故か前髪が後ろに撫で付けられた。それを見た慶斗は“ヒッ”と声を漏らす。

「あ、あの時の翔太……。とっても怒ってます。」

以前、中学の時に慶斗が不良に絡まれた時があった。不良はただの人間であり、その時は征儀伝としての力を使う事ができなかった。その時、翔太が素手で立ち向かってくれたのだが、逆に殴られてしまふ。その後、翔太が先程と同じ行動を起こした。その後は翔太が瞬殺だったと言う。そして今は征儀を用いた戦闘の最中。何が起るのであるのか……？

【主の命令だ。疾風の翼で破壊の音を奏でろ！アジッタ・デ・トルメンタ！】

蝙蝠の口から破壊音波を流す。その音悶絶する魔獣たち。その間に新たな呪文を詠唱する。

【主の命令だ。疾風纏う翼で突撃せよ。アジエツト・デ・トルメンタ！】

上空から一気に魔獣に体当たりをする蝙蝠。魔獣の一体が消えた。その瞬間に翔太は魔獣の背中からフィールドに降り立つ。

【アルマライズ！】

再び十文字槍を召還する。勿論のこと、翔太の魔獣は消えた。槍

を、状況に対応しきれない最後のDクラス生徒の喉元に当てた。

「はい、終わり。」

「試合終了！」

こうして第二戦もSクラスの勝利となったのだった。

名前 トウアル

最初の攻撃が利いた事で騒ぐDクラスだが、やはりSクラスの翔太には負けてしまった。これが実力の差と言うべきか。

「これでSクラスの2連勝だな。そろそろ奢る腹括つたらどうだ？」
「まだだ！こっちは一勝でもすれば勝ちなんだ。お前、余裕だろ？そんなに余裕なら例え5人以上で掛かつてでも大丈夫なはずだよな？」
なにやら大人気ない会話を再開し始めたSとDクラスの教師。会話だけ見れば子供の口喧嘩である。

「なんだ、その顔見ると無理みたいだな。ま、所詮Sクラスって言ってもその程度のレベルか。」

「くっ…。いいだろう、受けてやるよ。こっちの朱雀が相手になつてやる。十人一気に掛かつて来いよ！」

戦うのは自分では無いと言うのに、自信満々に宣言するSクラス教師。それを聞いてニンマリとするDクラス教師は、自分のクラスに言った。

「お前ら、十人一気に掛かつて来いだよ。残った奴ら全員出て来い！」

それを聞いたDクラス。狂喜乱舞と言う言葉が似合う顔で出てきた。Sクラスからも当然の如く慶斗が呼ばれる。やはり、いまだ女装は続いているのだが…。

「先生！僕一人で10人も相手できません！」

慶斗が教師に反論するのだが、

「為せば成る。」

と一蹴されてしまった。

「せめて、この格好だけでも。恥ずかしいです…。」

「だめ。因みに負けたら、ずっと着てもらう約束だよ。」

笑顔で凧沙は言うが、慶斗には死刑宣言に聞こえたと言う。しかし、慶斗は逆転の発想を思いついた。

「そうです。この勝負に勝てれば、きつと僕の制服を返してもらえ
るに違いありません。勝つしかありません。」

そう呟いてフィールドへと脚を進める。既に揃っているDクラスの生徒は怪訝な顔をした。自分たちの教師からは、相手は朱雀龍夜の弟と聞いている。しかし、今日の前に立っているのは、メイド服を着た美少女なのだ。Dクラスの一人が口を開こうとするが、それは慶斗によって妨げられた。自分の白い魔石を嵌めた生徒手帳を取り出す。

「悪いけど、僕は勝たなくちゃいけないのです。制服を取り返すために。」

【エクスジェンシア】

純白の龍、エンジェルドラゴンが姿を現した。慶斗の目は完全に据わっており、昨日の龍夜との試合ほどではないが、本気らしい。そんな姿にDクラスの男女10人は怯えきってしまう。しかし、何とか自分たちの魔獣を召喚した。

【主の命令です。森羅万象を無形と化す変革の光を見せよ。エクスプロ・デ・ブライヤー！】

またもや上級征儀を撃ち放つ慶斗。光の筋が大量に降り注ぐ。広範囲に渡って被害を与えるそれは、地面で爆発を起こした。だが、一発の威力自体は低い為、一体も消滅していないのだが…。

「おい、何が理由か分からないが、ヤバイ程怒ってないか？」

「十人一斉攻撃だ！」

Dクラスの全員が呪文を唱え始める。しかし、慶斗は冷静だった。

【トウアル・デ・ブライヤー！】

慶斗の十八番、光学迷彩で姿を眩ましてしまう。今までの相手には分が悪かったが、今回の相手には闇や暴力属性の征儀伝はないので、効果は絶大だった。まったく姿が見えない相手に戸惑うDクラス。攻撃呪文も途中で止めてしまった。

「いいか、一斉に別々の方向へ攻撃を仕掛けるんだ。」

一人がそう発案すると、全員が一箇所に固まる。それぞれの方向

へ攻撃呪文を放った。

「あれじゃないか？」

一人が放った攻撃が、空間に歪みを作ったのだ。水面を連想させるような波紋が広がる。

「よし、あれに一斉攻撃を！」

【ライオ・デ・ブライヤー！】

しかし、一瞬にして迷彩の呪文が解かれ、光線が飛んでくる。直線的に進む攻撃で、3体の魔獣が消滅した。魔力を余計に注ぎ込んだ攻撃は、たとえ第三文のみの短縮呪文でも魔獣を破壊してしまったのだ。

「よし、これならいけるんじゃないか？」

翔太が勝利を半分確信している。皆そうだった。あの力は何処から来るのかを疑問に思うのだが、十中八九、風沙のせいだ。

【ファイナレ・デ・ブライヤー】

必殺技級の上級征儀が発動される。最初に発動した技より威力は低いものの、吐き出された無数の光弾は十分に魔獣を消滅させる。残りは五体。やっと半分にきた。

「こ、こうなったら、あれを使うぞ。」

レクスジエンシア

龍夜に使用禁止を言い渡された、魔獣進化の呪文が慶斗の頭を過ったときだった。Dクラスの相談する声で現実に取り戻された。いったい、“あれ”とはなんだろうか？ いや、先程の翔太の様に、騙し作戦だろうと思ったのだが…

【ユニルス！】

唱えた呪文は、なんと魔獣合成の呪文。二体ずつが引き込まれ、光の玉になった。

「まさか。兄いでもできない呪文を使うなんて…」

しかし、慶斗の予想は外れ、光の玉にもならず魔獣は弾けた。啞然とする契約者の4人。勿論のこと魔獣も消えてしまう。4人は失格となり、残るは一人。無理な呪文を唱えたお陰で、慶斗の勝利

はほぼ確実になっていました。

「行きます。僕は制服を取り返すのです。」

【ユニルス！】

白銀に光る剣を握り、最後の相手に突っ走る。恐怖で動けない相手の首筋に剣を向けた。

「終わりですね。」

「勝者、Sクラス。」

「よっしゃあ！」

一番喜んでいたのは担任教師だったそう。風沙の対戦相手がいなくなってしまったが、本人は気にしていない模様だ。試合終了が告げられ、嬉しそうに慶斗は戻ってくる。

「椎名さん。勝ちましたよ。僕の制服返してください。」

「え？私は負けたらその格好を続けるって言ったけど、勝った時の事は何もいってないよ。」

硬直する慶斗。必死で勝ったのに、この処遇は酷い。

「ああ、しょうがないか。メイド服は辞めて、このチャイナ服を……」

「また裏切られました……。兄に続いてクラスメートにまで……。椎

名さんは僕を笑いにしようとしているのですね？分かりました。

僕……」

【エクスジェンシア】

静かに慶斗が呟いた。しかし、フィールドの全員の背中に冷たい物が走る。人間へと進化した時に失ったはずの本能が告げている。

“逃げないと確実に死ぬ”と。

「皆逃げろ！」

誰かが叫んだ瞬間、クラスアップ試験に参加していた全員が逃げた。

「うわあ、おもしろい。」

呑気な風沙一人を残して……。この日、何が起ったのか、誰も知らない。ただし、模擬場が完全に壊滅していた。そんな中でも風沙は無傷でいたそう。騒ぎが収まるころ、風沙が慶斗を引き摺るよ

うにしてつれてくる。慶斗本人は気絶しており、三度保健室へ直行だった。一つ変わった事、それはその日を境に慶斗が凧沙を下の名前で呼び捨てにし始めたのだ。翔太でさえ下の名前で呼ばれたのは出会ってから1年経った頃。どんな魔法を使ったのかと聞かれるが、凧沙は“秘密だよ。”で済ましてしまうのであった。

疑惑 ドルミル

“模擬場破壊事件”から数週間が経った。普通の学校らしく、夏休みもある南陽学園は、その夏休みを数週間後にして生徒達が浮き立っている様子。Sクラスも例外ではなく、夏休みの予定を話し合っていた。

「慶斗たちはどうするんだ？夏休み中。」

「僕と兄いは一度家に帰ります。両親にも久しぶりに顔を出さなくてはならないので。翔太はどうするんですか？」

「俺もそんな所だな。」

「私はね、カレンちゃんと慶斗っちに似合いそうな服を探したり、作ったり……」

“結構ですよ、風沙。”と速攻で返事をする慶斗。どうやら、風沙は今だ懲りていない模様。しかし、あの事件の日になにが起こったのだろうか？それは誰も知る事がなかった。

「泉さんは？」

「特に予定はない。あなた達に話す義理もない。」

いつもの事ながら、冷やかな返事である。“もう、秘密好きなんだから！”と騒ぐ風沙。しかし、慶斗と翔太は悩んだ様な顔をすする。人見知りが激しいとしては、可憐と言う女子はそれなりに人と話す。まあ的外れな回答が多いのは置いておくでしょう。しかし、人と関わりたくないといった感じなのだ。その上、時々どこかへ消えてしまう事もしばしば。風沙でも詳しくは知らないと言う。

慶斗たちが顔を見合わせていると、スッと可憐が立ち上がった。無言で教室を抜けだそうとする。それを追って慶斗たちも教室を出た。

「あれ？慶斗っちどこ行くの？」

それを二人が人差し指を口に当てて遮る。理由を説明している暇が無い。しかし、風沙もついてきた。どうやら、彼女の中ではこの

行動が“面白い事”と認定されたのだろう。

壁を背にして、柱の陰に隠れながらも可憐を追う。どうやら彼女には気付かれていない模様。三人は更に後を追う。そして、着いた先が：

「なんだよ。トイレか…」

可憐の目的地、それは化粧室だった。残念そうな顔をする翔太。これ以上後を追う必要もないと思ったのか、三人は教室へ戻って行く。しかし、化粧室の入り口から三人の立ち去る姿を確認する可憐の視線には、誰一人気付くことは無かった。

「ああ！腹減った！」

午前中の授業も終わり、全員で食堂に向っている。この時も可憐の挙動には注意を払っているのだが、特に怪しい所は無い。

「あつ、私図書室に行かなくちゃ。ゴメンね、可憐ちゃん。慶斗っち、しょうたん。バイバイ」

そう言って突然何処かへ向かって行った風沙。

「椎名も本読むんだな。」

「それは偏見ですよ、翔太。」

「そう言えばさ、どうしてお前は急に椎名を名前で呼び始めたんだ？」

「え、えっと。それはですね…。ひ、秘密です。」

なにやら顔を赤くする慶斗。それを見てニヤニヤする翔太。慶斗が慌てふためきながら昼食を促したので、その話は一旦お流れとなった。

「いただきます！」

適当に注文した物を食べる二人。可憐は一人離れて座っていた。慶斗が誘ったのだが、“いい”の二文字で拒絶されしまった。慶斗も深追いはよくないと思ったのか、それ以上は誘わなかったのだが…。

「お、慶斗に青龍。ここ座っていいか？」

来たのは龍夜だった。彼も自分の昼食を持っている。二人は龍夜を大歓迎した。昼食を食べながら、最近の学園での出来事を話したりしていたのだが…。

「なあ、あそこに座ってる泉だけどさ…」

視線だけで彼女を見やる龍夜。そのまま話を続けた。

「あいつ、時々奇怪な行動してないか？」

席を立つ可憐。食器を戻して食堂を出た所で風沙が現れた。可憐を見つけるなり、可愛いを連発する彼女。対して可憐はいつもの無表情だった。慶斗達も慶斗達で、時々いなくなる事、人と関わりを持とうとしない事を話した。少し考え込んでから、龍夜は切り出した。

「お前らには話しておくべきだと思う。これはまだ推論でしかないが…。俺は、泉可憐が中国系征儀伝。またはその手先じゃないかと考えている。」

龍夜の持論に二人は驚いた。龍夜は話を続ける。

「以前の戦いを見ていて不思議に思ったんだ。彼女は色々征儀伝としての限界を超えている。装甲征儀をした上での魔術の使用。最終的には魔獣を素手で倒した。もし、中国系征儀伝の身体能力向上をアルマライズに置き換えれば、泉可憐の戦い方は中国系そのものだ。」

確かに納得できない事は無い。もし可憐自身が中国系でないとしても、何かしらの施しを受けている可能性がある。

「泉が、中国系征儀伝の仲間…」

「待つてください！兄い。泉さんは、僕と風沙が本物の中国系征儀伝に襲われた時に守ってくれたんです。彼女自身も怪我を負いました。」

あの事件の日、確かに泉はピンチを救った。慶斗の言う通り、彼女も怪我を負ったが…

「お前の話を聞く限り、泉は相当都合のいい時に現れたんだよな？」

「はい…。僕らが完全に押されてる時でした…」

「タイミングが良すぎるとは思わないのか？」

「偶然ですよ。きつと。それに泉さんも押されてました。」

「それが仕組まれた演技だとしたら？」

龍夜の言い分はこうだ。中国系征儀伝と結託している可憐は、あらかじめの打ち合わせ通りに動いていた。そしてあの日、慶斗達を助けると見せ掛けた演技をしたと言うのだ。確かに筋が通る話である。今のところ龍夜は慶斗と翔太と学園長にしか話していないが、広められれば、完全にその話は信じられるのだろう。なにせ、“朱雀龍夜”の言う事なのだから。慶斗達は何も言い返せなかった。一生懸命龍夜の見解の穴を探そうとしたが、見つからない。

「俺は泉の事を調べてみる。お前らも気になる事があつたら、俺に教える。じゃあな。」

空になつた食器を持つて、龍夜は立ち去ってしまった。

「あれあれ？なんで暗い顔をしているのかなあ？」

龍夜と入れ替わりに来たのは、図書館から戻ってきたらしい風沙だった。その手には、自分の昼食を載せたトレーを持っている。

「え、いやいや。特に何でもないですよ、風沙。あれ？本は借りなかつたんですか？」

慌てて取り付くろう慶斗。図書室帰りなのに本を持っていない事を指摘すると、“気に入ったファッション雑誌が無かつたんだ。折角可憐ちゃんと慶斗っちの新しい服の参考にしようと思つたのに”と返される。背中に旋律の走つた慶斗は、それ以上その話題を続けるのをやめた。そして、今さっき龍夜が話した事も言うべきではないだろうと。付き合い方はどうあれ、風沙は可憐の友達である事には変わらないのだ。今は話すべきではないだろうと思う慶斗と翔太であった。

追跡 ✕ コレル

「はい。計画は順調です。朱雀龍夜ですが、呪文をいくつか開発する以外は特に。はい、仰せのままに。」

電話を切る少女。人気のない廊下の片隅で小さく話していた。計画は順調、龍夜についても話しているようだ。

「泉さん？」

ふと聞こえた声。振り返ると、そこにいたのは慶斗だった。不思議そうな顔をして可憐を見つめている。

「どうしたんですか？誰かに電話でも…」

「あなたには関係ない。」

その場を早足で立ち去ってしまう可憐。いきなり慶斗に話し掛けられたのにも関わらず、表情一つ崩さず、無表情を貫き通していた。彼女の後姿を見る慶斗。しかし、彼女の背中は何も語ってはいなかった。

放課後のこと、ほぼ全員の生徒が帰った中で、夕日の差す校舎を可憐が歩いていった。前だけを向き、廊下の一番奥だけを見つめて歩き続ける可憐。その後ろをつける人影があった。朱雀龍夜、慶斗の兄その人だ。昼休みに可憐を疑うことを慶斗に話し、尾行することに決めたらしい。

「どこへ行くつもりだ？この先にあるのは…」

1年以上をこの学園で過ごした経験を頼りに、龍夜は可憐の目的地を絞る。各学年、各クラスの教室には用がないだろう。あるとすれば…

「保健室か？」

そこで龍夜の記憶が繋がる。一ヶ月ほど前の、最初のSクラス有志の警護組織が始めて集まった時、慶斗が倒れた為、保健室へ連れ

込んだ。その時に、可憐が奥の部屋へ行くと言う奇行を起こした。保健室と可憐に何の関係があるのだろうか？

「もしかして、保険医も中国系征儀伝の…」

龍夜の頭に嫌な予感が横切る。そうになると、この学校にはそれなりの数の中国系征儀伝かその仲間がいる事となる。可憐が時々失踪するのは、その様な仲間とコンタクトをとる為だと考えれば納得がいくのだ。

龍夜の予想通り、可憐は保健室のドアを叩いた。中から保険医が出てきて、彼女を招き入れる。可憐は保健室の中に入ってしまった。急いで保健室のドアに耳を当てるが、奥の部屋に入ったのだろうか。全く会話が聞こえない。意を決した龍夜が保健室の中に入りこむ。誰もいない保健室、やはり二人は奥の部屋なのだろう。その部屋に続くドアに耳を当てた。

「はい、これ。」

「確かに受け取りました。」

短い会話だった。椅子を立ててドアに近づく音。龍夜は焦った。いくらなんでも話が短すぎる。これから保健室が出るのは時間的に無理。振り返り、身を隠す場所を探した。薬品棚が目に入る。その陰に隠れる事にした龍夜。

しばらくして保健室のドアが閉じられる。しかしだった。

「誰かいるんですよ。さっさと出て来なさい。」

保険医の声だった。龍夜は内心舌打ちをしながらも影から出てくる。あのまま隠れていた所で、事態は好転するとは思えなかったからだ。

「またあなたなのね？今度はストーカー？稀代の天才が聞いて呆れるわね。それに、あの泉って娘も、あなたの追跡には気付いていたのよ。」

会話が異常に短いのは、自分をつけている存在を知っていたから、と今更になって気付く龍夜。いつでも身構えられるように、生徒手帳に手を伸ばした。

「怖い顔ね。武器で私に襲い掛かるつもりかしら？」

「一つ聞きます。泉可憐とあなたは、どんな関係なんですか？生徒と保険医では済まされませんか？わざわざ放課後になってから来るんですから。」

中国系征儀伝と言う言葉は使わない龍夜。相手を逆上させてしまう可能性もあるからだ。保険医も一つため息をついた。

「私だって知らないわよ。秘密がある事は認めるけどね。」

顔をニヤリとさせる。“妖艶”と言う言葉が似合いそうなの笑みは、大抵の男なら見とれてしまいそうだった。しかし、龍夜は自分の中にある疑いを更に強めるのだった。

「俺はこれで帰ります。失礼しました。」

「じゃあね。天才君。弟を大切にするのよ。それに、一つ忠告しておくわ。正義感が強いのはいい事だけど、あまり深くまで首を突っ込む事には感心しないわよ。」

「龍の首が長いのは元々ですから。」

自分の名前と己の魔獣にかけて言った冗談なのかは分からないが、龍夜の目は諦めないと物語っていた。保険医も“あら、面白いジョークね”などと言っている。二人はその言葉を以って、それぞれの方向へと向っていったのだった。

どこかの路地裏。征儀伝の遺体を足元に二人の影が立っていた。

その近くにはガラス質の粉がばら撒かれている。

「おい、何故また征儀伝殺しやってるんだよ。“あの人”に迷惑が掛かる。」

「いいじゃねえかよ。力が使いたくてウズウズしてるんだ。」

「そんな私情で計画を乱すな。我々はあの人選ばれた存在。それが計画を踏みにじるな。」

「そう硬くなるなって。」

この二人、実を言えば中国系征儀伝である。今夜も殺しをしてい

たらしい。

「んで、“あいつ”はどうなってるの？最近姿見ないけど。」

「あいつは我らの中で一番力を与えられている。今は情報収集をしながら、計画の始動を待っている。」

“あいつ”と呼ばれた存在が誰なのか。それは誰にも分からない。しかし、彼らよりも力を持っている事が伺える。将来、スペイン・ギリシア系征儀伝の脅威になりうる事は必須だろう。

「また、この感覚…。薬、飲まなくちゃ…」

胸を押さえて蹲る少女。やつの事で柵から薬のビンを取る。またもや薬としては規定量以上の量を出した。それを一気に飲み込む。痛みが引いてきたのか、立ち上がってベッドに座る。

「私はこのままでいいのかな…。本当に辛いよ…。この薬だって止めたいのに、もう、一生止められない…。計画が終わったら、私はどうせ用済み。私、本当にどうすればいいの？」

自問する少女。自然と涙が溢れてきた。枕を抱きかかえて嗚咽を留める。だけど、いつまで経っても涙は止まりそうにない。ギョツと枕を抱きしめて横になる。その内眠ってしまったのか、彼女はスヤスヤと寝息を立て始めた。しかし、目に浮かぶ涙は留まる事を知らないのであった…。

追跡 ✕ コレル（後書き）

はい。ここで伏線をもう一つ回収しました。物語の第一話の一番最初に電話をかけていた少女、覚えていますか？正体は可憐でした。え？分かったた？そうですか…

時々出てくる別な“少女”。毎回薬飲んでいますね。これも伏線です。今回は泣いていました。安易に可憐だと決め付けるにはまだ早いかも…

新しい伏線。“あの人”と“あいつ”。どうやら、“あの人”とは中国系征儀伝の首領的な立場だと思われます。そして、“あいつ”とは誰なのか？今は情報収集を行っているそうです…。しかも、中国系征儀伝の中でも強い力を持っている。今の所ぴったり当てはまるキャラといえは…

そのほかにも、この話の真相に近づくヒントや鍵がいくつか置かれています。次回、薬を飲んでいる少女の正体が分かるかも…（ニヤリ）

そう言えば、可憐ばかり疑ってますけど、それなりに他のメンバーだって怪しいんですよ？それでは、次回の投稿をお楽しみに…

卑怯 ドルミトリオ

今日も南陽学園に生徒が登校する。その中で一際一目を引く集団があつた。

「これは確かに一目を引くよな……」

翔太が呟く。彼の隣には可愛らしい女子の姿が、いや、違った。女装した慶斗である。凧沙に自分の制服を奪われてから早数週間。その間彼は女子の制服を着ていたのだつた。「新しい制服を買えばいいじゃないか」と言われそうだが、慶斗自身が「勿体無い」と言つたのだ。それに、新しい制服さえ奪われる可能性がある。そんな慶斗も最近は凧沙の持つてきたニーハイを履いたりしているので、翔太としては“女装を楽しみ始めてる”と言う考えさえ浮かんだものだ。

女装する慶斗にしがみ付いてるのは椎名凧沙。慶斗をコーディネートした張本人であり、“可愛い物”と“面白い物”が好きな子である。いつものスマイルで慶斗の右手を握っている。

彼女の右手に繋がれているのは泉可憐。いつもながらの無表情で歩いている。しかし、その格好はメイド服。時たま凧沙の策略によるものか、メイド服が変わる。しかし、本人は嫌な顔一つしない。……できないのかも知れないが。

そんな一学年Sクラス4人の後ろを歩くのは、龍夜と玲奈だつた。いつもの事だが、玲奈は龍夜にベッタリである。そんな6人が周囲の注目を浴びるのも必須だつた。

「グッモーニングぢや、皆。おや、いつもの如くぢやの。」

現れたのは中里類。龍夜達と同じく二学年Sクラスであり、魔法より魔獣自体の戦闘力を強めると言う、珍しい征儀伝である。彼は翔太の隣に並んだ。あの日試合をしてから、彼らは何かと話をするようになつていた。

「中里先輩、おはようございます。」

「青龍。いつもながら一人取り残されてるようぢやな。」

「それは言わない約束です。先輩。」

とまあ、何気なく人の気にする所を突いたりする、天然毒舌家な所がある彼なのだが…。

「風沙…。僕はいつまで女装をすればいいんですか？」

「私の気が済むまでだよ。」

即ち、一生と言う意味である。慶斗がムスツとして風沙を見た。しかし、何かに気づく。

「風沙？泣いてたの？」

「え？ああ、これ？昨日すごく泣ける映画見たんだ。女装する男の子がついには死んでしまうお話」。慶斗つちも見る？貸すよ！」

「え、遠慮します。…風沙でも泣くんですね。」

「あつ、酷い！私だって泣くときは泣くんだから。そんな事言っと、絶対ツ女装許してあげないんだから。プンプン！」

「ごめんなさいですうゝ！」

「いいじゃん。龍夜先輩だって慶斗つちの女装気に入ってるんだから。そうですね、龍夜先輩？」

「そ、そうなんですか、兄い？」

慶斗（女装ver）が振り返って龍夜に真偽を問い始めた。保険医のあの妖艶な笑みを見ても動じなかった龍夜のはずが、龍夜の女装姿（+涙目）を見てギクツとしたのだ。何故か顔を赤くしている。慶斗がそんな彼を疑問に思って首を傾げる。

「これは…ヤバイ…」

龍夜が一言呟いた。慶斗は更に分からなくなるし、玲奈は慶斗を睨み始めた。どうやら敵対心を持ったらしい。

「慶斗君、近親相姦って知ってる？」

「ふえ？それってアレですよ？血の繋がりが強い人同士の…」

「わぁー！わぁー！わー！」

無駄に純粹な慶斗は、意味を人前で淡々と喋ろうとする。遮った

のは他でもない玲奈だった。朝から学校近くでそんな事を喋られたら、誤解されるに決まっている。無駄に強敵になってしまったと思う玲奈であった。

さて、慶斗たちが教室につく頃、Aクラスでも色々あった。Aクラスと言えば、クラス決定試験において、慶斗たちのコンビに勝つたにも関わらず、Sクラスを辞退した二人組みがいる。天馬鹿狩、一角獣誠也だ。この二人、Aクラスの中でも実力はずば抜けており、一番Sクラスに近い存在と言われている。

「兄貴、おはようございまさあ！」

「うむ。」

基本、無口な長身男子の天馬鹿狩。属性が暴力と言う特殊属性を持っているのだ。対して江戸っ子口調の小柄な男子、一角獣誠也の属性は金となっており、学園入学以前からチームを組んでいた二人のコンビネーションは高いものだった。

「クラスアップ試験、どうして行かなかったんですかい？俺達の実力なら直ぐにSクラスに上がれるんですぜい？」

「前にも言ったはずだ、イツカク。同じクラスにいては向上心が廃ってしまう。それなら違うクラスで己を磨いた方がいいのだ。」

「流石は兄貴でさあ！人間できてら。」

褒め称える誠也。しかし、クラスの全員としては、自分が脚光を浴びれない為、さつさとSクラスに行つて欲しいようだ。まあ、特に鹿狩の風貌が少々恐ろしい為、口が裂けてもそんな事が言えないのが事実なのだが…。

場所は変わってここはDクラス。最低クラスにして、この前のクラスアップ試験においてSクラスに完敗したクラスだ。

「何故だ！Sクラスに入るべき俺が、決定試験では一回戦敗退、アップ試験でも完敗。世の中不条理すぎるぞ！」

「そうだ！ハーレム形成を根幹から崩しやがって！」

騒いでいるのは、慶斗たちのチームに初戦で敗退した二人。名前をそれぞれ、玄武大那と亀倉智樹と言う。二人は自称Sクラス筆頭であり、ハーレム王の肩書き（自称）を持っていると言う。Sクラスに入れば、自分のハーレム形成が大きく前進すると考えているのだった。

「何かいい作戦があるはずだ！」

「そうだ、こう言うのはどうだ？Sクラスの男子を闇討ちにし、コテンパンに叩きのめす。そして二人が入院し、俺達が勝った事を広めれば、教師も俺達の実力を認めてSクラスに入れるに違いない。しかも、Sクラスに勝ったとなれば、女子からの注目も浴びて、ぐふふふ……。」

どうやら二人の辞書には、“卑怯”の二文字がない様だ。そんな事を大声で相談している二人の背中からは、冷たい視線に寸分もなく突き刺されているのだが、二人はやめようとしめない。いや、気付いていないのだろう。夢い二人の夢への一歩が始まったのだった。

馬鹿 イデオータ

「こちらスネーク、基、玄武だ。そちらの状況を伝えよ。」

「こちらタートル、基、亀倉。順調に対象を追跡中。」
ターゲット

その日の放課後、二人はとある二人を追跡していた。玄武は慶斗を、亀倉は翔太だ。本当に闇討ちをかけるらしい。夕暮れも終わりがけ、暗闇が迫る頃、それぞれは二人を追っていたのだった。

「俺が追っているのは女子だが？」

「噂に寄れば、俺達の追跡を逃れる為の変装らしいぞ。はっ、俺達に掛ければそんな変装なんて意味を成さないがな！」

とりあえず、元気のいい馬鹿二人だ。慶斗は夕食の買い物に向っているし、翔太も自分の寮に進む道を進んでいる。そして、作戦は決行された…。

「朱雀慶斗、覚悟ー！」

後ろから鉄パイプを持って駆け出す玄武。闇討ち宣言をしておきながら、最後が馬鹿丸出しである。今日の夕食の献立を考えていた慶斗は、その声にはっと振り向いた。突っ走ってくる人影。

「中国系征儀伝？」

【アルマライズ！】

白銀の刀を取り出し、鉄パイプを受け止めた。この二ヶ月で、剣術も少しは練習していた慶斗。ある程度なら攻撃を受け流すことができるのだ。

「俺の！俺のハーレム計画のために散れー！」

しかし、玄武も馬鹿力で慶斗を押し切ろうとする。普段からそこまで力が有ると言う慶斗ではないので、少しづつ押され始めた。可憐の様に、アルマライズの上で電撃攻撃ができる訳ではないので、

力と力の勝負だった。因みに、慶斗がさり気なく可憐にその技の事を聞いたが、“潜在能力、あなたには無理”と返されて知ったのだ。元々アルマライズには契約者のスキル向上の効果もあるが、力を増すことはできない。この戦いは慶斗が不利だった。

「朱雀先輩の作った技か。だが、力負けするようではSクラスの名折れだな！」

「なんで中国系征儀伝は他の征儀伝を襲うんですか！」

「そんなの知るか！」

無茶苦茶に鉄パイプを振り回してくる玄武。必死に弾き返している慶斗。しかし、下から振り上げられたパイプが慶斗の刀を飛ばしてしまった。

「はっはっはっ！ボコボコにされてDクラスまで堕ちると良い！俺が新たなSクラスだ！」

鉄パイプを構えて走ってくる玄武。慶斗は丸腰。

【アルマライズ・セグ】

突然慶斗が唱えた呪文。慶斗の左手に光が収縮し、先程よりも短めの刀が握られた。脇差と言った所だろうか。それを以って鉄パイプを受け止めた。

「なっ、さっき弾いたはずなのに！？」

「二本目の刀です。殺されるわけにはいかないのです。」

刀身が短くなった分、振り回す速さが速くなる。今度は玄武の押される番だった。

「ちょ、待て！このチート野郎が！」

「兄いが晩御飯を待ってるんです。速くけりを付けなくてはならないのです。」

自分の身より、龍夜の夕食が大切な慶斗であった。勢いに押されて、後退する玄武。そこに白銀の刀が飛んで来た。あまりの事に目を瞋る玄武。直ぐ目の前まで迫っていた。このままでは顔面に当たって死ぬだろう。

【エクスジェンシア！】

しかし、慶斗の召喚呪文で刀は消え、その代わりにエンジェルドラゴンが現れた。アルマライズは魔獣の力の一部。大元となる魔獣を召喚すれば、武器は消えるのも当然だった。しかし、当の玄武は失禁している。内股になりながら立ち上がった。

「中国系征儀伝に対しては、魔獣の攻撃が許可されています。」

「ま、待て！俺はその、何とか征儀伝じゃない！ただのスペイン系だつて！」

【主の命令です。光の弾で対象を打ち抜け。バレ・デ・ブライヤー！】

大量の光弾が玄武を襲う。彼は自身の魔獣を召喚する暇もなくその攻撃を受けるのだった。後に残るのは、プスプスと音を立てながら焦っている玄武の姿だけ。全てを無形にするあの上級征儀を使わなかったのが、不幸中の幸いだろうか？

「警察に連絡して、僕は兄いの夕食を作らなくちゃなのです。」

携帯をポケットから取り出し、足早にその場を立ち去る慶斗だった。

場所は変わって、翔太を追い続けるタートルこと、亀倉。彼は玄武ほど甘くはなく、音を立てなければ大声を上げて襲い掛かることもしなかった。闇討ちの理由がもっとまともな内容だったら、どれだけ良かったことか。

【エクスジェンシア】

寮の手前、亀倉が己の魔獣を召喚する。続いて呪文を詠唱、翔太の前に炎が灯った。炎の壁が現れ、翔太の逃げ場を無くしてしまう。

「誰だ！」

「青龍翔太、お前をSランクから引き摺り下ろさせてもらう。」

茂みから出てきた翔太。こうやって、決戦のフィールドを用意する所は玄武とは違う。…目的は同じなのだが…。

「誰だか知らないが、返り討ちにしてやる。」

【エクスジェンシア】

蝙蝠の魔獣を召喚する。やはり暑いのか、翔太は魔獣に乗って上空へ飛んだ。

【主の命令だ。疾風の針で対象を貫け！アゲン・デ・トルメンタ！】
上空から針を雨あられと放つ。いつもよりより広範囲を攻める為に、飛ばす向きを様々にする。シールドを張る亀倉。攻撃範囲の密度が低いせいか、何とか防御を成功させる。

【アジエツト・デ・トルメンタ！】

突進攻撃をする翔太。実を言えば、翔太は類から魔獣の攻撃力に関する指導を受けていた為、突進攻撃に関しては威力が底上げされているのだ。再びバリアを張る亀倉。しかし、それは蝙蝠の突進攻撃によって碎かれてしまった。

【バレ・デ・トルメンタ！】

大量の疾風弾が降り注ぐ。バリアを張るまでも無く、無残にも攻撃を受けてしまった亀倉。魔獣も消えてしまい、戦闘不能の状態。

「さあて、何が目的だったのかキツチリ教えてもらおうか？」

手をポキポキと鳴らしながら、翔太が亀倉に歩み寄った。ヒイイイと騒ぐ亀倉。逃げようと試みるのだが、その前に翔太に掴みかかられてしまった。嫌な笑顔をしながら翔太が問いただし始めるのだった…。

「なんだよ、つまらない理由…」

30分後、プスプスと湯気を上げている亀倉を尻目に、翔太は自分の部屋へと戻っていくのであった。

「あ、翔太。」

「おお、慶斗。買い物帰りか？」

「はい。今日の夕食は兄いの大好きな物を作ろうと思ひまして。」

「龍夜先輩の好きなのって、お前の女装…、なんでもないや。先輩にも宜しく言ってくれ。」
「はい。」

二重 アルマライズ・セグ

「学園長、やはり泉可憐は怪しいです。俺もそれと無く調べてますが、不審な点が多すぎます。」

「そうは言うが、確実な証拠がない。例えば、中国系征儀伝と密会している現場を押さえるとか。」

「…。」

学園長室で話しこむ龍夜と学園長。龍夜のみが生徒の中で、可憐の異常さに気がついている。呪文を開発しているからこそだろう。しかし、学園長の言う通り、証拠が不足している。あの保険医も仲間と言う可能性が否めないが、やはりそこでも確かな物は得られなかった。学園長としても、立場上ただ怪しいと言う理由で、可憐を問い質す事はできない。

「時間は刻々と迫ってるんです。中国系の奴らが動き出してるという事は、“あの儀式”を執り行おうとしている証拠です。」

「確かに。時間はそう残されていないだろう。だからこそ入学当初から君には協力してもらっていた。泉可憐は中国系征儀伝へ繋がる鍵であると言い切れないこともない。」

「ならば！今すぐにでも！」

「是が公になり、その上私たちの勘違いでしたら、君や私は間違はなく失墜し、中国系征儀伝の計画を阻止する事もできなくなる。そうなれば、彼らの思う壺だ。世界を終焉に導くことになる。」

学園長の言葉に、龍夜は言い返すことができなかった。

「証拠なら…、俺が必ず見つけます！」

そう言い残し、龍夜は学園長室を出て行った。それを見送りながら、学園長は今日に入って何回目かのため息をつく。ゆっくりと視線をずらし、龍夜が使った出入り口とは別なドアを見た。一軒壁の一部にしか見えない様なつくりだが、帽子掛けに似せたドアノブが、それをドアだと認識させる。

「命だけは落とさないでくれ、わしの孫の為にも。そして、君の弟の為に…」

「まったく、中国系征儀伝かと思っただけ、ただのDランク生徒だったわけだ。馬鹿みたいな話だろ？」

「大変だったねえ。」

平和なSクラスのメンバー。昨日の夜の事を語る翔太に、呑気な風沙。苦笑いの慶斗に、無表情な可憐。勿論の事、可憐はメイド服を着用して黒板を眺めているし、慶斗も女子の制服を着ている。最近、風沙の思いつきで可憐の頭には猫耳が装備された。彼女曰く、

“猫耳メイドは最強なんだよ” だそうだ。

『学園連絡、今日の放課後に警護部員の集会をする。一年のみ放課後模擬場に集合せよ。』

教師の声が教室に響く。その部員である慶斗たちは、いち早く反応した。

「今日の放課後ですね。しかも僕達だけです。」

「今日はどんな呪文を習うんだ？」

期待を膨らませるのであった。

そしてその日の放課後、慶斗たちは模擬場へやって来た。既に龍夜は待つており、その腕にはしっかりと玲奈がオプション装備されている。その姿を見て一瞬嫌そうな顔をする女装の慶斗。しかし、直ぐにいつもの表情に戻すのだった。

「今日は装甲征儀の特訓だ。魔力を大幅に食う呪文だが、慣れればこんな事もできる。」

【主の命により、力の欠片を契約者に譲渡せよ。アルマライズ・セグ】

いつもの装甲征儀呪文とは違う呪文である。龍夜の両手に光が宿

ると、それは二本の刀となった。それを見せると、龍夜は直ぐに刀を消した。

「こうすれば、攻撃の手数も増えるってわけだ。二年に続いてこのアルマライズの呪文を使い慣れてるのは、お前らだ。だから今日はお前らを集中的に指導する。各自やってみろ。」

【主の命令です。力の欠片を契約者に譲渡せよ。】

【主の命令だ。力の欠片を俺に宿せ！】

【主の命令よ。力の欠片を契約者に渡しなさい。】

【主の命令、力の欠片を契約者に渡せ。】

【「アルマライズ・セグ」】

慶斗、翔太、風沙の両手に武器が握られた。元々両手にガントレットが装備される可憐、彼女の足元には脚甲アングレットが装備されている。即ち、装備量が二倍に増えたことになる。

「兄い、すぐく魔力を吸われます。」

「まあ、そうだろう。通常のアルマライズの二倍、いや、それ以上の消費量だからな。慶斗ならそれなりの長時間は使えるはずだ。ああ、そろそろ解除しろ。」

龍夜が呪文の解除を勧告する。呪文を解除すると、3人は疲れた顔をした。慶斗でさえ目を閉じて息を吐いてるのに、可憐は無表情を崩さない。龍夜はそれを見て顔をしかめる。やはり可憐は普通じゃないと。

「龍夜先輩。俺は長槍なんで、一つで十分です。」

「私も弓だから二つあると攻撃できませ〜ん。」

確かに翔太の風沙は、二つも武器が要らないだろう。もし、“アルマライズ・トレス”と言う呪文があれば、可憐の胴体も装甲で覆われるのだろうか？

「さて、模擬戦でもやってみるか？慶斗や青龍とは何回か模擬戦をしたからな…、泉、どうだ？」

コクンと頷いた可憐。フィールドまで出て行く。今回、龍夜は意図的に可憐を選んでいる。わざとアルマライズの強化版を教え、模

擬戦で使わせる。魔力消費量が高いこの呪文を長時間使える事はできないので、何かしらのアクションを起こすと考えたのだ。即ち、ボロを出すと。

「戦闘開始」

【エクスジェンシア】

【アルマライズ・トレス】

全員が息を呑んだ。可憐がアルマライズに固執している為、この試合でも使う事は予測していた。しかし、今の可憐には手甲、脚甲、胸部プロテクターがついているのだ。猫耳メイドの格好に合っていない事は勿論だが、龍夜の教えた呪文より更に強力な呪文を使用している。

「征儀三重装甲、とでも言えいいのでしょうか？」

「泉ってさ、アルマライズだけで三年の相手したり、Dランクの一斉攻撃も跳ね返したよな？その三倍って何だよ？」

「攻撃しないの？先輩。」

【主の命により、対象を貫く闇の弾を放て。バレ・デ・オスクリード】

漆黒の弾丸が可憐に襲い掛かる。それをいつもの無表情で見つめる可憐。ガントレットを振るった。予め呪文を詠唱してあったのか、ガントレットから電撃の刃が飛び、闇弾を相殺した。相殺されなかった弾は更に進むが、アंकレットでけり返す。

「マジでやばいんじゃないか？泉って…。」

「兄いの技を跳ね返すなんて…」

「猫耳メイド、鎧バージョン 今度はミニスカートにしようかな」などなど、それぞれが感想を述べ合う。龍夜もあまりに予想外の出来事に焦りを隠せない。自分の予測以上の装甲を纏い、それでもって自分の攻撃を跳ね返したのだ。いくら征儀装甲によってスキルアップが望めるとしても、ここまで長く大量の装甲を維持するのは難しい。

【主の命により、対象を闇で包み込め。コーティナ・デ・オスクリード】

ドラゴンが闇を吐き出し、周囲一帯を見えなくする。魔獣の攻撃を見破るには魔獣が必要。アルマライズでは無理だろうと画策したのだ。しかし…

「くっ…」

【アルマライズ！】

龍夜がいきなり魔獣を消し、闇色の刀を手につ。それを後ろに回した。次の瞬間、ガキンと言う音がしたのだ。

「どうやってここまで…。音もなかったはずだ…」

「外した」

距離をとる二人。魔獣消失の為、維持出来なくなった闇が晴れていく。龍夜を始めとした全員が驚いた。可憐の体が宙に浮いていたのだ。まるで中国系征儀伝の如く。

「私の番」

可憐が一言小さく呟いた。

二重 アルマライズ・セグ（後書き）

久々に解説をしようと思います。

・アルマライズ・セグ／アルマライズ・トレス
アルマライズ
装甲征儀の強化形態。通常の二倍三倍以上の征儀を消費して装甲の武器を作り出す。個人の武器によっては使わない方がいい場合もある。また、相当な量の魔力を消費するので、慶斗でも長時間は使えない。

“魔力の質”について

以前、装甲征儀で作られた槍を双剣が切ると言う描写がありました。それは魔力の質による物だと解説したのですが、ここでもう一度詳しく例を挙げて解説したいと思います。

発泡スチロールとコンクリートがあるとします。例えば発泡スチロールを慶斗の武器、コンクリートを龍夜の武器と考えます。

慶斗の魔力保持量が高いので、たくさん魔力を使用して武器を作ります。ですが、龍夜はそれよりずっと少ない量の魔力で武器を作りました。

さて、慶斗の武器は龍夜^{スチロール}の武器^{コンクリート}を傷つけられるでしょうか？正解はNOです。逆に、コンクリはスチロールを簡単に壊せます。これが作者の言う、“魔力の質”です。簡単に言えば、“密度”です。魔力の密度を上げれば、大量に魔力を使用する敵にも勝てるということです。

余談ですが、最近ストックがたまってきました。作者が混乱しない

意味も込めて、また毎日投稿をやるうと思うのですが、いかがでしょう？

表情 アケン（前書き）

昨日の宣言どおり、期間限定かもしれませんが、再び毎日投稿をさせていただきます。実を言えば、まだ始まっていない夏休みの話は、私のストックでは終わってるのです。たぶんですが、2週間は毎日投稿を続けられるのではないかと？

表情 アゲン

空中を滑る様にして、可憐が龍夜に迫る。既にガントレットを構えている。龍夜も刀を二本に増やし、攻撃に耐えようとした。可憐の太刀筋を見極め、そこに刀を入れる。力は龍夜の方が強いいため、一度受け止めてしまえば弾くのは簡単だった。そのまま龍夜が追い討ちを掛けようとする。しかし可憐も空中を自由自在に動き、龍夜の攻撃を当てさせない。龍夜の刀をガントレットで受け、蹴りを入れる。

「はあっ！」

蹴りを避け、直ぐに二刀流で可憐に刀を振り下ろす。しかし、可憐はガントレットでそれを挟み込むように絡め取った。

「引つかかった。」

電流をガントレットを通して電流を流す。観客席は啞然とした。人間相手にあれを使えば、龍夜が感電死する可能性がある。まるで可憐が龍夜を殺さんとする勢いだ。

「甘いな。俺の属性は闇。電撃はあまり通じないんだよ。」

刀を握る龍夜は涼しい顔をしている。闇が電撃を吸収したため、龍夜には届いていないのだ。

「中国系征儀伝との決着に思おうと思ってた呪文、お前に一瞬だけ使ってやる。」

【主の命令だ。力の全てを契約者に譲渡しろ。アルマライズ・エンシマー！】

呪文を唱えた途端、異常が起こった。龍夜の刀が消え、可憐のガントレットが疎かになる。そのままガントレットを振り下ろそうとする可憐。しかしだった、龍夜を覆う様に大量の闇が噴き出し、可憐を弾き飛ばしたのだ。征儀三重装甲も消えてしまった可憐。地面に叩き付けられる。観客は視線を龍夜に移した。闇のオーラが龍夜を覆い尽くし、闇色のローブのようになっていた。そして、彼の目は

燃えるような赤だった。見えないが、魔石も真紅に変わっているに違いない。魔力大量開放をしている証拠である。だが、彼は直ぐにその状態を解除した。

【エクスジェンシア！】

再びドラゴンを召喚。攻撃態勢に移る。今の可憐には身を守る術がない。

【アゲン・デ・オスクリード！】

闇の矢が大量に降り注ぐ。龍夜はこの時を待っていた。ここまで追い詰められれば、可憐はボロを出し、何かしらのアクションを起こすだろうと。そして、それは中国系征儀伝との関わりを証明する、動かぬ証拠になるはずだと。

【エスクード・デ・ブライヤー！】

しかしだった。龍夜の魔獣が放った攻撃は、誰かの張ったバリアで防がれてしまう。輝く光の壁。このフィールドにおいて、光属性の征儀伝は一人しかいない。龍夜は観客席を見上げた。

「兄い、何を考えているんですか！」

自分の横に魔獣を従えた慶斗が立っていた。魔獣を使ってフィールドまで降りてくる。

「慶斗、なんで邪魔するんだ！」

「兄い、何か変です！なんで戦闘不能状態の泉さんを襲うんですか！」

「慶斗には関係ない。」

「関係あります！兄いは僕の兄いですし、泉さんは僕のクラスメイトです。」

可憐が起き上がる。それを見た龍夜は刀を持ち出し、可憐に切りかかるとする。

【アルマライズ！】

しかし、慶斗も刀を召喚し、龍夜の斬撃を受け止めた。可憐の目の前である。罅迫り合いをしながらも、慶斗は必死で可憐を守ろう

としている。当の可憐は、魔力の使い過ぎの為か、動かずにいた。

「よせ、慶斗。そいつは…中国系征儀伝かも知れないんだぞ！」

「兄い！」

思わず龍夜が叫んでしまう。それを阻止しようと同じく叫んだ慶斗の力が、一瞬弱まってしまふ。模擬場の全員が驚いた。龍夜は慶斗を力任せに退かし、剣先を可憐に向ける。

「正直に言え、お前の正体は何者だ？」

「私は…、中国系征儀伝じゃない」

無実を言い張る可憐。だが、龍夜が不審点を上げていくに連れ、周囲の皆が納得した表情を見せるのだ。可憐の親友である風沙でさえも、思いつく点があった。

「確かに、言われてみれば泉って時々いなくなるよな…。」

翔太が呟く。可憐に味方はいない様に思えた。

「僕は、泉さんを信じます。彼女が違うつて言ってるんです。何で信じてないんですか！」

慶斗が再び可憐の前に立つ。両手を広げて立ちはだかる。龍夜が刀を下ろした。

「ならばどうしろと言った？本当にコイツが中国系だったら取り返しのつかない事になる。」

「なら、僕が責任を持ちます。僕が、彼女の無実を証明します。」

腕を掲げたまま、まっすぐ龍夜を見て慶斗が言った。睨むでもなく、面倒そうな顔をするでもない。強い意志の元、この様な行動をしているのだ。

「お前が危険にさらされる。この前決めたんだ。お前に負担を掛けないと。兄として弟を守らなくてはならないんだからな。」

「僕は大丈夫です。絶対に危険な事になんかなりません。だって、僕は泉さんを信じてますから。」

“そうかよ”と言呟き、龍夜は刀を完全に消した。龍夜に戦う意思がないと思い、慶斗は可憐に駆け寄る。

「泉さん、大丈夫ですか？」

「うん…」

そのまま可憐に肩を貸すと、慶斗は歩き出した。皆はそれを何も言わずに見送る。分らないのだ。慶斗の言葉は正しいかもしれない。だが、完全に信じきれることができない。慶斗の様に一から十まで信じ切れないのだった。

「ちょっと、止まって…」

「あ、ごめん。大丈夫？」

「うん…」

可憐が慶斗に背を向けた。しかし、数秒で振り向いた。

「さつきはありがとう。私を信じてくれて。助かったよ、本当にありがとう。」

慶斗は少し啞然とした顔をする。可憐が、笑っていたのだ。嫌味じゃない、心からの笑顔でニツコリと笑っていた。目の前の光景が信じられないと言った感じの慶斗。そんな顔を見て可憐はムツとする。一つ一つの動作が名前の通り、“可憐”だった。しかし、それも束の間、気付けば可憐はいつもの無表情に戻っていた。

「泉さん…？」

「今のは忘れて。それに、可憐でいい。」

それ以降、可憐は全く喋らなくなってしまう。彼女を寮まで送り届け、慶斗も自分の部屋へと向った。部屋のドアを開けると、トラソクが一つ、龍夜が一人。

「兄い？これは何ですか？」

「慶斗、お前は自分で言ったよな？泉可憐の行いに責任を持つと。」

「はい。」

イマイチ龍夜の言っている事が飲み込めない慶斗。

「学園長に頼み込んで許可をもらった。」

一枚の紙を慶斗に見せた。それには、“朱雀慶斗を泉可憐の監視役に任命する。よって、本日付を以って、朱雀龍夜を泉可憐の部屋に住まわせる事を命ずる。”と書かれていた。

「荷物は用意しておいた。さっさと行って来い。」

表情 アゲン（後書き）

さてさて、慶斗の運命はいかに？

疑惑　ザパト

その後、可憐の部屋に向う慶斗。実を言えば、

“男女が一緒の部屋に住むなんて、許されませんよ、兄い。”

“学園長が良いって言うてる。それに、お前は何かしら泉可憐に許されない事をするのか？”

“え！？そ、そんな事ありませんよ。”

“じゃ、問題はないな。”

“倫理的な問題です！”

“その倫理的な問題とやらを、俺に詳しく説明してくれるか？”

“いつて来ます、兄い。”

と言う会話があったのだが…。可憐の部屋に辿り着くと、呼び鈴を押した。直ぐに可憐が出てくる。慶斗が事情を説明すると、可憐の方も連絡を受けていたらしく、直ぐに招き入れてくれた。

“あなたの部屋はここ。”

“ありがとう、泉さ…。じゃなくて、可憐、で良いんですよね？”

“そう。”

“よろしくお願いします。”

“夕食はできてる。”

それだけ言って、可憐はキッチンの方へ行ってしまった。荷物を置いて慶斗も向う。食卓には相当な量の料理が置いてあった。どうやら可憐は待っていたようだ。しかし、慶斗が椅子に座るや否や凄じスピードで食べ始める。再び啞然とする慶斗。しかし、“なくなる”と可憐に忠告され、彼も食べ始めるのだった。龍夜以外の他人の料理を食べるのは久し振りであった慶斗。思わず箸が進む。だが、慶斗が“おいしい”と感想を漏らしても、可憐は無視するのだった。全ての皿が空になり、可憐が片付け始める。慶斗も手伝おうとするのだが、無言で断られてしまった。片付けが終わった後も、何となく気まずい雰囲気が続く。慶斗はテレビを見て、可憐は本を読ん

でいる。

「ねえ、泉さん。」

「何？」

「泉さんが無実だつて言う証明何かもっていませんか？」

生徒手帳に嵌った自分の魔石を見せる可憐。それは漆黒に輝いている。確かに中国系征儀伝は緑色の魔石を持っている。だが、コレがフェイクだと言う可能性もある為、全員を納得させるには少し信用性に欠けていた。今までの謎の行動を正当化する方法もある。

「まだ、誰にも話せない。」

慶斗の提案にも応じないのであった。これでは慶斗もお手上げ状態である。新たな道を模索しなくてはいけないのであった。

「私は寝る。あなたのベッドは無い。」

「このソファ―借りてもいいですか？」

「来たいなら、私のベッドと一緒に寝てもいい。」

「止めておきます。一緒に寝るなら兄が一番なので。」

なんだか危ない発言であるが、慶斗はソファで寝ることになった。可憐は無表情のままにその部屋を後にする。

「僕は、どうすればいいのでしょうか。」

彼は確実に可憐の無実を信じている。しかし、それを証明できるだけの証拠が無いのが事実だった。そして、彼以外に可憐が無実だと思っている者は、誰一人として居ない事も事実。四面楚歌と言った所だろうか。心配の種は大量にあるのだが、今心配しても何も始まらないと思い、慶斗は眠りに付くのだった。

「馬鹿、本当に馬鹿……」

ゆつくりと慶斗に近付く影。黒いメイド服を着ている。手にはキラリと光る刃物が握られていた。そんな事も知らず、小さく寝息を立てながら眠る慶斗。

「私になんか、関わらなければ安全なのに……」

無表情のまま、涙を流している可憐の姿がそこにあった。もう直ぐ朝である…。

「ふああ…。」

慶斗がソファの上で目覚めた。いいにおいもしている。可憐が朝食を作っていると理解するのに、その時間は掛からなかった。慌ててキッチンへ向う慶斗。メイド服の可憐がフライパンで卵を焼いていた。

「おはようございます。可憐。何か手伝いましょうか？」

「いい」

またもや二つ返事で断られてしまう。次々とテーブルに用意されていく朝食に慶斗は驚くだけだ。どうやら、朝食から相当な量を食べるらしい。

さて、朝食の片付けも終わり、慶斗と可憐は学園へと向う。この時だけ、慶斗は凧沙に感謝するのだった。なぜなら、ここは女子寮。昨日の夜は誰にも会わなかったのだが、朝は人通りも多い。凧沙が無理矢理着せた女子の制服のお陰で、なんとか慶斗の性別を誤魔化せそうであった。後でお礼を言わなくちゃと思った慶斗。だが、それで調子に乗った凧沙がもっと大胆なことをしそうなので、踏みとどまった。

「おはようございます。皆さん。」

ニコリとしながら入室する女装の慶斗。無表情を崩さず入室するメイド服の可憐。

「よっす、慶斗に泉。」

「おはよ、可憐、慶斗っち。」

さり気ない挨拶に見えたが、慶斗には彼らの顔が少々引き攣ったのに気が付いた。やはり可憐を警戒しているのだろう。そのきっかけを作ってしまったのは、紛れも無い龍夜。その弟である慶斗も負

い目を感じてしまうのだった。その反面、可憐の無実を必ず証明してみせると、心の中で強く誓った。

しかし、現実はいまよくないものである。あの時模擬場にいた者だけが知ってるはずの事が、全学園に知り渡ってしまったのだ。教師でさえも可憐に白い目を向ける様になっていた。白い目と言ったら過言だろうが、不審感を持った眼だ。そんな中でも、可憐は無表情のまま過ごしている。慶斗は、“すぐに収まるはずだ” “直ぐに夏休みですから、人目も気にならなくなりますよ。” と元気付けようとするのだが、彼女は彼を無視し続けた。

昼食時、翔太が慶斗に心配そうに話しかけた。

「慶斗、お前が泉を庇う必要なんて無いだろ？俺は違うけどさ、お前も疑う奴だつて出てくると思う。」

「僕は大丈夫です。もし疑われるとしても、それは女装の時だけですから。元に戻れば特に問題はありませんよ。」

「結構女装楽しんでるんだな、慶斗。」

「言わない約束です。」

失踪 パペル（前書き）

今回で伏線をもう一つ回収

失踪 パペル

「学園を…去れ？」

「声の様子だと、薬の効果が切れているらしいな。」

「はい。それよりも質問に答えてください。どうして急に学園を去れなんて言う命令が？」

「そちらの状況は把握している。朱雀龍夜に正体を明かされたそうだな。しかも学園中に噂として広がっていると聞いている。」

「違います！あれは誤解なんです。彼らは私を…」

「薬の効果が出たか…。泉、これは上層部の命令だ。近々第二段階に突入する。今の状況では活動が出来ないだろう。彼女を連れて我々と合流しろ。」

「はい。」

電話はそれきり切られてしまった。無表情な顔の可憐がベッドに腰掛けていた。ベッドの上には錠剤が入ったビンが置いてある。可憐は机の中から別なビンを取り出した。それを一錠だけ飲み込む。強烈な痛みが彼女を襲うが、胸を押さえながら呼吸を整えようとする。やがて、痛みが引いてきたのか、立ち上がった。

「慶斗さん。本当はちゃんともう一度、お礼が言いたかったな。でも、ごめんね。コレでさよなら。もう会えないと思う。こんな私を信じてくれてありがとう。そして、裏切つてごめんなさい。」

ペンを手にとる。紙に端正な文字で言葉を綴り始めた。それも終わったのか、自分の荷物をまとめ始める。元々持ち物が多くなく、10分程で終わってしまった。最後に、生徒手帳を手にとる。本来漆黒の輝きを放っていた彼女の魔石は、今では見る影も無くなっていた。鈍い黒と化した魔石は、太陽光を反射して緑色に見えなくも無い。可憐はそれをポケットに押し込んだ。トランクを引き摺り、部屋を後にするのだった。

夏休みが始まる直前の事だった。朝の理事長室に三人の人影。この部屋の主、理事長と朱雀兄弟の二人だ。理事長のデスクには、一枚の紙と魔石の嵌っていない生徒手帳が置かれている。紙の方は可憐の直筆で書かれた退学届けだった。まるで機械が書いた様な文字で書かれている。

「朝起きたらこの紙があつたと。」

「はい。可憐も既にいませんでした。申し訳ありません。僕が可憐の監視をするように言われていたのに……」

「いや、特に問題は無い。注意人物が学園からいなくなった。少なくとも学園は安全になったと言う事だ。」

理事長の言葉に、慶斗は顔を曇らせる。なぜなら、学園長自身も可憐を疑っていると宣言した様な物なのだから。そんな慶斗を見てか、龍夜が彼の肩に手を置いて話しかける。

「悪いな、慶斗。だが、泉が疑われている今、彼女から学園を去る事は、自分の正体が中国系征儀伝だと言っている様な物だ。疑うのはもつともだ。……そうだ理事長。泉がいなくなったので、また慶斗と一緒に部屋に戻してくれませんか？」

「そうだな、慶斗君。今日から龍夜君と同じ部屋に戻りなさい。」

「はい。分かりました。ではこれで失礼します。……理事長先生、可憐の残していった生徒手帳、しばらく預かっててもいいでしょうか？」

少しの間悩んだ理事長だが、無言で頷いた。それを手に取り、大事そうに制服の裏ポケットに入れる。慶斗が理事長室を後にしようとする、龍夜も後に続こうとするが……

「龍夜君、ちよつと残ってくれたまえ。」

理事長に呼び止められるのだった。

「なんでしょう、理事長。」

完全に慶斗が出て行った後、理事長はため息をついて話し始めた。
「朝一番に電話があつたんだよ…。君が泉可憐と同じように疑っていた、例の保険医だが、今日を以ってこの学園を辞めたよ。行き先は言っていない。」

龍夜の顔が険しくなる。疑っていた人物が揃って二人も学園を去っていったのだ。

「何か大きな事が起こる前兆…？」

「その可能性が高いと私は思っている。特にSクラスには警戒して欲しい。」

「はい。分かりました。」

「話はコレだけだ。」

龍夜も理事長室を離れていくのだった。

担任教師から改めて可憐の退学が伝えられる。啞然とする翔太と風沙。風沙は寂しそうな顔をしていた。

「折角新しいチャイナ服を作ったのに…」

素直に別れを惜しんでいると言う訳では無さそうだったが…。かなりの確率で慶斗が犠牲になるだろう。

「さて、夏休みが直ぐそこまで迫っているわけだが…」

可憐の退学を特に何とも思っていない教師を見て、再び慶斗は幻滅してしまうのだった。ふと誰もいなくなった隣の席を見るが、そこには無表情ないつもの顔、ましてや笑顔の顔は無かったのだった。

「さて、手駒は揃った。」

とある一室で、十数人の部下の前に座る男が話を切り出す。彼の右手首には金属製の腕輪があり、それには緑色の魔石が埋め込まれていた。また、その彼の部下にも体のどこかいずれかに、同様の腕輪などが取り付けられていた。

「決起はいつでしょう？」

「この夏に神谷に布告をする。世界終焉へのカウントダウンが始まったとな。」

士気をあげる中国系征儀伝達。その中に、少女の姿もあった。黒いローブのせいで分からないが、無表情のように見える。中国系征儀伝が動き出すまで、一ヶ月と少しの期間しか残されていなかった…。

失踪 パペル（後書き）

さてさて。薬を飲んでいた少女は泉可憐でした。まだまだ伏線はあ
るので、色々予想してみてください。

帰郷 メサ（前書き）

夏休み編にはいります。

帰郷 メサ

南陽学園に夏休みが訪れた。全寮制のその学園は夏休みを利用して全学生が帰省する。朱雀兄弟たちもその例に漏れなかった。今日は列車を使ってホームタウンまで戻る予定だ。翔太も同じ都市の出身のため、同じ列車に乗り合わせているのだった。

「数ヶ月ぶりの我が家だな…。」

「そうだな。俺は春休みは戻らなかったから半年以上になる。」

楽しそうに会話をする翔太と龍夜だが、慶斗は浮かない顔をしていた。やはり未だ可憐の事を引き摺っているのかもしれない。

「慶斗、気持ちは分かるが、もう少し楽しそうにしろって。留美の奴がマジで心配するぞ？」

「え？ああ、留美^{るみ}に会うのも久しぶりですね。」

そこで慶斗の表情も少し柔らかくなったように見える。本名、倉^{くら}本留美^{らもとるみ}。慶斗と龍夜の幼馴染である。一年下のため、妹の様な感覚で付き合ってきた。慶斗を介して翔太とも知り合いである。彼女は小さい頃から二人、特に彼女には甘く、いつも優しくった慶斗にはとても懐いていた。翔太が留美の事を少し気に掛けているのは、こだけの話である。

「ま、アイツも南陽入りた如果说っててるわけだし。この夏は留美の特訓でもしてやるか。」

「是非俺も仲間に入れてください。」

そんなこんなで、彼らの旅路は終着を迎え様としているのであった。

列車がホームに着く、荷物と一緒に降車する三人。駅からどうやって帰ろうかと考えていた時だった。

「慶斗お兄様っ！」

慶斗が誰かに抱き疲れる。しかもライフル銃の弾丸の如く飛んで

来た彼女は、慶斗を跳ね飛ばしてしまった。啞然とする他の客。いつもの事だからと苦笑する龍夜。少し羨ましそうな顔の翔太。

「慶斗お兄様、お久しぶりです!」

ホームの床で伸びる慶斗の腹の上でピコピコと跳ねる、シャギー掛かったショートヘアの少女。何を隠そう、彼女が倉本留美本人である。

「留美、お久しぶりです。イテテ…、元気になりましたか?」

「うん! 勿論よ。龍夜お兄様も翔太さんも、お元気で何より。爺と一緒に来てるから、家まで送るね。」

後ろから執事服を着た初老の男性が近付いてくる。

「お嬢様がご迷惑をお掛けしてすいません。ですが、お嬢様は一ヶ月前からこの日を楽しみにしてた故、お許し願います。」

丁寧な挨拶をしてきた男性。彼こそが、留美専属の世話係であり、爺と呼ばれている人間だ。実を言えば、留美の家はかなり裕福である。

「爺やさんもお久しぶりです。」

「車の準備が出来ております。どうぞ此方へ。」

その後、爺の運転する車で家に送り届けてもらう三人。その間留美は慶斗にベツタリとくっ付いていた。龍夜の話通り、かなり懐いているようだ。少々お疲れ気味の慶斗だが、嫌な顔一つしないという。やがて、翔太が降り、慶斗たちも自分の家へとついた。

「慶斗お兄様、留美のお家の部屋が空いてるから、泊まってつてよ。」

「ゴメンね、留美。家族にもちゃんと挨拶をしないといけませんから。明日にでも遊びに行きます。」

「そうですよ、お嬢様。慶斗様の言う通りです。それに、夏休みはまだたっぷりとあります。」

たしなめる爺。留美も不服そうながら、“はい”と返事を返した。

車から降り、我が家へと入っていく二人。チャイムを押すと、女性の声が聞こえた。

「どなた？」

「龍夜だけど、帰ってきたよ。勿論慶斗も一緒。」

直ぐにドアが内側から開けられた。開けたのは彼らの母親だった。

「お帰り、二人とも。」

「ただいま。」

「ただいま帰りました。お母さん。」

自分たちの部屋に荷物を置くと、両親の待つリビングへと向った。今日は息子が二人とも帰ってくるのもあって、両親共に家にいる。リビングでは父親がコーヒーを啜っていた。

「父さん、ただいま。」

「おお。龍夜か、お帰り。慶斗も元気にやってたか？」

「はい。」

慶斗たちも飲み物を受け取りながら、これまでの学園生活のことを話し始める。慶斗が一瞬ながらも魔獣合成ユニルスを成功させた事、それのお陰でSクラス配属が決まった事。中国系征儀伝の出現、それに對抗する為に龍夜が筆頭となって警護部が作られたこと。話すネタは尽きる事がなかった。

「私たちも色々ニュースで聞いている。龍夜は色々呪文を作ったそうだな。それで中国系征儀伝を返り討ちにしたんだって？慶斗も、友達と一緒にはいえ未知の相手と互角で戦うなんて、すごいじゃないか。我が息子ながら誇りに思うぞ。」

両親が二人を褒めちぎる。学園から離れたこの街でも、メディアを通じて特に龍夜の事は広まっていた。そんな兄弟の親ともなれば、鼻高々になるのは当然だろう。

「僕は何もしてません。兄がいつも助けてくれるんです。あの時だって、可憐がいなかったら僕や風沙は…」

ここに来て可憐のことを思い出してしまう慶斗。龍夜は事情を知っているの、少し表情を暗くするのだが…

「おやおや、女の子二人の名前が出てきたぞ、母さん。留美ちゃんがいるのに慶斗もやるようになったなあ。龍夜も学園長のお孫さんと仲良くやっってるみたいだし、私たちに孫ができるのも時間の問題だな。」

「もうお父さんったら気が早いんだから。」

慌てて訂正する慶斗。特に風沙にはおもちや扱いされている始末なのだ。

「さてさて、慶斗たちで遊ぶのも飽きてきたし、飯にするか。久しぶりの母さんの手作り料理だ。たくさん食えよ。」

こうして、慶斗たちの帰省一日目は過ぎて行ったのだった。

帰郷

メサ（後書き）

義妹の成長（前書き）

サブタイトルの付け方変えました。

義妹の成長

夏休みの二日目。昨日は夜中まで学園生活のことを語っていた為、その日は昼間の起床となった。父親は既に仕事に向っており、家にはいなかった。二人も適当に昼食を食べ、出かける準備を始める。宿題の心配もあるが、今朝から留美が何本も電話をかけていたのだった。

「じゃ、母さんいつて来る。」

「いつて参ります。」

徒歩でそれほど遠くない留美の家まで歩く。翔太にも連絡は入れたので、喜んで飛んでくるだろう。遠目でも分かる大きな屋敷の門の前に立った。チャイムを押せば1コンマ置いて留美が出てくる。直ぐに門が開き、広い応接間に案内された。

「お兄様方いらっしやい。さっそく遊びましょう。」

「留美は何がしたいんですか？」

「お兄様達がない間に、留美も征儀伝の技を磨いたんだ。今日はその成果を見て欲しいの。龍夜お兄様、お願いできる？」

もちろんの事了承した二人。広い庭に出る。周りが木々や植物などの庭園であるのに対し、ここはコンクリートの地面でだ。どうやら、留美の為に作ったフィールドのようである。

「さあ、留美。練習の成果を見せてみる。」

「はい！」

【【エクスジェンシア】】

龍夜の黒い魔石に反応して召喚されるドラゴン、留美の白い魔石に反応して現れた天使。

「兄い、留美が相手なんですから。手加減はしてください。」

「分かってるって。」

【主の命令よ。対象を光の刃で切り裂け。コルト・デ・ブライヤー】

驚くべきことだが、留美は慶斗と同じく光属性の征儀伝だ。その希少さもあるが、慶斗と同じ様に朱雀龍夜から指導を受けていると知って、南陽学園は彼女にスカウトをしている。元々、慶斗たちがいるからと進学先は慶斗の入学時から南陽高校だった為、すんなりと受け入れた。今は私立の女子中学校で教育を受けている。

【エスクード・デ・オスクリード】

闇の盾が、光の刃を全て飲み込んでしまう。闇と言う属性のため、本来なら跳ね返せる攻撃でも飲み込んでしまう癖があったのだ。

「ああー！第三文詠唱で受け止められちゃった！」

威力の落ちる短縮呪文で攻撃を受け止められた事がショックだったのか、留美が声を上げる。

「けどな留美、前に会った時よりずっと進歩しているじゃないか。去年の冬なんて、まともに攻撃が前に進まなかっただろ？」

「それは言わない約束です！」

お互いフィールドの端っこ同士で叫びながらも、龍夜は留美の確実な進歩を感じていた。魔力の練り加減なども、独学にしては充分過ぎるほど上達している。もしかしたら当時の慶斗より上手かもしれないのだ。彼女の魔力量はほぼ人並み。常人に毛が生えた位であろうか。だが、彼女は自分の魔力量をしっかりと見極めている。その為、魔力の質にも向上が見られているのだ。同じ年だった頃の慶斗は、自分の魔力量の多さに戸惑ってしまい、時々暴発させることもあった。最近は学園で学ぶ事で、魔力の練り加減も質も良くなっている。このまま進めば龍夜より優れた征儀伝となるだろう、と龍夜は予測している。

【主の命令よ。光の弾丸で対象を貫け。バレ・デ・ブライヤー！】

光弾が放たれ、ドラゴンに向って進む。切断^{コルト}と並び、弾丸^{バレット}の攻撃も征儀伝の常識中の技。無論の事、慶斗や龍夜も多用・愛用する技だ。まあ、その為防ぐのも簡単なのだが…。

【主の命令により、闇の罫を仕掛ける。トラーマ・デ・オスクリード！】

闇の壁が現れ、留美の魔獣の光弾を飲み込もうとする。この技は、ただ攻撃を飲み込む盾ではなく、吸収した攻撃を任意の場所から開放する事ができる。すなわち、相手の攻撃をそのまま自分の攻撃に転用できる利点がある。

「龍夜お兄様、私の成長はそんな物ではないですよ？」

闇の壁に吸い込まれる直前、光弾が向きを変えた。即ち、龍夜のトラップを避けたのだ。予想外の出来事の為、対応できそうにないと言うよりは、彼が彼女を侮り過ぎていた。こんな緻密な攻撃を出せるはずが無いと勘ぐっていたのだ。しかし、その予想ははずれ、両側から迫り来る光弾をまともに受けてしまう。

「お兄様方が南陽学園に行った後、私は精神的に強くなるように訓練しました。質では超えられない龍夜お兄様、魔力量では一生追いつける事ができない慶斗お兄様。それなら私だったら何で勝れるか……」

「その答えがこれか……。すごいぞ、留美！」

「まだまだ魔力の練り加減が甘いです。その証拠に、龍夜お兄様はあまりダメージを負っていないじゃないですか。」

“これからまだまだ伸びる”と褒め、龍夜が次の呪文を唱える。

「留美、防御してみろ。」

【主の命令により、全てを飲み込む闇を見せろ。ファイナレ・デ・オスクリード】

【主が命令します。光の盾で守れ。エスクード・デ・ブライヤー！】
光の盾と、闇の攻撃がぶつかり合う。

「強い……。流石は龍夜お兄様、真正面からぶつかったら、ひとまわりありません……」

そのまま光の盾は破壊されたのだった……。余程疲れたのか、勝敗がついたすぐ後にペタリと座り込む留美。慶斗がフィールドに出てきて手を貸す。

「すごいです留美！あんな技、学園でも見た事ありません。」

「ありがとっ、慶斗お兄様。これからも鍛錬を頑張るね！だから今

日は褒美として、甘えさせて。」

ベツタリと慶斗に抱き寄る留美。慶斗もよしよしとばかりに甘えさせている。彼にとつても留美は可愛い妹分なのだ。龍夜も苦笑しながらそんな二人を見ている。きつと、“精神鍛錬を積んでいるのに、なんで慶斗離れしないんだろうなあ…”と思っっているのだろう。

「お嬢様、お客様がお見えになりました。青龍翔太様です。」

「ここまで通して、爺。」

どうやら翔太も来たようだ。留美は今だ慶斗にベツタリとくっついている。龍夜も慶斗も、翔太の気持ちには気付いていないのだが…。

「やあ、留美ちゃん。昨日ぶり…」

そこで、留美が慶斗にくっ付いているのを発見してしまう。幼馴染と言っ関係であり、慶斗が底無しに優しい事も理解している彼だが、今回ばかりは嫉妬心を隠せないようだ。それでも何とか冷静を装う。

「今日も仲良いね。二人とも。」

「留美は妹みたいなものですから、しょうがないんです。」

どうやら留美に対しては恋愛感情を抱いていない事を知って、少し安心した翔太。

「誰か模擬戦やった？良かったら留美ちゃんどう？」

「ごめんなさい、もう龍夜お兄様と一戦交えたんだ。ちょっと今はお疲れなので、また今度誘ってね。」

「慶斗、お前が相手したらどうだ？お前らいつも味方同士だろ？」

確かに龍夜の言う通りである。クラス決定試験に置いて二人はチームであつたし、クラスアップ試験でも同じSクラスの為、直接的な戦闘は無かつた。

「そうだな、慶斗、一戦やるか？」

「受けてたちますよ、翔太。」

「慶斗お兄様、頑張ってください！」

この言葉でまた少し翔太の気分が沈んだのだった。

義妹の成長（後書き）

文中では、慶斗のエンジェルドラゴンを“エンジェル”と表記しています。留美の場合、本来に天使の姿をした魔獣なので、“天使”と文中では表記して区別します。

突然のアルマライズ

【「エクスジェンシア！」】

慶斗のエンジェルドラゴンと、翔太の蝙蝠が出現する。先手を打ったのは翔太だった。

【主の命令だ。対象をふっ飛ばす竜巻を作れ、トルナ・デ・トルメンター！】

二本の竜巻が発生し、慶斗の方へと向う。

【エスクード・デ・ブライヤー】

光の盾で防いだ慶斗。元々防御に秀でている慶斗のため、通常の呪文なら跳ね返せる力を持っていた。

【主の命令だ。疾風の刃で切り裂け。コルト・デ・トルメンター！】再び翔太の攻撃。慶斗は先程の盾で防御に徹している。何故か学園に入学前の戦闘スタイルに戻っているのだ。しかも防御は全て第三文詠唱であり、度重なる翔太の攻撃によって疲労している。

「龍夜お兄様。慶斗お兄様はどうしたの？ 全く攻撃してないけど……」
「どうしたんだろうな……。最近では攻撃呪文もちやんと使う様になったと思ってたんだが。……もしかしたら。」

龍夜が何かに気が付く。その上、なにやらニヤツと笑っていた。それを不審に思ったのか、留美が龍夜に尋ねかける。

「簡単な事さ。慶斗はわざと負けようとしてるんだ。」

「ええ！ どうして！？」

「何故だろうねえ？」

わざとはぐらかす龍夜。しかし、彼は全てお見通しだった。“翔太は留美に好意を持っている”と。だが、無闇に彼女にばらしまうのも翔太に悪いと思つての“惚け”だったのだ。龍夜の推論どおり、先程慶斗と翔太の間ではこんな会話があった。

“慶斗、この模擬戦負けてくれないか？”

“どうしてですか？”

“何でもなんだ。頼む！もしこの条件飲んでくれるなら、夏休み明けに椎名にお前の女装を止めさせる様に言うからさ。”

“本当ですか！？分かりました。負ければいいんですね？”

そんな理由で、慶斗は防御に徹すると言う戦法をとっているのだった。

【アルマライズ！】

翔太が装甲征儀を使用する。高等呪文を使える事を見せて、自分の評価を上げるつもりらしい。先程の戦闘では龍夜がそれを使っていないので、初めて見るその呪文に驚いた留美。翔太の計画はうまくいったと言うことだろう。慶斗もやっと攻撃呪文を放った。しかし、第三文詠唱の上、意図的に的を外している。翔太はその攻撃を避けながら慶斗に接近した。一発だけ直線ルートで来たのだが、それは十文字槍で弾き返す。後五歩で慶斗の首筋に槍の刃が当てられる時…

「慶斗お兄様！負けたら承知しません。負けたら、慶斗お兄様が嫌がっていた“アレ”をするからね」

その早口言葉が引き金となったらしい。

【アルマライズ・セグ！】

慶斗の両手に白い刀と短刀を構えた慶斗。クロスさせて攻撃を防いだ。

「慶斗、お前何を？」

「すいません。でもこの模擬戦、僕が勝たないと駄目なんです。行きます！」

慶斗の眼が一瞬だけ赤く光った。刀が発光し、翔太の槍を切ってしまう。それだけではなく、翔太は見えない力で押された様に吹き飛ばされたのだ。啞然とする翔太。今のは完全に物理的な攻撃ではない。魔法攻撃その物に感じた。これではまるで泉と同じ。慶斗も中国系征儀伝ではないか、と言う嫌な予感が翔太の頭を過った。チ

ラツと龍夜を見やるのだが、彼は何か知っているらしい。特に驚いていなかった。

【エクスジェンシア！】

しかし、余所見をしている場合ではなかった。刀を捨てた慶斗が魔獣を召還したのだ。既に赤く光る瞳は元の色に戻っており、魔力大量開放は終わっている事が伺える。エンジェルが翔太の前にそびえ上がるように召喚された。

【エクスジェンシア！】

翔太も魔獣を召喚し、背中に乗って飛び上がった。慶斗が本気となった今、攻撃範囲の広い上級征儀を大量使用する彼と同じフィールドにいるのは危ない。自分に少しは分がある空中へと場所を変えた。

だが、翔太は一つ忘れていた事がある。慶斗が今まで見せなかっただけの能力が。

「げっ、慶斗のドラゴンも飛べるのかよ！？」

翼が付いているのだから、それ位は予測できたはずなのだが…。

まあ、空中での方向転換などでは翔太の方が勝っている。まだ勝機が無くなったと言う訳ではない。

【主の命令です。全てを無形と化す革新の光を見せよ。エクスプロ・デ・ブライヤー】

翔太の予測通り、最初から上級征儀を撃ち放ってくるエンジェル。地上へ広範囲に渡って光の筋を落とす。翔太も魔獣に跨りながら光の筋を潜り抜けた。一、二発が当たってしまったが、大量に浴びてこそ意味のある攻撃の為、決め手とはならない。

【主の命令だ。疾風の翼で破壊の音を奏でろ。アジッタ・デ・トル…】

【トラーマ・デ・ブライヤー！】

翔太の攻撃は強烈な光によって遮られた。光の正体は慶斗の魔獣、エンジェルから発せられたもの。“光の罠”とも言うべきだろうか、強烈な光が翔太の視力を奪う。バランスを崩して墜落しそうに

なるが、何とか踏みとどまった。

「どこだ!？」

視力が回復する頃には、慶斗と魔獣の姿が見えなくなっていた。

「ここだよ。」

突然、翔太の右手側の空間が歪み、その中から魔獣が出てきた。

その背中には慶斗の姿が。そう、罾が作用している間に光学迷彩で己の姿を消したのだった。

【ライオ・デ・ブライヤー!】

光線が飛んで来る。急いで疾風の盾を張るのだが、あつという間にヒビが入り、そして砕けた。勢いが留まることを知らない光線は翔太の魔獣に炸裂する。序盤から攻撃を繰り返している為、翔太は弱い立場にある。いとも簡単に魔獣は消滅してしまった。重力に任せて落ちていく翔太。本来なら、風属性として風を操り地面に衝撃無しで着地できるのだが、今の彼はうまく魔力が練ることができないらしい。慶斗が駆けつけようとエンジェルを動かすが、機動力に劣る為、間に合わない。

【アルマ、…ライズ?】

突然龍夜の隣で呪文詠唱が聞こえた。驚いて隣を見るのだが、旋風が龍夜を殴っただけで、誰も見えなかった。

「間に合ってよかったあ。」

気が付けば、フィールドの真ん中で落下していたはずの翔太の襟首を捕まえて、空中に浮遊する留美の姿が。彼女の背中には巨大な純白の羽が生えている。まるで、彼女の使役する天使の羽の样だった。

「嘘だろ…?」

顔に手を当てて、呆れ返った様に呟く龍夜だった。

魔力発散

完全に気絶している翔太を寝かせながら、龍夜は先程の事を思い出していた。呪文さえ知らない筈の留美が、一発で装甲征儀アルマライズを使用したのだ。彼女の魔獣、天使の羽がそのまま装着された留美は、音速越えではないかと言うスピードで翔太を救出した。そんな前代未聞な事を行った彼女は、慶斗に寄りかかって休んでいる。どうやら魔力を使い過ぎているようだ。

「留美、さっきは翔太を助けてくれてありがとう。」

「慶斗お兄様に褒められて嬉しいよ。」

龍夜がそんな二人の所へ近寄ってきた。

「留美、どうやって装甲征儀アルマライズを使った？ 疲れてる所悪いが、コレだけは教えてくれ。」

やはり呪文を開発した本人として気になるのだろう。留美は口を開いて喋り出した。

「あの時、翔太さんが見た事のない呪文を使ってたから、興味が湧いたんだ。“魔獣を犠牲にして武器を得る”って事は、その時感覚的に分かったんだ。それで、何となくだけど、翔太さんが落ちた時に“私がさっきの呪文を使えば翔太さんを救える”って思ったんだ……」

この時、改めて留美の洞察力の高さと、初めての征儀の技を使いこなすと言うセンスの高さに感服する二人だった。その言葉を契機に、留美は眠り込んでしまう。魔力消費は、基本的に自分の休養によつて回復させるしか方法がない。眠ってしまったのも、征儀伝としての自己防衛本能からだろうか？

「慶斗、留美を休ませてやれ。今日は帰ろう。俺は青龍を起こしておくから。」

「はい。」

その後、爺に留美を任せ、翔太を叩き起こす。危うく彼を死なせてしまう所であった事を詫びる慶斗。だが、翔太自身は特に何とも思っていないようで、逆にピンチを留美に助けられて面目丸潰れだった。

「そうだ、青龍にお前のあの技について教えたか？」

帰り道。翔太と別れた後で、龍夜が思いついた様に言う。 “あの技”と言われ、少し思案していた慶斗。やがて、それがアルマライズの上で翔太を吹き飛ばした魔法攻撃だと理解したようだ。

「あつ、まだ彼には言つてませんでした。もしかしたら翔太は、僕が中国系征儀伝だと思つたかもしれませんが…。」

「俺の推論だが、無属性呪文ノー・ティボを参考にしたんだよな？」

龍夜が確認を求める様に聞いてくる。慶斗もうなずいた。そう、先程のあの技は光属性の攻撃ではない。以前、龍夜のクラスメイトである中里類が使つた“モルデイス”と同じく、属性を利用した攻撃ではないのだ。ヒントは慶斗の瞳が赤く染まつた事にある。

翔太を吹き飛ばしたあの衝撃、あれは純粋な魔力を発散し、得られたエネルギーをぶつけただけの物。人を吹き飛ばす為に、慶斗は一瞬だけ魔力を大量に開放したのだ。彼だからこそできる豪快な技である。

「純粋な魔力の開放。コレは中国系征儀伝との戦いに使えるかもしれないな。例えば、魔力を弾丸の形に…。いや、既に属性攻撃の領域に入っているから無理か…。」

早速悩み始めた龍夜。そんな兄を見て慶斗は苦笑い気味だ。やはり変わらない、そしてこれからも兄は変わらずに居てくれるだろうと。

「そう言えば兄い。」

「どうした？」

「魔獣合成なのですが、改良は進みましたか？良ければ僕がお手伝いします。兄いと僕は征儀の系統が違いますから、夏休み中に練習

できますよ？」

慶斗のクラス決定試験に置いて初披露された呪文、魔獣合成^{ユニルス}。多大な魔力消費が問題となり、今の今まで使う事はなかった。呪文の改良も、中国系征儀伝の出現の為に、龍夜が装甲征儀^{アルマライズ}を優先させたので、進んでいない。アルマライズの魔力消費の問題だが、魔力密度を上げて消失を防ぐ事で魔力消費を抑えている。つまり、長時間魔力を注ぐのではなく、短い時間でそれなりの量の魔力を練り固める。それは壊れにくくなって武器として練成されるのだった。“魔力の練り加減”が重視されるのも、この為である。

「やっぱり、合成に使用する魔力密度を上げるのですか？」

「いや、武器と魔獣の大きさは桁外れに違う。それでは消費量の問題は解決しないんだ。だが、ある程度の見当ならついている。考えてみれば、簡単な話だったよ。」

「ええ！？合成魔獣^{ユニルス}が使えるんですか？流石は兄いです！」

キャツキャとしてはしゃぐ慶斗。まだまだ彼も子供だった。

「もう少し熟考する必要があるけどな。夏休み中に終わらせるつもりだ。それが終わったら、二人で使ってみよう。」

「はいです！」

二人が家につく頃、留美の住む倉本家の屋敷に一通の手紙が届いた。届けたのは飛行タイプの魔獣に乗った征儀伝。この様に、現代社会には征儀伝の力が活用されている仕事もあるのだ。爺がその手紙を開けて読む。留美の父親宛の手紙は、爺が一度目を通すことが義務付けられている。場合によっては小型の爆弾さえ仕込まれている可能性がある為だ。今回の手紙は特に不審な点は無く、丁寧に折られた手紙を開いた爺。いつもならサツと目を通して、不要なダイレクトメールならゴミ箱へ直行させている。しかし、爺の表情が明らかに変わった。わなわなと体を震わせ、直ぐに主の元へと電話を掛ける。

「どうした？」

「倉本様！大変でございます。留美お嬢様の誘拐予告が！」

誘拐予告

留美の誘拐予告状が届いた翌日、龍夜と慶斗は倉本家の屋敷へ再び赴いていた。呼んだのは留美の父親。一室で爺も含めた四人が話し合っている。

「犯行予告はいつですか？」

「9月1日、午前10時だそうだ。」

予告状には、“倉本留美を9月1日午前10時に誘拐する。警察でも何でも呼ぶといい。だが、此方は征儀伝だ。決して安心できないことをご忠告しよう。”書かれている。今日はまだ8月上旬。予告日まで一ヶ月近くはあるのだ。しかも、犯人は自分を征儀伝だと明かしている。その上、自ら警察を呼ぶことを推奨している。

「留美には話したんですか？」

「いや、無駄な心配をさせる訳にはいかないからな。秘密にしようと思う。」

その答えにホツと安堵する慶斗。彼としても、妹分の留美には負担を掛けたくないのだ。今頃彼女は自分の部屋で勉強でもしているのだろう。

「もしかしたら気付いていると思うが、私が君達を呼んだのは他でもない。幼馴染として、留美は君達兄弟に信頼を置いている。二人で留美を近い所で護衛して欲しい。頼む。コレばかりは二人にしか頼めない。」

無論、二人に断る理由はない。幼馴染の危険を分かっているながら見過ごす訳にはいかない。そして、二人は征儀専門の学園で学ぶ学生。神童兄弟とも呼ばれる二人は、護衛にするには十分な能力を持っている。

「あ、でもその日って、僕達の学園が始まる日ですよ？」

慶斗言う事は確かだ。いくら二人でも学生と言う身分がある以上、学園に戻る必要がある。だが、そこは龍夜の“学園長に掛け合う”

と言った意見で解決される事となった。

「ですが、警察の協力も必ず仰いでください。出来るだけの防衛線を張るんです。」

「勿論だ。既に警察には事情を説明してある。」

本来なら、征儀伝を相手にする場合、征儀伝の味方を付けるべきなのだろう。だが、法律上、征儀伝同士がその様な組織を作る事は禁止されている。よって、世間に公にならない程度で、一般市民から征儀伝の有志を募るそうだ。

しかし、相手が本当に征儀伝なのであるのか？もしかしたら、征儀伝の名を語る一般の人間が正体だとも考えられる。そして、犯人の目的が最大の謎だ。留美の父親に個人的な恨みを持つ者かも知れない。ただ目立ちたいと言う迷惑な理由かも知れない。だが、決定的なものは見つからないのであった。

「今日はこれでお開きにするでしょう。君達の都合さえつけば、こんな家でよければ、毎日でも遊びに来てくれ。留美が大歓迎するよ。では、私は仕事に戻る。車を準備をしてくれ。」

「はっ、かしこまりました。」

相談事が終わり、二人は並んで廊下を歩く。

「慶斗、後はお前の自由だ。俺は家に帰ろうと思う。」

「僕は折角なので、留美に顔を出して行こうと思います。…兄い、留美を狙ってる征儀伝ですが…。」

「俺も言おうと思っていた。中国系征儀伝の可能性が否めない事はない。」

「ええ。どちらにしる理由は分かりませんが、もし本当に中国系征儀伝が留美を狙ってるなら、もっと警戒しなくちゃいけませんね。」

やがて、二人はそれぞれ玄関ホールや、留美の部屋へと慣れた足取りで向い始める。

「留美は、僕が絶対に守って見せます。」

留美の部屋の前で平静を装い、ドアをノックする。

「留美、僕です。慶斗です。入ってもいいですか？」

すると、一瞬にしてドアが開かれて、留美が抱きついて来た。

「慶斗お兄様、遅いよ。今日も遊びに来てくれてる、って爺から聞いててウズウズしてたんだから。」

「ごめんなさい。ちょっとだけお話をしまして。何かして遊びますか？」

「うん。立ち話も難だから、部屋に入っただいいよ。」

招き入れられた慶斗。白を基調とした壁紙の部屋は、まるで留美自身の魔獣をイメージしたかのようだった。椅子を勧められ、留美はベッドに腰掛ける。

「今誰かにお菓子とお茶を頼みますね。」

「いいえ、大丈夫です。直ぐに今日は帰りますから。」

すると、留美は悲しそうな目をして慶斗を見始める。小さい頃はこの眼を見て何でも言う事を聞いてしまう慶斗だったが、今では慣れてしまったせいか、幼少期ほど効果はない。だが、根は留美に対して甘い慶斗。

「な、泣かないでください。留美……」

「じゃあ、今日は泊まってくれる？ねえ、夏休み中ずっとこの家にいようよ。」

留美の父親からも歓迎はされているので、泊まろうと思えば泊まれるのだが、慶斗本人が兄いを慕って止まない為、それは難しい決断だった。

「保留にさせてください。」

ムスウツと頬を膨らませる留美。視線を外した慶斗。ふと見た彼女の机には紙が何枚も散乱している。宿題をやっているようでは無いみたいだ。気になって机に近寄る。

「あ、その紙……」

「ごめんなさい。見ちゃいけませんでした？」

「違うよ。いずれ龍夜お兄様にも見てもらうつもりだったから、予

め慶斗お兄様にも是非見て欲しいな。」

手に取って、紙に書かれた内容を見る。並ぶアルファベットと記号。魔方陣の文様。

「これって…、呪文を構成してるんですか？」

「うん、恥ずかしいけどね…。留美もお兄様方みたいにオリジナルのを作ってみたの。自分の特性を活かせる様に。」

留美の特性と言えば、多大なる集中力を用い、放った呪文の攻撃をコントロールする事にある。昨日の様に、本来直進するはずの攻撃の軌道を曲げる事までできるのだ。

「普通の攻撃を発展させて、留美に使いやすい工夫を加えてみたの。」

確かに、龍夜ほどの知識は無いが、慶斗の知識を以って見てもそれは分かる。

「実際に練習はしたんですか？」

「秘密で何回か。でも、まだ呪文に改良が必要みたいなの。」

「僕でよかったら手伝いますよ。兄いほどじゃありませんが、僕も呪文の開発はしていますから。」

そういうと、留美は目を輝かせて慶斗に抱きついて来た。

「ありがとう、慶斗お兄様。さあ、早速練習しましょう！」

「え、今からですか！？」

彼女との再会

夏休みも中盤に差し掛かる頃。Sクラスである龍夜や慶斗は、もう少して学園に戻る事を考えなくてはならない時期になっていた。そんなある日の事である。

ここは慶斗の部屋。限りなく絞られた音が鳴る。ドアが開いたようだ。無駄なく開けられた隙間から入ってきた影。再び極力抑えられた音が鳴り、ドアが閉められた。影はだんだん慶斗に忍び寄る。静かに寝息を立てて寝ている慶斗。彼は気付きそうにない。ベッドに乗り、慶斗に跨る。そして首元に手を伸ばす…。

「やっぱり可愛いー！」

グフェッとあり得ない声を上げる慶斗。涙目になりながら自分のお腹の上でジャンプする存在を見極めようとした。

「凧沙!？」

影の正体は凧沙であった。驚く間も無く、摺りつかれる。

「夢がないから、ずっと寂しかったんだよ。」

「ちよっと、凧沙。離してください!息が詰まります。それより、どうやって入ってきたんですか?」

「玄関から入って来たんだよ。」

漫才の様な一連の事が起きた後、無理矢理凧沙を部屋から追い出した慶斗。朝食を取ろうとリビングへ向ったのだが…。

「兄い、これはどう言う事ですか?」

「俺も分からない。」

そう返す龍夜の膝上には、玲奈がさも当然の様に座っている。慶

斗の両親もニヤニヤしながら自分の席に座っている。そして、風沙はと言うと…。

「慶斗っち。朝ご飯が冷めちゃうよ？」

慶斗の席に座って、慶斗の分の朝食を食べていた。因みにカレーである。目の前の光景がシュール過ぎる為、啞然として硬直している慶斗。色々突っ込む所はあるのだが…

「朝からカレーは重いです。」

全員が“突っ込みそっち！？”と言ったのであった。

さてさて、気を取り直して慶斗が風沙に質問を始める。

「なんで来たんですか？しかもこんな早くに。」

「会いたかったからだよ。」

「では、既に僕とは会ったので、帰ってください。また学園でお会いしましょう。」

「それは無いよお。折角慶斗っちのパパママにお泊りの許可貰ったんだから。」

思わずスプーンを取り落としてしまった慶斗。カクカクしながら両親を見つめる。

「留美ちゃんを怒らせない程度にな。」

斜め上44度位を行く返答に、慶斗は言葉に詰まってしまったのだった。

「慶斗っち、次はこれこれ！」

「もう、止めてください…」

“買い物に行こう！”と言われ、引きずられる様にしてやって来たコスプレショッパ。当てては置いて、当てては置いての繰り返しで、服の山を大量に作っていた。最早店員の迷惑など考えていない「うーん。やっぱりミニスカートは外せないよね。フリルも付いていた方が良さし、猫耳とかも基本装備だね。」

真剣な面差しで何か呟いている風沙だが、慶斗にとっては有害極まりないことは必須だ。やがて、気に入った服が無かった為か、服の山を放置して店を出てしまった。

「さて、夏休み明けからの課題もできた事だし。頑張らなくちゃ。」

「そうだ、慶斗っち。何か奢るよ。アイスでいいかな？」

“そんな、僕が奢りますから。”と言う慶斗を制して、適当な店でアイスを購入。歩きながら食べていた。今日のこんな不幸な出来事を悲しむ慶斗だが、その原点を鑑みた時、ふと可憐の顔が思い出された。今朝、彼女はこう言った筈だ。“可憐がいなくなって寂しかった”と…。

「ねえ、風沙。風沙は可憐がいなくなって寂しい？」

「え？うん。そうだね。おもちゃが一つ減っちゃったし。」

「真面目に答えてください。君は可憐の友達のはずです。何とも思わないんですか？」

その言葉に黙り込んでしまう風沙。慶斗は願っていた。自分以外にも可憐の突然の失踪を嘆き、彼女の無実を信じている人間がいる事を。だが、再び喋りだした彼女の言葉は…

「私は特にいなくなった事については何も思わないよ。」

慶斗は愕然とした。世界は彼が思った以上に冷たかったのだと。

「だって…、私たちの目の前にいるんだから。」

改めて耳を疑った。風沙の指差す方向を見れば、夏休み前に見慣れた顔があった。無表情に顔を固め、一点を集中するようにだけにした視線。紛れも無い、あれは泉可憐本人である。…一つだけ相違点を上げるとすれば、メイド服を着ていない事だろうか。アイスを放り投げて立ち上がった慶斗。

「風沙、僕ちよつと彼女を追いかけます。彼女と話がしたいんです。」

「私も行くよ、慶斗っち。だって可憐だったらメイド服着てないんだもん！」

走り出す二人。早足で人ごみの中を歩く可憐に追いつくのは至難の業ではあったが、二人は何とか声の届く範囲までやって来る。

「可憐!!」

慶斗が叫ぶと、一瞬だけチラツと二人を見やる。だが、彼女は速度を緩めず、更に加速したのだ。しかし、二人としても追い駆けるのをやめる訳にはいかない。一生懸命に彼女の背中を追った。

二人が追いついたのは、可憐が裏路地の行き止まりに入った時だった。いや、もしかしたら二人を逆に誘い込んだとも考えられるのだが…。

「朱雀慶斗、凧沙…。」

「可憐、どうして急に学園を去ったんですか？あれでは本当に、可憐が中国系征儀伝だと言った様な物です！僕は可憐の言葉を信じています。だから、ちゃんと無実を証明したいんです！」

「そうだよ、可憐。メイド服はいつでも着なくちゃ。」

凧沙の言い分がずれているのだが、慶斗は気にしていなかった。

彼の必死の説得を、無表情な顔で受け流す可憐。

「上からの命令は絶対。今もあなた達を危険から遠ざける為にわざと誘導した。」

「危険？どう言う事ですか？まさか中国系征儀で…」

そこまで言いかけた時、足元が振動した。まるで地震でも起こった様な感覚だ。

「可憐、これって…」

「コレは中国系征儀伝ではない。ただの征儀伝。私にこれ以上近付かない事を推奨する。近く私は指名手配される。私の関係者である事は避けた方がいい。」

そう言っ、可憐は二人の間をすり抜けようとした。

「可憐。僕は信じるます。だって、君が言っただからです。」

だが、可憐は慶斗の言葉を見無視するかのように、体を宙に浮かべ

て去って行ってしまった。

銀行強盗

可憐が去った後だった。突然風沙の携帯電話が鳴る。ディスプレイに表示されたのは“お姉ちゃん”の文字。即ち、玲奈である。風沙が通話ボタンを押す。

「どうかしたのお姉ちゃん？」

「大変なの。今龍夜と銀行で学園の支払いに来てたら……ああっ！」
突然悲鳴を上げる玲奈。怒号も聞こえる。そして電話は切れてしまった。

「風沙、何があったんですか？」

「お姉ちゃん達が危ないよ、慶斗っち！行くよ！」
手を引かれ、あれよあれよと言う間に引き摺られていく慶斗だった。

風沙の勘でやってきた場所には、やたらと人ごみができている。更には警察までも出勤しているらしい。人を掻き分け、先頭まで出てきた。どうやら銀行強盗が押し入っているようである。何を思ったか、慶斗は立ち入り禁止ロープを潜ろうとしていた。勿論の事、彼は警察官の一人に止められてしまう。

「離して下さい。僕の兄いがこの中にいるんです！」

「何を言っているんだね。警察に任せて君は下がっていなさい。これはただの強盗事件じゃないんだ、征儀伝が関わっている。危険だから下がっていなさい。」

きつと、この警察官は征儀伝ではないのだろう。強盗犯と言うのも相まってか、かなり危険視している。時々あるのだ、この様に征儀伝が問題を起こすと、それをネタに色々騒ぎ出す人間が。一部だけの人間に宿る力を嫌い、事件があることに征儀伝を悪く言う。人間とは身勝手なもので、龍夜のように都合のいい事が起これば褒め

称え、今の様に害を為せば、簡単に掌を反して文句を言い出す。きっと、この警官もそんな人間の一人なのかもしれない。

「征儀伝だから危険だって言っているんですか？」

「当たり前だ。意味の分からない力を使って犯罪を起こすなど、言語道断だ。征儀伝でない犯人が複数いるが、征儀伝の奴が幻術でも使ったのだろう。」

やはり、征儀伝の事をよく知らない者がいるのも問題であろうか。慶斗は、征儀が直接的に人間を支配できない事を知っている。彼はポケットから、スツと一枚の金属カードを取り出した。白い魔石の嵌るそれ、南陽学園の生徒手帳だ。

「南陽学園Sクラス、朱雀慶斗と言います。征儀伝が危ないと言うなら、僕達征儀伝に対処させてください。」

隣でも風沙が生徒手帳を取り出している。警官が咥然とした顔をしている。周囲の野次馬も、“南陽学園”とか“朱雀”と言う名前で色々思い出したに違いない。ザワザワと騒がしくなった。

「駄目だ。君らの様な学生を危険な目に合わせる訳にはいかない。増援が来たら突入作戦を開始する。それまでの辛抱だ。」

もっともらしい事を並べて説得しようとする警官。だが、慶斗の目は据わっていた。

「一度電話を受けました。その様子では、僕の兄い達は魔石を取り上げられています。大勢で突入された時に誤って魔石を壊されたら兄いは死んでしまいます。それなら、僕が兄いの魔石を取り戻します。僕の兄い、朱雀龍夜なら、この状況を何とかしてくれるはずですよ。」

一気に言い終わると、やはり“朱雀龍夜”の名前が利いたのか、野次馬からも慶斗達に任せるべきだと言う意見が出始めた。だが、警官も負けてはいない。

「君自身が捕虜になる可能性がある。そんな事したら話をややこしくするだけに決まっているじゃないか。」

「僕に考えがあります。…もういいです。兄いが危ないのに話なん

かしてられません。どいてください。」

「子供の癖に生意気な事を言うんじゃない。おい、この二人を現場からつまみ出…」

【アルマライズ】

警官が言葉を終える前に、その喉元に刃が突きつけられた。

「もう一度言います。僕に行かせてください。」

周囲からも“行かせてやれ!”とか“自分の職を失うのが怖いだけだろ!”などと叫ぶ声が聞こえる。警官も黙って道を譲るように避けた。

「ありがとうございます。風沙、僕が合図するまで待っててください。合図をしたら…」

耳打ちをして、慶斗は銀行の入り口を見た。

【エクスジェンシア】

体長5m程の純白のドラゴンが現れる。驚く者、ため息を漏らす者などがいるが、慶斗はそれに構わず呪文を唱えるのだった…。

所変わって、銀行内。後ろ手に縛られた銀行員や客。その中に龍夜も含まれていた。睨む彼の視線の先には、首元にナイフを突きつけられた玲奈の姿もある。玲奈を抑える覆面を被った強盗犯の他にも、銃などを構えた者が多数いる。そして、時たま地下から重く響く音が聞こえてくるのだった…。

「くそつ、玲奈さえ人質にとられてなければ…」

珍しくもここまで龍夜が追い詰められているのは、偏に玲奈が人質にとられている事にある。当初、直ぐにアルマライズで片付けようとしたのだが、それより一瞬間早く玲奈を盾にされたのだ。その後は強盗の言う通り、魔石は渡してしまった。今は彼に打つ手はない。

「せめて魔石を取り返せば…」

「魔石があればいいんですね？兄い。」

ふと聞こえた弟の声。辺りをそっと見回すが、姿は見えない。だが、トリックが分かったのか、顔をニヤリとさせた。

「来たな、慶斗。」

「はい。遅くなりました。兎に角兄いの魔石を取り返せば良いんですね？誰が持ってますか？」

「玲奈を人質にとってる奴だ。ジャケットのポケットに入っている。」

小声で必要最小限の情報を伝える龍夜。それ以降、誰も龍夜に話しかける者はいなくなってしまった。だが、次の瞬間玲奈の首にナイフを当てている強盗が崩れ落ちたのだ。どうやら慶斗の仕業らしい。白目を剥いてピクピクと痙攣している。

「慶斗の奴、あんなに力が強かったか…？」

しかし、どう見ても不自然である。一撃で大の大人を倒すなど、慶斗にはほぼ不可能。まして、龍夜の予想では慶斗は呪文で光学迷彩を使用しているはず。姿が見えないのは未だ呪文が発動しているから。即ち、他の攻撃呪文は放てないのだ。

バタリと強盗が倒れる。玲奈も隙を見て逃げ出してきた。隣に慶斗が現れる。

「あれは、慶斗じゃないよな？」

「はい。僕じゃありません。」

再び強盗を見る。強盗が寄りかかっていた壁、そこから黒いガンレットが顔を覗かせていた…。

指名手配

一度狼の手甲が抜けたと思えば、壁の一部が破壊され、誰かが入ってきた。三重の装甲征儀を施した全身。その下に見える服装も、ショートパンツと機動性に重視を置いている。そして顔にはサングラスを掛けていた。だが、慶斗たちには一目で正体が分かった。いつもならメイド服を着ていた彼女、泉可憐に間違いない。

「可憐……」

「私はさつきも忠告したはず。ここ一体には中国系征儀伝がいる。あなたは安全な学園に戻るべき。」

可憐に向けて弾丸が放たれる。だが、ガントレットで頭を、しゃがむことで全身を守る可憐。全く効いていないようだった。

「朱雀慶斗、私が引き付ける。やるなら今。」

「あ、はい！ 風沙、出番です！」

携帯電話に呼びかける慶斗。そして彼も呪文を唱えた。

【エスクード・デ・ブライヤー】

【トラーマ・デ・イーロ】

慶斗の防御呪文が人質となっている人を守る。自分の魔獣に乗った風沙が突入し、そのまま強盗の足元に氷を張った。氷に脚をとられ転ぶ者、氷に動き自体を封じられてしまう者が出る。その時に銃口があらぬ方向を向いてしまうが、人質は慶斗のバリアで守られたのだった。

「龍夜、これ！」

玲奈が自分と龍夜の魔石を持って来る。

【アルマライズ！】

自分の漆黒の刀を召還する。

「玲奈、これで俺の縄を切ってくれ。」

「うん。」

縄を解かれ、自由の身になった龍夜。玲奈から刀を受け取ると、第二のアルマライズを使い、短剣を取り出す。玲奈にそれを渡すと、二人は他の人質を解放しに向うのだった。

「慶斗、他の人質に征儀伝はいないから魔石の心配はないぞ！」

「分かりました！」

風沙も氷のバリアを張る為、強盗の武器では全く齒が立たない。

だが、一般人に向けて征儀伝が攻撃を行うのは非常にまずい事なので、二人は攻撃することができないのだった。

「玲奈、この子供を外まで急いで連れてつてくれ。」

「OK」

【アルマライズ】

背中から自分の魔獣、鷲の羽根を生やし、親とはぐれたらしい子供を抱き上げて銀行の外へと向う玲奈。これで人質は全員保護されたようだ。間も無く警官隊が突入してくるだろう。防弾チョッキを纏う彼らなら銃弾も少々は平気かもしれないが、慶斗たちはそんな装備がない。ここで無闇に防御をやめれば、今度こそ自分の命が危ない。

「兄い、防御をお願いします。ここは僕が何とかしますから。」

「なるほど、大体分かった。皆、目を閉じる。」

【エスクード・デ・オスクリード】

【トラーマ・デ・ブライヤー】

同時に呪文を唱える二人。光の盾が消えるが、直ぐに闇の盾が強盗の攻撃を防ぐ。そして、強烈な光が辺りを覆った。慶斗の光属性の罾、強力な光で一時的に相手の視力を奪う呪文だ。光が消える頃には、目を押さえて蹲る姿がいくつも確認された。

ガヤガヤと騒がしくなる。時期を見計らって警察が突入してきたのだ。慣れた手つきで強盗に手錠を掛けていく。ようやく事件は収まったかに見えたのだが…

「おい、あそこにいるの、今日指名手配の連絡があった…」

指差されたのは可憐。彼女も無表情な顔で警官隊を見つめる。

「動くな。お前は包囲されている。魔獣を召還しようとすれば容赦なく撃つ。武装を解除しなさい。」

警官に素直に従ったのか、それともやはり厳しいのか、三重装甲を解除した可憐。警官も油断無く銃を構えている。

「やめてください。可憐は無実なんです。どうして指名手配なんて！」

「上からの命令だ。彼女は危険と判断されている。直ぐに魔石を取り上げ、身柄を確保するように言われている。」

彼女を取り囲むように警官が動く。慶斗が動こうとしたのだが、それは龍夜に止められてしまった。

「彼女が無実かどうかは、警察が調べれば分かる。もし、慶斗が無実を信じてるなら、警察が無実を証明するのを信じる。今アイツが逃げたら、これ以上に状況が悪化する事は泉も知っているはずだ。」

「兄い……」

沈黙が続く。一人が手錠を持って可憐に近付いた。

「来た」

ポツリと彼女が呟く。一瞬呆気にとられたように動きを固める警官。その時だった、呪文も唱えていないのに小さい嵐が出現する。可憐の属性は雷のはず。警官達が慶斗たちを見やるが、魔獣が消えている。まずもって、彼らの中に風属性の征儀伝は今いない。

「仲間か……」

嵐が収まると、そこには可憐より背の高い人間が立っている。黒いマントを被り、フードは顔を隠していた。

「やあ、警察の方々。泉君を逮捕するのはご遠慮願えますか？」

「なるほど。組織化された者のようだな。君にも事情徴収を行う必要がありそうだ。」

「困りますねえ。俺も泉君も作戦の要なので、これにて失礼させてもらいますよ。」

【エスクード・デ・トルメンタ】

風の盾が二人を包み込む。呪文使用の為、警察側が銃を撃つのだが、破られる様子は無い。

【トラーマ・デ・トルメンタ】

巨大な竜巻が現れ、警官達を威嚇するように近付く。慌てて近くの柱などに掴まるうとする。だが、突然としてその竜巻は消えてしまったのだった。そして、いたはずの場所に可憐ともう一人はいなかった。どうやら逃げる為の布石だったらしい。

「可憐…」

とあるビルの屋上、二人の人影が立っていた。二人とも黒いマントを被っている。

「まったく、泉君も勝手な事をやってくれるね。俺がいなかったらどうするつもりだったんだい？」

「問題ない。薬の効果を使用していた。」

「泉君はそこまでして彼らに肩入れするのか？近々作戦だって始まる。そんな事じゃだめだ。」

「分かっている。これ以降は彼らと会わないように心がける。」

「それがいい。作戦の開始される日は間近なんだ。もう時間は残されていない。仲間も着々とこの街に集まりつつあるんだからね…。」

流派転換

謎の乱入者に吹き飛ばされかけた警官達が立ち上がる。作戦指揮官と思われる男が指示を飛ばした。

「強盗犯を連れて行け。」

その他もろもろの指示を出した後、慶斗たちの所へ向ってくる。

「今回は助かった。感謝する。一応話を聞きたい。署の方まで…」

「どけどけどけっ！」

【アジエット・デ・フェーゴ！】

指揮官がハッと後ろを振り向く。そこには、地下金庫に通じる階段から出てきたサイがいた。

「あれは、魔獣！？」

慶斗が驚いた顔をする。だが、考えてみれば、主犯と思われる征儀伝が見つかっていないのだ。龍夜に引っ張られ、サイの突進を避ける5人。そのままドアを破って外へと飛び出していった。

「なるほど、ここにいた奴らは囷って訳か…。アイツは魔獣で地下金庫を破っていた。だが、計画は滅茶苦茶にされ、あいつは逃げたって所だ。慶斗、追いかけるぞ。」

「はい。すいませんが、お話は後にさせてください。」

「私たちも行く。」

「行くよ、慶斗っち！」

【「【エクスジェンシア】」】

4体の魔獣を召還し、それぞれの背中に乗る。そのまま銀行を後にしたのだった。

突然現れた魔獣に、街は大混乱に陥っている。魔獣は約5mはある為、道路を爆走する魔獣は、さながらの暴走した小型トラックだ。その後を4体の魔物が追う。

「椎名、俺の言う場所に氷の罫を仕掛けろ！ここは俺達の街だ。追

い込める場所を知っている！」

龍夜の指示で、道路に氷を張っていく風沙。サイ型の魔獣のスピードは速い為、氷の罠は避けるしかない。段々と龍夜の画策する場所まで追い詰められていった。

強盗犯が追い詰められたのは、採掘場。街から離れたここは崖に囲まれており、ちょうど行き止まりとなっている。因みに小さい頃の慶斗たちの魔獣の訓練場でもあったのだ。

「さあ、ここなら気にせず暴れられる。容赦はしないからな。」

「4体も魔獣が襲ってくるかと思ったら、全員子供か。調子に乗るんじゃないぞ。」

「そっちこそ何を考えているんですか。あなたみたいな人が社会的な征儀伝のイメージを悪くするんです。征儀伝の全員があなたのせいで迷惑を被るんです！」

「うるさい。止められるなら止めてみる。」

「そう言うと思ったぜ。俺達が相手をしてやる。」

「わ、私はもう無理……」

考えれば、風沙はここまでずっと氷の罠を仕掛けていたのだ。魔力切れになるのも仕方が無いだろう。風沙は休むこととなった。

【アジエツト・デ・フェーゴ】

炎を纏ったサイが突っ込んでくる。

【エスクード・デ・オスクリード】

闇の盾でそれを受け止める。しかし、それが破られたのだ。第三文詠唱だけだったと言う問題ではないだろう。続けて防御に秀でた慶斗が光の盾を用いる事で、なんとか防ぐ事ができたのだが……。

【主の命令よ。対象を雷の弾で穿て。バレ・デ・ルエーノ】

玲奈の攻撃呪文。雷の弾丸が上空から降り注ぐ。

【アポール・デ・ブライヤー】

慶斗のサポート呪文が発動し、光のゲートが現れる。玲奈の攻撃がそれを通して瞬間、雷の弾の威力が増した。上から降り注ぐ攻

撃を防ぐ手段はないかに思えたが…。

【アジエット・デ・フエーゴ】

再び突進の呪文を唱え、攻撃を避けてしまったのだ。その上、突進する先には龍夜がいる。

「死にたくなかったら、そこをどけー！」

【トラーマ・デ・オスクリード】

淡々と呪文を唱える龍夜。闇の罨を発動させる。一見盾と同じ外見に見えるが、効果は全く違うのだ。罨を破ろうと、更に加速するサイ型魔獣とそれに乗る強盗犯。先程彼のバリアを破ったので、完全に舐めている。だが…

闇の盾に見えたそれは、相手の魔獣の攻撃に破られるでも弾き返すでもなく、飲み込んだのだ。これが闇の罨の効果。本来、相手の攻撃を飲み込み、任意の場所から開放する呪文。これを突進攻撃をしてくる相手に使ったのだった。

「崖にでも突進してろ。」

龍夜がそう呟くのと同時に、消えた闇の罨が崖の目の前に現れた。避けることもままならず、サイ型魔獣はその身を崖へと埋め込んでしまう。

「舐めてくれたものだな…」

崖から出てきた強盗犯は、魔獣を失っていた。かなり魔力を消費していたのだろう。しかし、まだ諦めた様な様子を見せていない。

【アルマライズ】

龍夜と慶斗がそれぞれ刀を取り出して強盗犯に向う。玲奈と風沙も後ろから銃と弓矢を構えて警戒している。

「ここまでだ。大人しく投降しろ。」

「いずれ警察が来ます。これ以上抵抗しないでください。」

刀を向けられ、動きを封じられている強盗犯。慶斗たちもこれ以上抗う事はないと踏んでいたのだが…。

「馬鹿だよな…。お前ら子供が“あの方”から力を与えられている俺に勝てるはずが無いだろ？」

「あの方…？」

「緊急時に使う薬だよ。」

慶斗たちが止める間も無く、強盗犯はその薬を飲み干した。不敵な笑みを浮かべて立ち上がる。制止することができない。オーラと言うべきか、まだまだ力が溢れ出ている感じなのだ。

「はあああつ！」

突然だった。男の胸ポケットが緑色に発光した。

「緑色の光！？まさか、お前中国系征儀で…」

龍夜が言葉を終える前に、男は慶斗と龍夜の首を掴んで持ち上げる。先程までは、この男はスペイン系征儀伝だったはず。その証拠に赤い光を放つ魔石を持っていたのだから。

「死ねッ！」

人間では到底考えられない程の腕力で投げ飛ばされる二人。しかし、玲奈の魔獣が二人を羽で受け止めた為、大きな怪我を負う事は無かった。

「それっ！」

風沙が自分の弓矢から魔力で構成された矢を放つ。アルマライズのスキル向上効果もあってか、強盗犯まで直線ルートだ。

「甘い。」

だが、相手は矢を素手で掴んで捨ててしまった。それなりのスピードはあったはずなのに、いとも簡単にかわしたのだ。

「此方の番だ。しつこい輩は完全に叩きのめす主義だから、覚悟しておけ…。」

男のポケットから発せられる光が、さらに強さを増していった。

完全合成

地面を一蹴りした強盗犯が、一直線に突っ込んでくる。その速さは先程の風沙の攻撃を上回るものであった。

【エスクード・デ・オスクリード】

【エスクード・デ・ブライヤー】

【エスクード・デ・ルエーノ】

【エスクード・デ・イーロ】

四人が同時に属性の盾を張る。闇、光、雷、氷。それらが一直線に並び、強盗犯を迎え撃つ。

「でやあああつ！」

だが、加速度までも活かして特攻してくる強盗犯は、一枚一枚の盾を破ってくる。そして、最後の氷の盾が破壊されたと同時に、鹿型の魔獣に体当たりをした。まるで氷が砕けるかのごとく、風沙の魔獣は消滅してしまう。かなり魔力を消費したのか、崩れ落ちてしまった風沙。もはや戦闘所ではなくなってしまった。

「風沙！」

「余所見ができる状態か？」

風沙に駆け寄ろうとした玲奈。彼女に向かって突進する強盗犯。

【バレ・デ・オスクリード】

玲奈と風沙を守ろうと、龍夜が後ろから追撃を仕掛けるのだが、それさえも弾き返してしまう。

【ライオ・デ・ブライヤー】

続けて光線が飛んでくる。慶斗のエンジェルが放ったものだった。こればかりは弾く事が出来ないと悟ったのか、強盗犯は上空に飛ぶ事で避けた。

【アジエット・デ・ルエーノ】

雷を纏った鷲が、強盗犯に突っ込んでいく。そのスピードは中国系征儀伝の速さに匹敵するものだった。逃げられないと悟ったのか、

方向転換をして鷲型魔獣を迎え撃つ。拳を握り固め、後ろへ送る。そのまま突き出した。

一瞬電流が流れたように見えたが、玲奈の魔獣も消滅してしまう。

「これはすげえ。中国系征儀伝になるとこんなに力が溢れるのか……」
自分のした事が信じられないと言う風に喋る強盗犯。

「そう言えば、お前は朱雀龍夜とか言う奴だよな？天才学生の。あの方がお前ら兄弟をいたく気に入ってたぞ。詳しく言えば、お前ら二人の魔石をな。」

「どう言う事だ？」

「俺が知るか。だがな、お前らの魔石を持ち帰れば良い事は知ってるんだよ。だからよ、魔石を寄越せ！」

上空から二人に突っ込んでくる強盗犯。

【「アルマライズ！」】

この呪文は本来、この時の為に作られたもの。闇色と純白の刀を居合い切りの構えで持つ二人。突っ込んできた瞬間に牽打ちにするつもりなのだ。

斜め上の方向から強盗犯が突っ込んでくる。そして、二人が刀を振りかざした。

「馬鹿だな……。峰打ちにしようなんて、考えが甘すぎる。」

なんと、強盗犯は二人の刀を素手で掴んでいたのだ。そのまま押し折らんとばかりに力を強める。

【「アルマライズ・セグ」】

二人が二本目の刀身の短い刀を取り出す。それで腕を狙った。今度は本当に刀を使っている。強盗犯もこれには利いたのか、刀が腕を切り落とす前に後退した。二本の刀を構える二人、余裕な笑みの強盗犯。再び3人が衝突した。

刀を振るい、クロスさせて防御をする慶斗。斬撃の合間に蹴りを入れる龍夜。そんな二人を相手にしても、強盗犯は両手両足を器用

に使いまわし、攻撃を防いでいた。だが、全てを防げるわけではなく、所々に切り傷も付いている。

「はっ！」

突然慶斗が短刀を投げつけた。縦回転するそれを、側面から蹴って対応する強盗犯。だが、そこに一瞬の隙が出来た。龍夜がすかさず、腹に峰打ちを入れた。

「ぐっ……」

ジャンプして後退する強盗犯。

「やはり近接戦闘では手数に理があるか……」

【エクスジェンシア！】

魔方阵が展開、サイ型魔獣が現れる。しかし、その姿は先程より変わっていた。異様に首が伸び、四肢にも棘が生えている。もはや怪物と表現した方が良い物になっていたのだ。異様なその姿に二人は眉をひそめる。

【アジエツト・デ・フエーゴ】

炎が噴出し、突進してくる怪物。これでは二人に魔獣を召還する時間が無い。龍夜が刀を投げつけるのだが、硬い皮膚には効いていないようだ。それぞれ左右に避け、ギリギリで危機を脱する。

「慶斗、いいか？俺が一時的に足止めをする。その間にお前は回復に努める。それが終わったら、一気に型を付ける。」

「はい。」

龍夜の意味する事が分かったのか、慶斗は直ぐに返事を返した。

【「エクスジェンシア」】

二人が魔獣を召還する。

【リポルネルス】

慶斗が回復呪文を唱えた。その前に立ちはだかる龍夜と魔獣。これが終わるまで、彼を守らなくてはならないのだ。

【主の命により、全てを包み込む闇を見せる。コーティナ・デ・オスクリード】

闇が広がる。直接的な攻撃力は皆無に等しいが、相手を混乱に陥

らせたり、惑わすフィールドを作り出すことが出来る。予測どおり、相手は龍夜の位置が把握できていないようだ。

【コルト・デ・オスクリード】

切り裂く闇の刃が襲い掛かる。場所が特定出来ていない以上、攻撃を回避することは出来なかった。まともに受けてしまう。

「そこか…」

強盗の洞察力の良さに、龍夜は焦りを隠せなかった。たった一度の攻撃で、こちらの場所を正確に特定したのだ。これも中国系征儀伝としての能力なのだろうか？

【アジエット・デ・フェーゴ】

一直線に突っ込んでくる魔獣。避ける事は容易いが、それでは回復中の慶斗に攻撃が否応なしに当たってしまう。

【トラーマ・デ・オスクリード】

再び闇の罫を仕掛ける。崖でもどこでも良い、出来るだけ長く相手を遠ざけたかった。

「同じ手が二度も通用すると思うな！」

その言葉と共に、怪物が闇の盾を横から破壊した。直線で突っ込むことで効果を発動するその罫は、避ける、壊す事をすれば簡単に破られるのだ。そのまま突っ込んでくる魔獣、龍夜は驚きと焦りの余り、バリアさえも張ることが出来なかった。

【エクスプロ・デ・ブライヤー】

突然、地面が爆ぜた。いや、違う。直接地面に叩き付けられた光の爆弾が爆発したのだ。

「お待たせしました。兄い。」

どうやら回復が終わったらしい。龍夜の横に立つと、スウツと深呼吸をした。

「準備はいいか、慶斗。」

「はい。」

相手がまだ戦闘不能の状態の間に、二人は声を揃えて呪文を発動

した…。

【主の命令です。光の魔獣よ、闇の力を受け入れよ。】

【主の命令により、闇の魔獣よ、光の力を受け入れる。】

【「ユニルス！」】

二体の魔獣が白と黒の光に変わり、混ざり合う。銀色の光の球となった。ちょうど到着した警官達の話に抛れば、それは銀色の太陽の様だったと言う。強盗犯の魔獣が起き上がり、再び攻撃をし掛けようとする。だが、そこには二体の魔獣はいなかった。

黄金に輝く体、白と黒の翼が生えている。長い首の先端には、三つの目が睨みをきかせる顔があった。これが、慶斗と龍夜の合成魔獣、ダークネスエンジェル“光と闇の黄金龍”である。

「なんだよ、これは…」

強盗の驚きと焦りの混ざった表情を他所に、二人は同じ呪文を唱え始める。しかし、それに少しの差異があった。

【主の命令です。対象を穿つ光の弾を放て。バレ・デ・ブライヤー】

【主の命令により、対象を穿つ闇の弾を放て。バレ・デ・オスクリード】

それぞれの翼から、二つの属性の技が放たれる。光と闇、相対する二つの属性が、お互いを相殺する事無く相手の魔獣に降り注ぐ。ただえさえ慶斗の上級征儀を直に受けているのだ。フラフラになりつつある。

「慶斗、一気に行くぞ。改良したからって言うても、今の状態は、やはりきつい。」

「分かりました。上級征儀を発動します。」

クラス決定試験において、魔力量が問題視されたこの呪文だが、夏休みを利用した龍夜の改良により、数段使いやすくなっている。

一つ目の改良点としては、魔獣自体の大きさである。以前の呪文

では二体分の魔獣より大きい、超が付くほどの大型であった。だが、通常の魔獣の大きさである5mに統一することで、大幅に魔力使用量をカットしたのだ。

二つ目は魔力経路の可変性。以前は二人の征儀伝から等しく魔力を送っていた。だが、それでは魔力保持量の少ない征儀伝に負担が掛かる事になる。それが転じて魔獣合成の限界時間が短くなる事に直結していた。だが、龍夜の改良によって、より保持量の高い征儀伝から多くの魔力を送るように変更したのだ。つまり、今は慶斗が大量に魔力を送っている状態である。

【主の命令です。光よ、対象を貫け。】

【主の命令により、闇よ、対象を縛り上げる。】

【【オスクリード・デ・ブライヤー】】

ダークネスエンジェル

合成魔獣から闇のロープが現れ、相手の魔獣をきつく縛り上げる。そして、口から無数の光の棘が吐き出され、体全身に隙間無く打ち込んでいった。のた打ち回る魔獣、しかし、その後直ぐに消えてしまふのだった…。

「く、そ…」

魔力を練る事が出来ないのか、倒れ伏したまま動かない。警察が駆けつけ、手錠を掛けるのだった。

「終わったな…」

座り込む二人。しかし、先に倒されてしまった二人を思い出し、慶斗と龍夜は凧沙と玲奈の所へ駆けつける。

「玲奈！」

「凧沙！」

抱きかかえると、二人とも眠っていた。どうやら疲れたらしい。よくあんな状況で寝れた物だと、半ば呆れた顔で見る二人。

「強盗犯は確保した。協力感謝する。」

先程の指揮官が話しかけてくる。慶斗が言葉を発しようとしたのだが…。

「うぐっ…、うぎゃあああっ！」

突然誰かが叫び、全員がそっちを振り向く。

強盗犯だった。白目を剥き、体を激しく痙攣させている。警官達
が必死で押さえつけるのだが、止まろうとしない。よく見れば、胸
ポケットの辺りから緑の光が漏れているのがわかる。

「どうしたんだ？」

「兄い、あれって、魔石が暴走してるんじゃないんですか！？あの
変な薬で。」

「厄介な薬だな…。」

強盗犯に近付き、魔石を探り出した。強烈な緑の光を放つ魔石が
そこにあった。

「兄い、どうすれば良いんですか！？」

「どうするも何も、魔石の暴走なんて聞いた事も見たことも無い！
無闇に手を出して傷つけたら、こいつの命が無いぞ！」

しかし、光は増すばかり。それに連れて男の痙攣も激しくなっ
ていく。そして…

魔石が破裂するようにして壊れた。まるで内側から爆発するかの
ように。次の瞬間、その男は糸の切れた人形のように力なく事切れ
てしまった…。

完全合成（後書き）

今回、初めて完璧なユニルスに成功しましたが、それについて解説を少々。

1、合成魔獣の大きさが半分以下になりました。

魔力消費を抑えるため。（普通の魔獣と大きさは変わりません。元々が大きすぎたのです。）

2、魔力の伝達回路が可変式になりました。

魔力保持量の多い征儀伝から優先的に魔力を送るため。（今回の場合、魔力保持量の多い慶斗が大量に魔力を送っています。比で言えば、7：3でしょうか。）

偶然必然

学園へ向う電車内、龍夜は黙り込んでいた。慶斗もだ。その雰囲気の中、翔太や玲奈、凧沙も黙っている。強盗犯が最終的に魔力の暴走で死んでしまった事もあるが、それは事故死と言う形で抑えられた。抑えられたはずだったのだ。まだ一般的には知られていない中国系征儀伝の説明をした所で、警察は納得するはずがない。

しかしだった。事は昨晚起きた。明日帰る事となっている慶斗たちを、留美が夕食に招いたのだ。朝は早い為、これが今年最後に会う事となる。だが、秘密裏には彼女を守る為に、龍夜と慶斗は直ぐに戻って来ることを留美は知らない。

「きつとお兄様方の活躍、まだニュースでやってると思うよ。すごいね、強盗犯を捕まえちゃうなんて！」

「まあね……」

「慶斗お兄様、どうかしたの？」

「え、ううん。何でも無いですよ。僕は大丈夫です。」

「それなら何より。爺、テレビをつけてくれる？」

「かしこまりました。」

夜のニュースが始まっていた。留美の予測通り、朱雀兄弟の活躍が描かれている。イメージ映像が流れるが、二人にしては緩いアクションにしか見えなかった。魔獣合成の様子はCGで再現されているらしく、少々手が加えられていた。

「やっぱりお兄様たちのコンビネーションは素晴らしいですね。今度、その合成魔獣見せてください。」

「ああ、いいぞ。」

そんなこんなで事件が報道されている。強盗犯の死はうまく隠されていた。留美も目的の内容が終わった為、テレビを消そうとした時だった。突然ニュースキャスターが何者かの襲撃を受けたのだ。

素早い動きで首に刃物を当て、ほかの者に動かない様に指示する。それ以外にも仲間がいるのか、直ぐに悲鳴や怒号は収まった。

「兄い、この人たちって……」

突然テレビ局を襲撃した者たちは、黒マントを着ており、フードを目深に被っている。

『この番組を見ている皆さんにお聞かせします。我々は中国系征儀伝。スペイン系でも無く、ギリシア系でもない、第三の流派。我々のリーダーから預かったメッセージを伝えに参上した。“来年、この世界は滅亡する。我々がその計画を実行し、誰からの指図も受けない。”我々中国系征儀伝は、目的を遂行する為なら、どんな非道な手も卑怯も厭わない。抵抗するも、我々を殺すも結構。だが、誰にも止められない事を前もって言わせてもらおう。既に此方は計画を始動させている。世界の終わりを指を噛みながら待っていると良い。…我々を馬鹿で愚かな集団と考える者も居るだろう。その為、我々はここで宣言する。9月1日午前10時、倉本コーポレーション社長の一人娘、倉本留美を誘拐する。既に予告状は届いているはずだ。勿論、色々と守りを固めている事も把握している。我々は有言実行、失敗はしない。繰り返す……』

わざわざ腕に装着する緑の魔石を見せながら喋る中国系征儀伝の男。龍夜と慶斗は唇を噛んでいる。翔太と留美は啞然としていた。特に、当事者である留美にしてみれば、10日ほど後に自分が誘拐されると知れば尚更だ。

「お、お兄様、こ、これはどう言う事なの……?」

「留美、良く聞いてくれ。ここまで来たら、隠し通せない。」

龍夜が秘密を明らかにしていく。今年度初めに頻発した征儀伝殺しに始まり、慶斗たちが中国系征儀伝と戦った事、学園内にも疑わしき人物がいる事、そしてこの誘拐もそれが絡んでいるのではないかと予測していること。

「大丈夫だ、留美。俺と慶斗がその日に戻ってくる。直ぐ近くで守

つてやるからよ、安心しろ。」

「龍夜先輩、俺もお供させてください！」

翔太が名乗りを上げた。留美にいい所を見せたいのでは無く、純粹に友達を守りたいと言っている目だ。龍夜はただ考えておく、とだけ告げた。

「兄いは、中国系征儀伝の目的について知っていたのですか？」

沈黙を破ったのは慶斗だった。

「ああ。入学直後に学園長から教えられた。俺が呪文を作れる事を知った上でな。だが、世界を終わらせる方法など皆目見当がつかない。学園長なら知っているだろうが。」

椅子に深く腰掛け直す龍夜。あの中国系征儀伝の宣戦布告のあと、様々なテレビ局が特集を組み始めた。征儀伝のゲストを交えて討論会が行われたり、警察は緊急的に警戒態勢を高め始めた。だが、相手の情報が不足しており、真相を掴む事は難しく思えたのだった。

「中国系征儀伝は何が目的なんだ？わざわざ警戒を高めさせるような事をしているし。まるで自分達が負ける事を望んでいるみたいじゃないか。」

「強いけど、狂ってるんだよ。最強を自負しながらも、最狂とか。」
的を射ている発言なのだが、風沙の発言の為、ふざけている様
しか聞こえない。

「わざと負けるか…。手を抜いて油断した所を襲う戦法もあるな…。」

思案し始める龍夜。あれだけ堂々と宣戦布告しながら、裏をかかない訳がないと考えたのだ。だが、何も思い浮かばない。新学期の訪れと共に、殺人と言う大規模な行動に出始めた中国系征儀伝。目的は世界の終焉。それに加担していると思わしき元学園生徒と保険医の失踪。この夏休みに現れた強盗犯。そいつが持っていた普通の

征儀伝を中国系に変えてしまう薬。副作用らしき痙攣と魔力の暴走（？）による死。全てが結び付きそうで結びつかない。今までの一連の事件が留美の誘拐と全く結びつかない。身代金を強要し、活動資金に充てるのだろうか。それとも、度々ぶつかる龍夜や慶斗に、これ以上関わるなど言いたいのか。その可能性は高い。強盗犯が言っていた。“お前らの魔石を奪えばいい”と。確実に中国系征儀伝達は二人の魔石を狙っている。確かに、征儀伝としての素質が高い分、魔石も強い力を持つ。だが、それを使えるのはその魔石の持ち主のみだ。更に分からなくなる。

「あの銀行強盗は偶然だったのか、それとも俺や慶斗を狙った罠だったのか…」

思わず冷や汗を流す龍夜だった…

追撃反撃

「夏休み中に大きな事件もなかった様で何より。例のニュースの心配もあるが、自身の安全を守ると言う意味でも、これから勉学に励むように。」

9月1日、南陽学園が夏季休暇を終えた。既に前日には寮へと戻ってきた学園生徒たちは、それぞれの思い出を語り合いながら式に参加するのだった。数人見受けられない生徒もいるが、諸事情で都合がつかないのだろう。龍夜もその中の一人だった。今ここに龍夜はいない。昨日、他の生徒と相對するように自分の街へ帰って行ったのだ。

式も終わり、それぞれが各自の教室へ向う。今日は体慣らしの意味も込めて、十時ごろの解散である。学校が終われば寮に帰ってのんびりする者、下町へ出かける者、学園に残って夏休みの成果を見せる者など様々だ。

しかし、そんな呑気な事を考えている生徒と対照的な者達がいた。学園から寮へと続く道に立ち並ぶ黒マントの数々。夏の日差しを気にしないが如く、淡々と時を待っている。もう少して作戦決行の間が来る。倉本留美の誘拐はただの罠。狙いは朱雀兄弟の魔石だ。しかし、倉本留美を警護する為、彼らは学園にはいない。中国系征儀伝の一部でも、それを知ってこの作戦が無意味だと主張する者もいるが、他の一部は本来の仕事を知っており、それが最終的に二人の魔石を手に入れる事となるのを知っている。

チャイムらしき音色が響き渡る。ガヤガヤとした喧騒が起こり、学園の生徒が出てきた。時刻は十時。中国系征儀伝が動き出す…

所離れた龍夜達の街、とある一軒の屋敷はやけに騒がしかった。特に煩いと言う訳ではないのだが、人ごみがあるのだ。屋敷の表にはパトカーが並び、立ち入り禁止のロープを張っている。警官も構

えの状態であっている。屋敷内にも巡回中の警官がいるのだろう。守る対象の留美がいるこの部屋の前には、倉本家が集めた征儀伝が待ち構えている。そして、駄目出しとばかりに、留美には龍夜達が付き添っていた。これだけ警戒態勢を敷いていれば大丈夫だろう。だれもがそう思っていた。時刻も十時近い。部屋の前にいる征儀伝の一人が、状況確認とばかりにテレビをつけた。

「見えるでしょうか。先日 of 犯行予告を阻止する為、警察が嚴重警戒態勢を…」

かなり世間も騒いでいる様子。犯行予告時刻まであと数分。緊張が張り詰める。息をするのを忘れるくらいだ。

そして、屋敷の時計が十時を指した。振り子時計がボンと特徴的な音を立てる。時間が来たが、誰も襲撃をする気配がない。誰もが犯行は不可能だったと安心した。

『ごきげんよう、みなさん。』

突然女性キャスターの顔が消え、黒マントを着た男が喋り出す。電波ジャック、しかも中国系征儀伝によるものだ。

『予告通り、今日十時を持って倉本留美を誘拐させていただきました。』

誰もが硬直した。カメラがずらされ、椅子に座る少女を写す。目隠しをされているが、あのヘアスタイルは間違いなく留美と同一の物だった。

「早く、早く部屋のドアを！」

誰かが叫び、爺が急いでドアを開ける。そこには龍夜達の姿が…。この部屋にテレビはなかったのか、龍夜が隙なく刀を構えている。留美はそこにいた。

「お嬢様、よかった…」

「どうしたんですか？」

翔太の問いに、一人が先程の電波ジャックの事を話した。どうやら捕まっている少女は偽者らしい。混乱を招くのが目的だったのだろつか？龍夜は刀を消した。

「馬鹿め…」

突然緑色の光が輝く。驚く間も無く、留美が消えた。違う、中国系征儀伝が持ち前のスピードで留美をさらったのだ。そのまま窓に突撃し、外へと逃げる。

「留美！」

「留美ちゃん！」

ここで相手のトリックが判明する。先程の映像は、爺に部屋のドアを開けるように仕向ける為の罠。その証拠に、テレビを点ける事を提案した人物が留美をさらったのだから。そして、誘拐犯はあの薬を使つたに違いない。

「爺やさん、俺達が追いかけます。警察に事情を説明して応援を呼んでください。」

「分かりました。お嬢様を頼みます。」

「青龍！お前の魔獣を使う。お前のスピードなら見失わずに済む！」

「はい！」

【アルマライズ！】

蝙蝠の背に翔太と龍夜が乗る。そして中国系征儀伝を追うのだ…。

かれこれ20分は逃走を続けている。街を外れ、工場が目立つ場所へとやって来た。

「ここら辺じゃないか？ほら、あれを見る。」

龍夜の指差す方向にあったのは、中型のパラボラアンテナ。きっと、あれを使つて電波ジャックを行っていたのだらう。その時だった。突然地上から砲撃がやって来る。砲撃と言っても、魔獣の光線ライオ系の呪文だったのだが…。

「決まりだな。青龍、二手に分かれて地上に降りる。」

「はい、分かりました。」

龍夜が蝙蝠の背中から飛び降りた。それと同時に呪文を唱えて魔

獣を召還する。黒い龍の背中に乗った龍夜。留美の救出の為、スペイン系征儀伝二人と中国系征儀伝の戦いが始まるのだった。

【ライオ・デ・オスクリード】

【バレ・デ・トルメンタ！】

上空から地上に向けて、闇の光線と風の弾丸が放たれる。相手の数は総勢十人ほど。その内7人が幻獣による攻撃、残りの3人があの超絶的な身体能力を駆使して龍夜達を倒そうとしている。

「青龍！このままじゃ無理だ。旋回能力の高いお前が生身の方を追撃しろ。俺は幻獣を叩く！」

龍夜の判断で二手に分かれる。龍夜が滞空して幻獣に攻撃を、それを狙う生身の方は翔太が相手をする。

【トラーマ・デ・オスクリード】

幻獣の攻撃を闇の罾が吸い込んだ。次の瞬間、罾が消え、幻獣たちの目の前に出現する。避ける間も無く己の攻撃を受けてしまった。「龍夜先輩、少し場所を借ります。後、耳塞いでください。」

「分かった。」

翔太がドラゴンの背中に飛び乗る。

【アジッタ・デ・トルメンタ！】

不協和音を奏でて、頭に響き渡るような鈍い嫌な音を奏でる。相手方の戦意を削ぐには十分の効果があつた。

【モルデイス！】

続けて魔獣自体の能力を飛躍的に向上させる呪文、無属性呪文のモルデイスを発動する。たぶん類から習ったであろうこの呪文で、空中を生身で飛び回る中国系征儀伝に体当たりを始めた。

新たな装甲征儀

時は少し戻り、南陽学園の校門前。寮へ戻ろうとする学園生徒達の前に怪しい人影が現れた。全員が黒いマントを纏い、フードを深くに被っている。

「おい、あれって…。」

誰かが気がつく。彼らは中国系征儀伝だと。

「確か、誘拐予告をしたはずだよな…？どうしてこんな所に…。」
ざわめきが広がる。確信はないが、彼らが中国系征儀伝なら危ない。直ぐに逃げなくてはと言う考えが起こる。生徒達が少しずつ学園の校内に後戻りを始めた。

だが、先程まで一言も喋らなかつた相手が口を開く。

「お前らの魔石を貰いにきた。」

次の瞬間、緑色の光を淡く発光させ、中国系征儀伝が生徒達に襲い掛かった。悲鳴が上がる中、中国系征儀伝に向って一筋の光が走った。急襲に驚くも、急遽進路を変更し、地面に降りる。光線の飛んできた方向を見上げた。

「やっぱり兄いの言った事は正しかったです。皆さん。準備は言いですか？」

倉本家の屋敷で姿が見えなかつた筈の慶斗、彼の姿がそこにあった。それだけではない。玲奈や類、凧沙を始めとした警護部のメンバーが屋上にいたのだ。

「先生の指示に従い、速やかに学園内へ避難して下さい！」

玲奈の声が響き渡り、生徒に指示を出す。その間にも襲い掛かるうとする中国系征儀伝。

【モルデイス】

それに襲い掛かったのは、類のサメ型魔獣。鋭い牙の並んだ口で威嚇し、尾鰭で薙ぎ払う。生徒達の逃げ道を作り出していった。

「なぜ朱雀慶斗がここにいる。」

「兄いがあなた達の考えを読んだのです。僕や兄いは留美と関係があります。あなた方と留美には全く関係がありません。それなのに、あれだけ犯行日時までの期間が長く、大きな宣伝もしていた。兄いは、誘拐は囷、本当の目的はこの学園の襲撃だつて気がついたんです。なぜここを狙うのかは知りませんが、兄いの予測は当たりました。僕らはこの学園を守る為に戦います。」

魔獣に乗り、地上まで降りてくる。他のメンバーも彼に続いた。

「三年生のお二方と、風沙、中里先輩は魔獣で攻撃を。僕と玲奈さんはアルマライズで行きます。」

【「アルマライズ・セグ」】

二本の刀で切りかかる。玲奈も二挺の銃を装備した。これは、昨日龍夜が学園を発つ前に教えた作戦である。狭い空間内での戦闘では、援護型の風沙の武器では分が悪い。また、三年生はアルマライズを未だ扱えない。類のモルデイスなら中国系征儀伝のスピードに追いつき、質量戦を仕掛けられる。と言う要因から、この4人は魔獣での攻撃を行うのだった。

【バレ・デ・イーロ】

氷の弾丸を大量発射する風沙の魔獣。中国系征儀伝はそれを手足を使って砕く。身体能力の強化により魔獣の攻撃に耐えられる相手は、じわじわと慶斗たちの魔力切れを待っているのだ。

「せいっ！」

慶斗が刀を構えながら突っ込んでいく。殺しはしない、峰打ちにするつもりだ。だが、中国系征儀伝はそんな甘い考えなど、持つてはいない。容赦なく慶斗に拳やキックを繰り出す。慶斗もなるべく急所は狙わないようにして刀を振るうのだが、身体強化を施した敵は素手で刀を握ってしまう。

「甘い。殺そうとしない考え自体が甘い。お前の魔石は我々の欲する物でもある。奪わせてもらっぞ。」

「そんな事、させません！」

瞳を真紅に染め上げる慶斗。魔力を大量に開放し、刀から魔力攻撃を行う。少々消費を強いられる技だが、緊急回避として使用できる利点がある。吹き飛んだ敵をそのままに、刀を地面に刺して一度に大量の魔力を注ぎ込んだ。

大地が振動する。魔力爆弾と言っても過言ではないその衝撃は、小規模の地震を起こした。地面がひび割れ、中国系征儀伝がバランスを崩す。

「皆さん、今の間に攻撃を！」

慶斗の作ったチャンスに乗り、魔獣に上級征儀の発動を促す。玲奈も銃弾を雨あられと撃ち放った。

【召喚】

生身では耐え切れなかったのか、中国系も幻獣を呼び出して盾を張る。

【エクスジェンシア！】

慶斗もエンジェルを呼び出した。

「相手が身体強化能力を使えないように、攻撃にラグを作らないでください！」

わざと攻撃のタイミングをずらす事で、連続で攻撃を放つ。かなり協調性が必要なのだが、同じ警護部で学んだ彼らなら無理な事ではないだろう。光や氷、雷、風と様々な属性の攻撃が連続で降りかかる。中国系征儀伝は防御呪文を唱える以外出来なかった。

しかし、慶斗はともかく他のメンバーには限界が見え始めているのも事実。特に女子メンバーの疲れが顕著だった。それに対して、魔力保持量の多い慶斗、魔獣による攻撃を多用する類はそれなりに余力がある。

「朱雀弟よ、力を合わせるべきぢや。」

隣に類がやって来る。どうやら、合成魔獣を示唆しているらしい。確かにギリシア系の慶斗と、スペイン系の類なら可能である。だが、慶斗は首を横に振った。

「いいえ。相手の数は多いです。攻撃力を上げるより、このまま人

数で攻めた方がいいんです。」

彼の言う事はもつともだ。5人程度とは言え、相手はいまだ詳しい能力が分からない中国系征儀伝だ。しかも自分たちは若輩で、征儀の扱いも長い期間やっているわけではない。それならばこの状況が続けた方が得策と言う物だ。

【主の命令です。全てを無形と化す変革の光を見せよ。エスクード・デ・ブライヤー！】

巨大な光の弾が吐き出され、上空で爆発した。幻獣に降り注ぐ光の筋は、容赦なく幻獣たちにダメージを与えていく。幻獣の数体が消え、二人ほどを戦闘不能に追いやったのだが、慶斗にも限界が来ていた。

「万策尽きたようだな。こちらの番だ。」

幻獣を消し、身体強化を施す中国系征儀伝。一気に突っ込んでくる。

【アルマライズ】

ガキンと金属同士のぶつかる音がする。慶斗が見上げると、類が己の双剣で攻撃を防いでいた。

「朱雀弟よ、まだ戦えるか？」

「はい……」

【アルマライズ】

白い刀を取り出し、次々と襲い掛かる相手に対応する。後ろからも魔力弾、矢などの援護攻撃も降ってくる。だが、その攻撃を掻い潜り、相手も攻撃を仕掛けてきた。

「はあっ！」

「無駄だ！」

素手で再び慶斗の刀を掴み、無理矢理奪い、後方へ投げてしまった。今の慶斗には、二つ目の刀を作る程の魔力は残されていない。

「朱雀弟！」

「余所見をするな！」

類が慶斗のピンチに気をとられ、己の武器までも取られてしまった。前衛二人がいなくなった事で、援護攻撃をしていた二人は丸腰状態になってしまう。玲奈が諦めずに魔力弾を打ち込むのだが、魔力の残量が少ない為か威力に欠けている。このままでは全滅は必須だ…

【ライオ・デ・フェーゴ！】

【ボーラ・デ・メタル】

【アポール・デ・ビオレンシア】

突然だった。中国系征儀伝に向って炎の渦、巨大な金属球が向っていく。突然の攻撃に一人がまともにそれを受けてしまった。

「待たせたな。やっと生徒の誘導が終わったんだ。ついでに腕の立つ奴も連れてきた。」

「Sランク。こんな事で負けるんじゃないやあ兄貴には一生勝てやせんぜい！」

「うむ。今は共闘するべきだ。」

学園から出てきたのは、慶斗たちの担任であるSクラス教師、クラス決定試験で戦った天馬鹿狩と一角獣誠也だった。三人とも装甲征儀は使えない物の、己の魔獣で攻撃を行っていた。

ガクツと膝を付く慶斗。どうやら彼でも限界が来ているらしい。

類が肩を貸してこの場を離れようとする。後ろでは魔力がまだまだ残っている三人組が、疲労気味の中国系征儀伝に攻撃を行っていた。

「天馬さん、一角獣さん。僕の言った呪文を使ってください。」

「うむ。」

装甲征儀の基本概念を伝える慶斗。Sクラス並みの力を持つ彼なら使えるだろうと予想したのだ。

【主の命令だ。お前の力の一部を契約者へと渡せ。】

【主の命令でい。てめえの力を契約者に渡せい。】

【【アルマライズ】】

天馬の右手にパンチンググローブの様な皮革製の手袋が装着された。一角獣の足元には、金属製と思わしきタイヤのついたボードが所謂スケートボードである。

「兄貴、乗ってください！」

一度頷くと、天馬は一角獣のボードに飛び乗る。右拳を構える天馬。そのまま中国系征儀伝に突っ込んで行くのだった。

属性転換

留美奪還の為に廃工場へと向った龍夜と翔太。確実に相手方は消耗しているが、二人としても限界が近付いていた。

「青龍、次で隙を作って一気に内部まで駆け込む。俺に向って上級征儀を放て！」

「先輩！？何を言ってる…」

「いいからやれ！」

龍夜の意味不明な命令に戸惑いながらも、青龍は呪文の詠唱を始めるのだった。これを放てば、彼はほぼ戦闘不能になるまで魔力を失うだろう。だが、留美の安全を確保すると言う目的の為に、やむを得なかった。

【主の命令だ、対象を引き裂け。コルティアグ・デ・トルメンタ！】
無数の風の刃と疾風の針が龍夜の方へと向う。それと同時に龍夜も呪文を詠唱し始めた。

【主の命令により、闇を捨て新たな属性として生まれ変われ。カンヴァル・デ・ティポ！】

突然、龍夜の乗る魔獣にヒビが入る。そして、砕けたのだ。啞然とする翔太。だが、彼は見た。砕けた中から新たな魔獣が生まれているのを。

その魔獣の外見は、全くドラゴンと同じ。しかし、その色は闇色ではなく眩いばかりの銀色。まるで鏡のように周りの光を反射していた。そして、それに跨る龍夜の眼は真紅に染まっている。荒い息を整えながら、現状を確認する龍夜。呪文が成功した事を喜ぶ間もなく、新たな呪文を詠唱した。

【主の命令により、彼の攻撃を増幅させて跳ね返せ。インクレメント・デ・エスピジョン】

銀色のドラゴンと、翔太の放った攻撃の間に巨大な鏡が現れた。それに吸い込まれる刃と針。全て吸い込んだ瞬間、鏡が発光。その

姿を消した。

目の前の光景に目を奪われていた中国系征儀伝だったが、何も害がない事を知り、龍夜達にとどめを刺そうとする。ある者は大幅に向上している身体能力で飛び上がり、ある者は幻獣で攻撃を加えようとする。

「甘いんだよ。」

龍夜の独り言の様な呟き。その言葉の後には、全ての中国系征儀伝の前に、それぞれ一枚ずつ鏡が出現したのだ。波紋が浮かんだと思えば、先程翔太の放った上級征儀が飛び出てくる。

「がああっ！」

ある者は風の刃で切り刻まれ、幻獣は無数の針で貫かれる。突然現れた上級征儀をかわす事はできないのであった。

全ての中国系征儀伝が沈黙する。死んだのかは分からない。相手は未知の征儀伝、死者蘇生の儀式だつてあるかもしれない。だが、今の状態を見る限り、動ける者はいないように見える。

龍夜の眼が元の色に戻り、魔力大量開放が終了する。銀色のドラゴンもその体を闇色に染め上げた。しかし、龍夜の魔力が切れたのだろうか、魔獣が消滅してしまう。上空から自由落下に従って落ちていく龍夜。

「龍夜先輩！」

スピードに特化した翔太の魔獣が龍夜を追う。地面寸前の所でキヤッチに成功した。もし翔太が類から魔獣の訓練を受けていなかったら、龍夜は死んでいただろう。

「すまないな、青龍。俺はここまでだ。留美を助けてやってくれ。お前の体力に期待してる。頼んだ……。」

「絶対に助け出します！」

気絶した龍夜を残し、翔太は単身、廃工場の中へと突入していった。

一人残された龍夜は、征儀伝の自己防衛本能の為か眠っていた。その向こうで人影が動く。黒マントを纏うその姿、中国系征儀伝である。

「この野郎、魔石を壊しやがって…。」

ふと見つけた龍夜の姿。それを見て、中国系征儀伝の男はニヤリと顔を歪ませるように笑った。

「調度いい所にいるじゃねえかよ。コイツの魔石を奪えば良いんだろ？ ついでに殺す！」

脚を怪我しているのか、少々右足を引き摺るように龍夜へと近付いて行く。手にはナイフの様な物を持っていた。龍夜は気付きそうにない。気付いたとしても、戦えるだけの魔力は残っていない。絶体絶命だった…。

「留美ちゃん！どこだ！？」

叫びながら廃工場の中を走る翔太。全ての部屋を風潰しに覗いているのだが、留美はおるか、陽動作戦に使われていた、あの映像の少女の姿も見当たらなかった。

「ここか！？」

一つのドアを開けた瞬間、翔太の腹に重い衝撃が掛かる。廊下を挟んだ壁に叩き付けられてしまう翔太。

「むーっ！」

猿轡を噛まされた留美が叫ぶ。その隣にはあの映像の少女が座らされていた。「くっ…」

痛みに耐えながら翔太が起き上がる。

「たった一人で駆け込んで来るとは、なかなか勇氣あるじゃないか。」

「留美ちゃんを助けないと。慶斗との約束が果せなかった以上、龍夜先輩の頼みだけは守らないとなんだよ。」

【アルマライズ！】

十文字槍を装備する翔太。相手も淡く魔石を発光させている。最初に動きを見せたのは翔太だった。槍を振るい、相手の体を捕らえようとする。だが、相手は必要最小限の動きでそれを避けた。

「相当疲れているようだな。動きにキレがないぞ。」

「うるせえ！」

怒りと焦りに任せて槍を振るい続ける翔太。だが、彼も魔力がほとんど底をついており、体力も続かない。

「そらっ！」

槍を掴み、膝蹴りでそれを折る中国系征儀伝。ついでとばかりに翔太に蹴りを入れた。再び壁に激突してしまう。今度は槍を召還する魔力も、これ以上動く体力も残されていなかった。

「殺す必要はないが、ここで潔く死んでおけ。」

刃物を取り出し、翔太に掴みかかる。胸を一刺しにしようと突き上げた。ギョツと目を瞑る翔太。更に悲鳴を上げる留美…。

「中国系征儀伝の野郎…、裏を掻きやがった！」

「少しは黙りなさい。今回はこちらの情報戦負けだったわ。今私たちにできる事は、出来る限り早く南陽学園へ向うことだけ。暴言吐く暇があつたら、スピードを上げなさい。」

「コレが限界。後数分掛かる。」

「しかし、あの人が連絡をくれなかったら、俺達の到着は完全に遅れていた。今は生徒が校門で防衛線を張っているらしい。」

数人の征儀伝が魔獣に乗り、空中を飛んでいる。目指す目的地は南陽学園。本来は倉本留美の護衛、それが叶わない場合、救出を任務としていた。だが、突然連絡があり、中国系征儀伝の真の目的が南陽学園だと伝えられたのだ。そして今、彼らは魔獣を使って目指

しているのであった。そして、その中には無表情なあの少女、泉可憐の姿もあったのだった…。

属性転換（後書き）

今回龍夜が使った呪文 カンヴァル・デ・ティボ

・自分の属性を無理矢理変える呪文。異常なまでの魔力消費をする事のできる諸刃の剣。今回は鏡属性へと変化させた。

気絶途中の龍夜を襲いかけている中国系征儀伝 魔石が壊されている。

一件落着

「がつ!？」

痛みにより、悲鳴の声を上げたのは翔太ではなく、中国系征儀伝の方だった。男が握っていた刃物は地面に落ちている。右肩には闇色の短刀が刺さっていた。

「一件落着つて所かな。大丈夫かい、青龍君。」

次の瞬間、痛みに悶える中国系征儀伝の体に峰打ちがヒットする。吹き飛ばされた男はそれきり動かなかった。

翔太に手が差し伸ばされる。上を見上げれば、そこには魔力切れに陥ったはずの龍夜の姿があった。

「龍夜先輩……？」

痛みに耐えながらも手を握って立ち上がる翔太。足音がするので見渡すと、数人の人影がテキパキと動いていた。黒い服を着ている。「あれって、中国系……!？」

「いや、違うのさ。よく正体は知らないが、どうやら俺達の味方らしい。」

サラッと前髪をよける龍夜。なぜか性格が違うように見える。

「そんな事より、留美たちを助けた方が良くないんじゃないかな？」

その言葉でハツとする翔太。龍夜は映像の少女を、翔太は留美を拘束する縄を解いた。

「龍夜お兄様、翔太さん。ありがとうございます!」

「留美、無事で何よりだ。怪我はないか？」

「はい。」

三人で話していると、黒い服の一人が近付いてきた。

「お久しぶりね。私の薬のお陰で皆助かったみたいだし。」

そう言いながら、目深に被ったフードを外す。

「あなたでしたか……」

そこにいたのは、夏休み前に可憐と同時期に学園を去った保険医だったのだ。そこで翔太は納得がいった。きつと、龍夜はこの元保険医の作った薬を飲んだに違いない。以前翔太や慶斗が飲んだ時も魔力が短時間で回復する代わりに、性格が変わってしまった。龍夜の今の性格も、薬の副作用であると予測したのだ。

「さて、あなた達を学園まで送り届けましょう。その子は私たちが保護するわ。倉本令嬢は丁重に屋敷まで。」

龍夜の肩を借りて歩く少女。見た目は留美と似ているのだが、目隠しを外せば全くの他人であった。取り押さえられた中国系征儀伝の男が連行されていく。

「あ、龍夜お兄様……。私、魔石をとられたままなの。」

男のポケットを探ると、三つの魔石が出てきた。緑が一つに白が二つ。緑の魔石はこの男の物だろう。そして二つは留美と少女の物だ。

「魔石の持ち主なら分かるだろう。留美、一つ握ってみる。」

留美が言われた通りに、一つの魔石を握る。しかし、首を横に振って手放した。もう一つを握ると、納得したように頷く。

「私の魔石はこっち。はい、コレはあなたなのでしょう？」

留美が少女に魔石を手渡す。

「ありがとう……」

受け取った魔石をポケットに押し込んだ少女。征儀伝の一人に連れられて留美と共に出て行く。

「龍夜お兄様、慶斗お兄様はどこ？」

「ああ、アイツは学園で戦ってるのさ。俺が指示しておいた。留美の誘拐は囷、本命は南陽学園の襲撃にあるってな。俺に掛ければ計画なんて簡単に……」

種明かしをする龍夜だったが、突然の笑い声に遮られてしまった。「なんだい？」

「なんでもねえよ。ただお前のナルシスト振りに呆れたただけだ。一

ついい事を教えてやるよ。この誘拐事件は、“囧の囧”だ。」

その言葉に、場にいた全員が怪訝な顔をした。

「まだ分からないのかよ？確かに本命は南陽学園の襲撃だ。だがな、普通校門から堂々と攻め込むか？違うんだよ。お前の弟だろ？学園に残って戦ってるのって？そいつも囧を掴まされてるんだよ。残念だったな！」

次の瞬間、緑色の魔石が壊れた。しかし、今回は魔力の暴走がなかったはず。そして、男自身もピンピンしていた。

「どう言う事だ…？」

いぶかしむ龍夜。

「早く、学園に向ったチームに連絡を！」

誰かが叫んだ。男はニヤニヤしながら連れ出されるのだった…。

「ふん！はっ！」

学園校門前では、新たに参加した三人が、弱り始めた中国系征儀伝に攻撃をしている。右手のグローブの破壊力は中国系征儀伝に匹敵し、壁でもどこでも走る一角獣のスケートボードは、どこまでもそれを追っている。二人の弱点をカバーし合う事で、確実に中国系征儀伝を仕留めていた。

「やっぱり、あの二人のコンビネーションはすごいですね…！」

魔力切れに近い状態の為、安全な場所で戦いを見ている慶斗。

「しかし、大丈夫なのか？あいつらは今日始めて装甲征儀アルマライズを使ったはずだが？」

類の考えは尤もであり、二人のスピードと破壊力は落ちてきている。残る敵はあと二人。Sランク教師も魔獣で応戦しているのだが、命中率はあまりよくない。

「兄貴、すいやせん。かなり魔力が少なくなってますなあ。」

「仕方ない。これも俺達の修行が足りない結果だ。」

スピードで勝ってきた中国系征儀伝は、力を盛り返し、二方向から天馬達を狙う。グローブを一つしか装備しない天馬には、同時に襲い来る二人の敵を裁くことができない。

「兄貴、飛んでくだせえ。これじゃあ、やられらあ。」

「うむ。」

タイミングを合わせて二人がボードから飛ぶ。中国系征儀伝の刃物が金属でできたボードを切り刻む。

【「エクスジェンシア」】

空中で魔獣を召還。それに飛び乗る事で地面との接触を避けるのだった。だが、二人にはそこまで魔力が残されていない。一角獣が防御を、天馬が攻撃をする事で一進一退の攻防が続ける。

上空から中国系征儀伝に向って電撃の刃が降り注ぐ。突然の攻撃に慌てるが、どうにか体勢を整えた。

「誰だ!?!」

「中国系征儀伝、そこまで。」

空中に浮遊する、征儀三重装甲を纏った姿があった…。

「可憐!?!」

慶斗の言葉を見無視して、可憐は中国系征儀伝を見据える。両手のガントレットを構えた。それに合わせるかのように、二人の中国系征儀伝を囲む様に、三体の魔獣が並んだ。総勢3体の空戦型魔獣。地上にも二人の征儀伝が降りてきた。

「この学園長から連絡を受けた。ここまで追い詰めてくれた事を感謝する。後は此方が引き受けた。」

それだけ言っ、その征儀伝は今までに倒した中国系征儀伝の確保に向かっていった。

被害状況

【ラティゴ・デ・イーロ】

ガントレットから伸ばされた電磁鞭が、意志を持っているかの様に中国系征儀伝に襲い掛かる。一人は逃がしてしまっただが、もう一人を拘束する事には成功し、電流を流した。ガクガクツと痙攣を起こして動かなくなる。それを地上に落とし、最後の一人を仕留めに掛かった。

【ラティゴ・デ・イーロ】

再び鞭が振るわれる。流石に技を見切られたか、今度は簡単に避けられてしまった。

「追い詰めて。」

可憐の指示に、ほかの征儀伝が魔獣を駆使して、中国系征儀伝の行動範囲を狭めていく。

可憐の眼が赤く染まる。魔力を大量に開放しているのだ。それにより、高速で動き回り始める。目に止まらぬ速さで動き、腹に膝蹴り、首にガントレットの側面で手刀を入れる。打たれる度に弱まっていく中国系征儀伝。最後の一撃で完全に意識を手放したようだ。地上へ真つ逆さまに落ちていく。

【エクスジェンシア】

だが、下に待機していた征儀伝が、己の魔獣でそれを受け止めた。「まったく、やりすぎなんだよ。泉君……。」

「可憐！」

地上に降りてきた可憐が装甲征儀を解除する。そしてそのまま、その場に座り込んでしまった。

「可憐、大丈夫ですか？」

「待つて。」

着ているマントの内側から薬のビンを取り出し、大量の錠剤を飲んだ。効果は直ぐに現れたようで、直ぐに立ち上がる。

「朱雀慶斗。怪我は無い？」

「はい。僕は大丈夫です。それより、戻ってきてくれたんですね。僕、嬉しいですよ！」

しかし、可憐は浮かない顔をした。彼を無視して中国系征儀伝の確保に向う。

「適切な対処をしてくれてありがとう。朱雀君。…少し説明が必要かな。俺達の事や、泉君の事も。直ぐに君のお兄さんを連れて仲間が到着するはずだから、その時に詳しく説明しよう。」

征儀伝の一人が笑いかけながらやって来る。その時、携帯に着信が入ったらしい。

「こちらは殲滅完了。朱雀龍夜の到着を…待てよ！今何て言った！？」

その言葉に場にいる全員が反応する。やがて電話を切ると、切羽詰った声で叫んだ。

「学園の中に中国系征儀伝がいる！これは困だ！」

訳の分からぬまま学園内に戻る一同。生徒や教師が避難しているはずの模擬場に向った。彼らが見た光景、それは表で戦った人数よりも多い中国系征儀伝の一方的な攻撃だった。ほぼ全員が気絶しており、その中には教師の姿もある。きっと、強化された身体能力で襲ったのだろう。

【エクスジェンシア】

【アルマライズ】

直ぐに状況を理解したらしい征儀伝たちが、魔獣や装甲を召還する。だが、

「動くな。こいつの命が惜しければな。」

気絶した一人の生徒の首に刃物を当て、動かないように命令したのだ。これには誰も対処できそうに無く、相手の次の動きを警戒した。

「全員魔獣と武器を捨てる。そして出口を開けるんだ。」

言う通りに動く全員。人質をとったまま、中国系征儀伝たちは堂々と学園を去っていくのだった。

「申し訳ない、“遺跡の番人”。全て我々の失態でした。」

学園長に頭を下げる謎の征儀伝たち。その中には龍夜と翔太を連れ帰った、元保険医の姿もあった。

「過ぎた事を悔いても話は前には進まない。それで、被害状況は？」その質問に対して、Sランク教師が口を開いた。

「施設そのものに被害は特にありません。ただ、50人以上の魔石が奪われました。」

生徒の魔石を奪う。これが中国系征儀伝の目的だったようだ。留美の誘拐予告を始め、学園を真正面から襲撃する一連の行動は、全て囷。目的の障害になる人物を引きつける為の罠でしかなかった。

「これからどうしますか、学園長。」

「もし、向こうが返還の条件を持っているとしたら、それを飲むしかないだろう。生徒の命が掛かっているんだからな。」

手元にある手紙を見る学園長。先程人質にされていた生徒が発見され、直ぐに保護された。だが、中国系征儀伝から渡されたらしい手紙を握っていたのだ。その内容は、“一週間後学園に再び邪魔をする。その際、今日奪った魔石を遺跡と朱雀兄弟の魔石を交換せよ。断る場合、奪った全ての魔石を破壊する”であった。即ち、50人以上の生徒の命を助けたければ、慶斗と龍夜の魔石、そして“遺跡”なる物を渡せと言うのだ。

「僕と、兄いの魔石がどうして条件なんですか？」

少々震えながら尋ねる慶斗。龍夜や学園長、謎の征儀伝たちは黙っている。

「いい加減話すべきだろう。中国系征儀伝の狙い、そして彼らの事も…。龍夜君、君の口からの方がいいと思う。私のようにずっとこの部屋に閉じ籠っていた老いばれより、自ら最前線で戦っていた君の方が、信用性に足るはずだ。」

「征儀って言うのは、元々の名前の短縮形なんだ。“世界を征服する儀式を行う力”、略して征儀。だから、中国系征儀伝の世界を終わらせると言う最終目的もあながち間違いじゃない。いや、可能だ。」

既に薬の副作用は切れているらしい。龍夜がいつもの調子で淡々と話し出した。日常的に使っていた“征儀”と言う単語。かなり恐ろしい意味が含まれていたのだった。

「古来、征儀の種類は二つ。スペイン系とギリシア系が別れる前の流派、そして中国系だ。歴史的に見れば、中国系の方が古いことが確認されている。そして、その後、スペイン系とギリシア系が生まれた。」

ここで一度話を切る龍夜。征儀の歴史的背景を語っているが、あまりピンと来ない慶斗たち。それを見てから龍夜は話を続けるのだった。

「この分裂した三つの流派が集まった時、世界をリセットできる力が手に入るらしい。古い文献から読み取った為、これが何かを比喻しているのか、本当に世界が終わるのかは断定できない。だが、その儀式を行うのに必要な物は分かっている。全流派の征儀伝の“魔石”、そして“遺跡”だ。因みにスペイン系、ギリシア系は元々一つの流派の為、魔石は兄弟の物と定められている。これが中国系征儀伝が俺と慶斗の魔石を狙う理由だ。俺が知っているのはコレくらい。後の遺跡については、遺跡の番人直々に話してもらおうと思う。学園長…。」

学園長は一度大きく頷き、立ち上がった。

「私が遺跡の番人と呼ばれる由縁、それは私が学園長室リムにいる事に
関係がある。十数年前、この学校が建てられる前に遺跡が見つかった。当時私は調査員としてこの遺跡を発掘していたんだ。同時に文献が発見され、解読を進めた。その内容が魔石と遺跡の関係性についてだった。遺跡には棺が置かれていた。文献と共に調査されることとなり、私を含めたメンバーが棺を運ぼうと試みた。だが、その時に蓋が外れ、青の魔石を持った征儀伝が現れたのだ。」

“青の魔石”と言う言葉に不信感を募らせる。スペイン系が黒、ギリシア系が白、中国系が緑のはず。それなら、なぜ青の魔石が出てくるのだろうか。

「青の魔石については後で話をする。その征儀伝は棺が開かれた瞬間、外へと出て行った。文献を解読した所、あの棺は中国系征儀伝の始祖を封印していたものだったらしい。」

更に話される事を要約すれば、中国系征儀伝の始祖とギリシア・スペイン系の始祖が、世界崩壊の儀式（呪文）を見つけ出した時、どちらかの魔石を破壊する事でその呪文自体を封印することに決めたらしい。だが、決着はつかず、中国系が不意を突かれて封印される事で、戦いが終わったとか。

「中国系が復活した時の事を考え、スペイン・ギリシア系の始祖が残した文献を漁った。その内の一つに始祖の力を持って遺跡を守る呪文があったのだ。私は迷わずそれを使い、中国系征儀伝を倒すまで遺跡の番人となる事を誓った。年をとらないのは、その呪文の副作用と言った所だ。即ち、この南陽学園は、遺跡を守る砦。その砦で育てられる生徒は遺跡を守る戦士、と言う訳なんだよ。」

自らの過去を話し終えた学園長。深く椅子に腰掛け直した。その視線の先には、いつかの隠しドアがある。遺跡へと続く道へ入るためのドアが…。

被害状況（後書き）

さて、あまり重要に見えなかった謎が解明されました。

・不老の学園長 遺跡の番人になる為の副作用

次回もバンバン伏線を回収します！

明かされる可憐の真実

「学園長、青の魔石の持ち主が中国系征儀伝の始祖だと言う事は理解できました。ですが、わからないんです。今の中国系征儀伝の魔石は緑色である理由が…」

慶斗がおずおずと手を挙げながら聞いてくる。

「それは此方から話をした方が良いでしょう。」

話を切り出したのは謎の征儀伝の一人。フードを外すと、ほかの全員もフードを外すのだった。

「まずは自己紹介から。我々は、中国系征儀伝が起こす事件を追っている秘密組織のメンバーです。正式な名称は無いのですが、存在を知っている人物からは“対中チーム”などと呼ばれています。規則の為、メンバーの名前を教える事は出来なのですが、他言はしないようにお願いしますね。」

一度茶目つ気たつぷりに笑った男は、話を続けた。

「では。中国系征儀伝について我々が調査を終えている所かつ、許容されている所までお話を。と言っても、この際ですから全て包み隠さずお話ししましょう。まずは魔石の色から。これは力の受け渡しが出来ることが大きな理由。詳しく説明すれば、訓練をしなくても中国系の力が使える様になると言う事。例え、それが本来力を持たないただの人間であつても…」

啞然とする慶斗たち。普通の人間を征儀伝に変えるなんて、ありえないのだ。

「驚くのは尤も。ですが、これには代償を払っているのです。それは、中国系の始祖の魔力。即ち、魔力の分配。直接体に始祖の魔力を注ぎ込むことにより、中国系征儀伝としての能力を無理矢理覚醒させる。」

ここで、あの緑色の液体を思い出した。あれを飲んだ瞬間、スぺイン系の征儀伝が中国系製儀伝の能力を発現させたのだ。あの液体がそれなら、納得がいく。

「どうやら何か覚えがあるようですね。きっとそれで正しいですよ。しかし、魔力を大量に分け与えた為、青い魔石が色褪^あせ、緑へと変化した。我々はこの様に予測している。こうやって急速に仲間を増やした中国系征儀伝は、先程の説明の通りの目的を遂行しようとしている。逃げたり、裏切りは出来ない。なぜなら、与えられた魔力の出し入れは自由自在。もし裏切られたのが知れば、始祖が魔力を強制返還します。元々ただの人間だったなら、力を失うだけですが、もし、他の流派の征儀伝だった場合、魔力の暴走が起こり、魔石が耐えられなくなる。そして、最後には爆発する。この中でその光景を見た人がいるはずですが？」

龍夜、慶斗、風沙、玲奈の四人が気付く。あの強盗犯は最後、異常なまでの光を魔石から発して死んだのだ。

「今日学園を襲ってきたのは、元々人間だった者が多いようです。ただ今護送中ですが、護送先に着くまでには力を抜かれているでしょう。」

「抜かれた力は何処に？」

「勿論、中国系の始祖の所まで。その力は新たな中国系征儀伝を生むのに使われる。即ち、永遠のサイクルを繰り返すのです。」

手駒の数には困らないことを示唆しているこの行動。このままでは向こう側がかなり有利だ。

「とりあえず今出来ることは、中国系征儀伝を片っ端から捕まえ、始祖の居場所を聞き出す事。是位しか出来ませんね。」

「一ヶ月後、その日に始祖が現れると言う事はないの？」

「それはないでしょう。なぜなら、“世界を終わらせて何がしたいのか”は理解しがたいですが、自分がわざわざ出向く危険を冒さないと言うのが我々の予想。きっと、自分の次に力の強い者を送ってくるでしょうね。」

黙り込む全員。完全に中国系征儀伝が有利である。捕まえても、殺したとしても、次から次へと沸いて出てくる中国系征儀伝。始祖の居場所はわからず、期限は一ヶ月しか残されていない。相手は50人以上もの命を人質に撮っている状態。手出しが出来ないのが現状だった。

「ねえ。」

沈黙が続く中、風沙が声を上げた。

「どうして黙ってたの、可憐？どうして中国系と戦ってるって言うて、自分の無実を証明しなかったの？どうして急に学園を去ったの？コスプレの衣装が可憐の趣味じゃなかったの？」

少し泣きそうな風沙。しかし、可憐は無表情。感情が無いかと思われるほど冷淡に見えた。

「私が話をする番かしら。」

名乗り出てきたのは、元保険医だった。ポケットから一つの液体ビンを取り出す。

「これが何かは、飲んだ事がある人なら分かるわよね？」

その薬は、魔力を急速に回復させる代わりに、少々性格がおかしくなると言う効果を持つ謎の薬だ。

「それは分かりますけど…」

「泉さん、あなたの薬を見せてあげて。」

無言で錠剤のビンを取り出した。それを受け取ると、皆に見せる様にする。

「この錠剤は、あなた達が飲んだ液薬の超強化版。魔力が回復する所か、魔力保持量を底上げする効果もあるの。だけどね…、この薬を一度飲むと、自我を失うのよ。暴走するって言う意味合いじゃないって、感情が消される。泉さんみたいに…」

自分の話をされてもなお、無表情な可憐。

「なんで…」

慶斗がふと呟く。人を避けて、可憐の前に立った。

「なんで、なんでそんな薬を飲むんですか！？自分の感情を犠牲にしてまで、可憐は何を望むんですか！」

元保険医が掴み掛かる慶斗を離そうとする。だが、スッと腕が伸ばされた。

「いい、私が話す。」

ポケットから新たなビンを取り出すと、一錠だけ飲んだ。突然苦しみだす可憐。慶斗が慌てて抱きかかえた。呼吸も荒く、聞こえる動悸も激しい。だが、時間が経つに連れて、少しずつ安定していくのだった。

「慶斗さん。お久しぶり。」

はつと顔を上げる慶斗。感情が込められた声。可憐の顔を見れば、笑っていた。

「可憐…？」

「そうだよ。本当の私。この状態で会うのは二回目だよね？」

周囲の人間があまりの変わり様に驚いている。あそこまで無表情を貫き通していたはずの可憐が笑ったのだ。これには元保険医の話も信じるしかないだろう。

「勝手に学園を辞めてごめんね。でも上からの指示は絶対だったの。私の行動が、私自身を中国系征儀伝だと勘違いさせてしまったのが原因。慶斗さんが無実を証明しようとしてくれた時は嬉しかった。でもね、私に真実を語る権利はないし、語ってしまったら情報が漏れてしまう可能性もあったの。だから…」

今語られる真実。ここに来てやっと、可憐の無実が証明された。

「可憐。もうあんな薬なんか飲むの止めてください。僕が助けます。一緒に戦います。だから、一人で頑張ろうなんて…」

半泣きの慶斗が、涙ながらに訴える。しかし、可憐は無言で首を

横に振るのだった。彼女の眼にも涙が浮かんでいる…

「ごめんね。私には薬を止められない。私の魔石、ほら、私って薬がないとこんなに弱いから…」

生徒手帳のカードに納められていた可憐の魔石、その色は漆黒の輝きを失い、色褪せていた。暗緑色となった魔石からは、魔力の欠片も伺えそうに無い。

「それに、薬には依存性もあってね。私はこれから一生、あの薬を飲まなくちゃいけない運命なんだ。あ、慶斗さん達が飲んだのは、効能が薄められてるから、依存性はゼロだから大丈夫。心配しないで。」

慶斗は泣くしかなかった。可憐に何も出来ない自分の不概無さ、自分自身を省みず、他人の事を心配する可憐の優しさ。何もかもが慶斗を悲しくさせた。

「泉君。そろそろ時間だ。」

「はい。分かりました。」

慶斗から離れていく可憐。元保険医から薬のビンを受け取り、錠剤を口に含んだ。

「可憐、ここに帰ってきてくれる？」

「私には決定権が無い。」

無表情な可憐が、振り向き様に答えた。

「何とか上とも掛け合ってみるよ。ただ、期待はしないでくれたまえ。」

明かされる可憐の真実（後書き）

・中国系征儀伝のまとめ

- 1 異常な身体能力の高さ
- 2 幻獣を召喚できる
- 3 魔石は緑色（始祖は青）
- 4 普通の人間でも薬を使えば一瞬にして中国系征儀伝になれる
- 5 元々征儀伝の場合、幻獣は魔獣のお化けの様な感じ
- 6 始祖は力の出し入れが可能（いくらでも手下を増やす事ができる）
- 7 純粋な中国系征儀伝は始祖一人のみ

・泉可憐について

- 1 中国征儀伝ではなく、本当にただのスペイン系征儀伝
- 2 ただし、特殊な薬を飲まなければ弱い
- 3 その薬によって感情が失われている
- 4 その薬の効果を打ち消す薬もあるが、それを服用すると激痛に苦しむ
- 5 征儀三重装甲などは、薬のおかげ
- 6 とある組織に属している

さてさて、泉可憐は中国系征儀伝ではありませんでした。中国系征儀伝が活動が始める中、これからどう話が進んでいくのでしょうか

：

記憶喪失の少女

可憐たちが去っていった日から、一週間程が経つ。むこうからは連絡は入ってこない。そして、中国系征儀伝の予告した日まで後数週間しか残されていない。だが、何も解決策は見つからないのであった。

あの学園襲撃事件から、魔石を奪われた生徒は学園に来ていない。征儀が扱えないのは勿論だが、精神的ショックが大きく、カウンセラーを必要とする者もいるほどだ。命と同等の価値を持つ魔石を取り上げられ、飄々としていられる方がおかしいだろう。

あの時最前線で戦っていたSランク組や、天馬達は魔石を奪われていないので、普通に学園で過ごしていた。だが、交換条件の一つに龍夜と慶斗の魔石も含まれている。事件を嗅ぎ付けたテレビ局が早速特集番組を組んでいた。

“南陽学園の生徒から魔石を奪い、あの朱雀兄弟の魔石と交換する条件を出してきたそうですか…”

“噂ではSランク生徒以外の魔石が全て取り上げられたとか。”

“私から見れば、朱雀兄弟は魔石を渡すべきでしょう。たった二つの魔石と大人数の命が交換できるんですから。”

“では、あなたは二人に死ねと仰ってるのですか？”

“死ねとは物騒ですね。まだ中国系征儀伝が二人の魔石を壊すと決まった訳ではありません。ただ単に神童兄弟の能力を封じたいだけかもしれませんよ。中国系征儀伝にとっても厄介な存在らしいですからね。”

テレビでは色々な事が言われているが、やはり慶斗たちの魔石を犠牲にしろと言う声が多かった。二人の所にも、魔石を奪われた生徒からの親から手紙が届く様になっていたのだった。

「僕は、どうすれば良いのでしょうか…」

既に自分の魔石を渡す方向へと傾いている慶斗。

「慶斗、あまり気にするな。時間はまだある。それまでに考えれば良いのさ。奪われた魔石も、俺達の魔石も、そしてあの遺跡も全て守る方法をな。」

幸か不幸か、遺跡の存在は世間には知られていない。当初、“遺跡を壊す”と言う案が出たのだが、学園長に即却下されてしまった。遺跡は、中国系征儀伝と同じく、謎だらけの存在だ。もし壊して全征儀伝が死んでしまう可能性も否めないのだ。遺跡を壊した後の事は、文献にも載っていないと言う。

途方に暮れる慶斗だが、そこへSランク教師がやって来た。

「朱雀、学園長が呼んでいたぞ。」

「僕ですか？」

「二人共だ。」

急いで学園長室へと向う。いつもの如くデスクの向こうに座っていた彼。

「やあ、来たね。ちょっとしたニュースが届いたんだ。対中チームからだ。」

“対中チーム”と言う言葉にいち早く反応したのは慶斗だった。対中チームと言えば、可憐が所属するチーム。そこから知らせが届いたと言う事は…

「可憐が学園に戻ってくるんですか!？」

やや興奮気味に慶斗が聞く。学園長や龍夜に対して無実が証明された今、彼女が戻って来ても不思議ではないのだ。

「いや。すまないが、その逆だ。可憐は学園には戻っては来ない。理由は、この学園の生徒や教師が、泉可憐を中国系征儀伝だと間違った認識をしている事だ。」

「何故ですか？可憐の無実が証明されているはずです。それなら、それを学園に…」

「そうはいかない。対中チームは極秘中の極秘。可憐の無実を証明すれば、対中チームの存在が露呈する可能性もある。以上の理由で、

泉可憐は復学しないと言う決定に至ったんだ。」

「そんな…」

顔を俯ける慶斗。確かに、社会の混乱を招かない為に、対中チームの存在を秘匿する必要がある。中国系征儀伝の存在だけで、世の中が騒然としているのだ。秘匿するのは無理もないだろう。

「すまない、慶斗。俺が思わずあんな事口走ったばかりに…」

謝る龍夜。大衆の前で可憐に疑いをかけた、あの出来事が今を作っていると言っても過言ではない。

「いいんです。兄が謝ることなんて、何もないんです。」

「確かに泉可憐は戻ってこない。だが、まだ二ユースはある。龍夜君、彼女を覚えているかね？」

「彼女、ですか？」

思案をめぐらせる龍夜。玲奈の事を指すのなら、名前呼ぶはずだ。龍夜と学園長が共通して知っている女子もおのずと限られてくる。

やがて、見当がついたのだろうか、“ああ”と言う声を出した。

「もしかして、留美を救出した時に見つけた、あの少女ですか？」

「そうだ。その子だが、どうやら記憶喪失に陥っているらしい。捜索願も出されていない。もしかしたら、孤児院からあの陽動作戦の為に連れ去られたのかもしれない。」

「で、その子と俺に何の関係が？」

「魔石を持っている事から、征儀伝だとは推測できる。対中チームからの要望で、この学園に預かってほしいと連絡が来ている。向こうでは食事以外ろくな世話も出来ず、征儀伝の力に触れる機会が多い此方なら、記憶も戻りやすいだろうと言う配慮だ。そこでだ、彼女にルームメイトを探しておいてくれ。一人では寂しいだろう。」

「そう言う事なら、玲奈に頼んでみます。」

「よろしく頼むぞ。今日の午後には到着する予定だ。明日にはクラスアップ試験を行う。それで編入するクラスを決めようじゃないか。たしか、慶斗君と同年代だと聞いている。もしSクラスに入ったら、仲良くしてくれ。」

「はい。」

その時、学園長のデスクの電話が鳴る。それを取って、一言二言。電話はそれだけで終わった。

「どうやら着いたらしい。迎えにいつてくれ。私は番人として、この部屋からあまり出てはいけないからな…」

この前の戦闘で少々破壊された校門前だが、今は綺麗になっている。そこに黒塗りの車が止まっていた。車の脇に立っているのは、白い服を着た少女と、この前に現れた対中チームのメンバーの一人だった。

「やあ、この前ぶり。」

「お久しぶりです。…可憐はいないみたいですな」

「彼女も忙しいんだ。あ、だからって俺が暇人って訳じゃないから、その所よろしく。これも仕事の一環だからな。じゃ、引渡しは完了。遺跡の番人に宜しく言っておいてくれ。じゃあな。」

挨拶もそこそこに、車に乗って去って行ってしまった。

「えっと、僕とは初めましてかな。朱雀慶斗って言います。よろしくお願いします。」

「あ、え…、夢^{ゆめ}って言います。ごめんなさい、名字は忘れてて…」

「ゆつくり思い出せばいいんだよ。さあ、行きましょう。学園長がお待ちかねです。」

荷物も何も持っていない少女を連れて、学園長室へと戻る三人。

「お、来たな。玲奈には私から連絡しておいたぞ。」

「はじめまして。」

「は、はじめまして…」

おずおずと自己紹介をする夢。対中チームでも話は聞かされていたのか、南陽学園に編入することには乗り気だった。

「さて、君を一人にして寮に置くのも、私としては気が引ける。よかったら、私の孫の玲奈と同室でもいいかな？」

玲奈はニコニコとしている。この場に風沙がないのも、夢にコ
スプレをさせる危険性がある為だろうか？

「あ、あの……」

申し訳無さそうに手を挙げる夢。皆が注目する中、言葉を搾り出
すようにしゃべりだした。

「も、もし皆さんが良ければ……私、慶斗さんと同じ部屋がいいで
す……」

着せ替え人形

「なんだか、こんな風に暖かい気持ちで寝れるの、久しぶりな気がするなあ。」

甘い匂いが慶斗の鼻をくすぐる。腕が柔らかく彼の胸の辺りに回された。

「夢…？これはいくらなんでもダメな気がするのですが…。」

「私、怖いのに。」

ギョツと回される腕の力が強まる。慶斗も観念したのか、言葉で抵抗するのを止めて、寝る事を意識するのだった…。

「も、もし皆さんが良ければ、私、慶斗さんと一緒に部屋がいいです。」

突然の同棲宣言に、全員が一瞬硬直するが、すぐに冷静さを取り繕うのだった。

「まあ、慶斗なら大丈夫だろ。」

「そ、そうよね。前例もある訳だし。」

「私は書類の準備を…」

だれも慶斗の話を聴こうとする者はいなかった。

「僕は、また兄いの所から離れなくてはいけないのですか？こんな現実、酷すぎます。生き地獄です！」

心からの嘆きを訴えるが、時既に遅し。学園長は書類を書き始めていたし、玲奈に至っては、“お爺ちゃん、私は龍夜の部屋に住んでいい？”などと聞き始める始末である。

「僕に味方はいないのですか…？」

悲しみに暮れる慶斗。

「よし。これで書類の準備は出来た。ああ、慶斗君。泉君が使っていた生徒手帳は持っているかい？できれば、それをその子に譲って

欲しい。』

渋々ながらも、制服の内ポケットから生徒手帳を取り出す。かつて、可憐が使っていた物、本当ならば、慶斗は誰にも渡したくはないのだ。だが、夢が喜びながら手を差し出しているのを見て、何となく幼少期の留美を思い出してしまった。それゆえ、生徒手帳を差し出してしまふ。

『ありがとう、慶斗さん。』

早速魔石を取り出す夢。だが、慶斗は見てしまった。夢の魔石を斜めに切る様に、雷の様なヒビが入っていたのだ。

『夢さん。それって…』

『これ？私全然記憶がないから覚えてないんだ。気が付いたら、もうこんな風になってたの。』

中国系征儀伝の仕業にほぼ間違いない。学園長室にいる全員がそう思った。命と同じ位大切な魔石、それにヒビが入っているのは、命の危険と隣り合わせと言う事。それなのに屈託ない笑みを浮かべている夢。

『夢さん…。』

魔石の重要さを覚えているのかは分からないが、夢は心から笑っているように見えた。それが慶斗にはとても辛く思えてしまふ。心の中で、絶対に守ってみせると固く誓うのだった。

「けー君、おはよう！」

いつの間にか寝ていたらしい。慶斗は夢の声で起こされた。元々は可憐が使っていたこの部屋。今は慶斗と夢が使っている。どうやら夢は基本的に明るい性格のようで、自分の事を呼び捨てで呼ぶ様に言い、自らも慶斗の事を“けー君”と呼ぶことにした。

「おはようございます。夢。」

「朝ごはん作るから、少しゆっくりしてて良いよー！」

リビングへ向うと、いそいそと料理を作る夢が。先程は寝ぼけていて気付かなかったのだが、ヘアゴムでツインテを作っている。「聞いたんだ。幼馴染の子と似てるんでしょ？それなら、私はツインテールかなあって思ってた。はい、冷めない内に召し上がれ！」運ばれてくる朝食を食べる。自分から率先して作るうとする事から予測はされていたが、かなり腕はいいようだ。慶斗も絶賛していたし、夢も素直に喜んでいる。

学園に着き、今日予定されているクラスアップ試験の為に、夢を学園長室まで送って行く慶斗。

「後はよろしく願います。夢、頑張ってください。」

だが、学園長に呼び止められ、学園の案内をして欲しいと頼まれるのだった。その代わりに、Sランクに無条件で存続する事を許された。元々、慶斗の実力なら試験の結果はほとんど知れたものなのだが…。

「一旦Sクラスに居てくれ。スケジュールは予め君の担任に伝える。ある。」

「はい。分かりました。」

教室には他の二人が揃っており、二人の到着を待っていた。

「あ、来た来た。」

「おはようございます。」

挨拶をして入室する慶斗に、その後ろから慶斗の制服をチョコンと掴みながら着いて来る夢。どうやら二人は夢の存在を聞いているらしく、別に驚いた素振りも見せなかった。

「おっす、慶斗。あ、俺の事覚えてる？」

「え、あ…。はい。あの時はありがとうございました。」

ペコッとお辞儀をする夢。

「可愛いなあ、慶斗っち、この頂戴！」

どうやら、凧沙は凧沙で夢を新たなコスプレの人形に認定したらしい。“駄目です！”と慌てて止める慶斗に、頭にはてなマークを

出している夢。

「ええ。なんで？この子なら、チャイナ服でも婦人警官でも何でも着こなせるんだから！それに、二代目メイド服の称号だって獲得できる領域だよ！」

騒ぎ立てる風沙。どうしても彼女を着せ替え人形にしないと気が済まないらしい。

「あ、あの。それをしたらけー君は喜ぶの…？」

「勿論だよ！慶斗っちなんか、メイド萌えなんだから。可憐にベタ惚れなんだよ！」

“あう、そんな事は絶対ありません！”と顔を真っ赤にして叫ぶ慶斗だが、風沙も夢も聞く耳を持っていなかった。

「わ、私やってみたい。けー君が喜ぶなら、やってみる！」

「決まりね！こっちこっち。」

慶斗の制止も利かず、早々と教室を後にした二人。ペタリと座り込んでしまった慶斗。因みに夏休み明けから普通に男子用の制服を着ている。どうやら何とか取り返したらしい。

「慶斗、この場合は俺はどんな言葉をかければいい？」

「ほっておいてください…」

「お待ちせー！」

意気揚々と入ってきた風沙。それに連れられて夢も入ってくる。

「可憐用のメイド服が少し大きくてね。代わりにこっちを着てもらったんだ！」

少し恥ずかしげに入ってくる夢。彼女は赤い袴に白い着物、所謂巫女さんのスタイルだった。

「直ぐに夢ちゃん用のメイド服も仕立てるからね。慶斗っち、今はこれで我慢してね。でも、ツインテと巫女服の併せ技！これは今世紀最大の話題になる事間違いないし！ほらほら、夢たん。教えた言葉、慶斗っちに言ったら？」

もじもじしている夢だが、なにやら風沙に耳元で吹き込まれる。

すると、下駄をカツカツと鳴らしながらやって来た。

「い、いい子にしないと、呪っちゃうよ！けー君…」

慶斗の隣で翔太が撃沈した。

「けー君、似合ってる…？」

“は、はい！よく似合ってると思いますです。”と、少々おかしな文法を使う慶斗。夢も“よかった”と言ってピヨコピヨコ嬉しそうにしていた。

「これからも、けー君が喜んでくれる様に頑張るね！」

「ぼ、僕は特に喜んで…」

「えっ！？喜んでくれないの…？」

喜んでます。と言っしかない慶斗だった。

「よし、これからアップ試験に行くぞ？…椎名、またお前か…」

「慶斗っちの為ですよ。」

泣きたいと思った慶斗だった…。

無詠唱呪文の征儀伝

模擬場へとやってくるSクラスのメンバー。

「椎名と青龍は、今回Aクラスとだ。気を抜くな。今回は天馬と一角獣の二人が出ている。コンビネーションは抜群だが、個人の戦闘力も高い事を忘れるな。まだSクラスの定員に幅があるから、クラスを落とされる心配はほとんどない。だが、Aクラスを甘く見るな？」

「分かりました。」

「行つてきまゝす」

翔太と風沙は、自分の戦闘が行われるブロックへと去って行った。二人が行くのを確認してから、教師が慶斗達を振り向く。

「学園長から話は聞いている。朱雀は夢の面倒を見ること。夢、お前はBクラスとだ。その結果を見て次の対戦相手を決める。」

「はい。」

本来なら、名字を呼び捨てにするのがSクラス教師なのだが、記憶喪失の為にそれを忘れている夢なので、教師も名前を呼ぶ以外なかったのだった。少々気恥ずかしさがあつたのだろうか、教師は直ぐに去ってしまう。

「けー君。今日は一日宜しくお願いします。けー君と同じSクラスになるように頑張るから！」

「はい、頑張ってください。」

二人も指定された場所へと向う。その途中、龍夜と出会った。

「あ、兄い！」

「よ、慶斗。それに夢。これから試合か？」

慶斗が今日は夢の面倒を見る事を話すと、龍夜も今日の予定を話してきた。どうやら、教師さえも上回る能力の高さゆえ、クラスアップ試験の対戦相手と認められないのだそう。確かに、予測を大きく超える呪文を使える相手と戦いたくないのは当たり前だろう。

「折角だから、夢の試合でも見に行こうと思う。」

「僕はいいですけど…」

「私も構いませんよ。」

と言うわけで、龍夜もついてくる事となった。魔石がない為、アップ試験に参加できない生徒が多々いる中、試験開始の合図が鳴った。

【エクスジェンシア！】

Bクラスとの戦闘、相手はスペイン系の生徒だった。既にコオロギ型の魔獣を召還している。だが、夢は何も召還していない。いや、召還できないのだ。記憶喪失で征儀伝である事は思い出している、呪文の詠唱などを忘れているに違いない。それに気付いた慶斗、事情を説明してタイムを取った。

「夢、自分の魔獣を召還する呪文は、“エクスジェンシア”です。」

「ありがと、けー君。」

慶斗が観客席に戻ると、試合が再開される。

【…】

突然の出来事だった。魔石の嵌った生徒手帳を掲げる夢。だが、呪文を詠唱する前に魔石が発光したのだ。そして魔方阵が展開、白鳥が現れた。その翼には炎を湛え、炎属性である事を窺わせる。白い体に赤い翼。偶然にも夢が今着ている巫女服のようだった。

「あ、兄い。今、夢が…」

「呪文を詠唱しない征儀伝？」

これには龍夜も驚かざるを得ない。今までに無詠唱で魔獣を召還する者など見た事がない。記憶が正しければ、中国系征儀伝でさえ、“召還”と唱えていたはずだ。

驚く最中、戦闘が始まる。金属性らしきコオロギ型魔獣が、金属の鎧を纏って突っ込んでくる。再び無詠唱で呪文を発動する夢。白鳥が羽ばたき、炎の壁を作り上げる。それによって跳ね返されてしまった。

追撃とばかりに、炎の弾丸が襲う。金属の盾で防ぐ魔獣。だが、炎の弾が盾を貫通したのだ。容赦なく降り注ぐ炎の弾丸に、ダメージを負っていくBクラスの生徒。

夢の魔石がより強く発光した。どうやら上級征儀を発動するらしい。翼に炎が蓄積され、灼熱に燃え上がる火球を生成する。それを打ち放った。再び盾を構成して対抗しようとするが、攻撃が当たる前に溶けてしまう。そのまま魔獣は燃え上がり、砕けるように消えてしまった。

「戦闘終了!」

「けー君、やったよ、勝ったよ!」

「すごいです、夢。防御に秀でた金属性に勝つなんて!」

素直に喜ぶ二人。だが、龍夜はまるで信じられないと言った顔をしている。

「夢、無詠唱でどうやって呪文を発動したんだ?」

夢が一度困った様な顔を見せる。一度唸ってから、彼女なりの説明を始めた。

彼女が慶斗から召喚呪文を教えられた時、記憶の片隅から自分の魔獣の姿が蘇ったそうだ。そして、呪文を唱えようとした瞬間、勝手に魔獣が召喚されたと言う。攻撃に至っても、蘇った攻撃のビジョンをイメージしただけらしい。

呪文を詠唱する必要が無いのは、征儀伝士の戦いにおいてかなり有利な手となる。特に上級征儀を発動する際、呪文の詠唱はボソボソとした呟きでは発動できない。ある程度周囲に聞こえる音量が必要となるのだ。周囲に聞こえると言う事は、戦う相手にも聞かれてしまう事と同意義。対策を立てられる可能性もある。それを考え

ると、次の動きを読ませない夢の戦闘スタイルは、かなり有効な手段となる。

「記憶喪失と関係があるのでしょ…うか？」

「魔石のヒビも関係があるのかもな…」

そう言いながら、自分の漆黒の魔石を見つめる龍夜。

「兄い、考えている事を実行したら駄目ですよ！？」

はっと顔を上げる龍夜。彼の悪い癖なのだ。呪文の研究に没頭するあまり、手段を選ばない時が偶にある。今もきつと、自分の魔石にヒビを入れようと考えていたのだらう。顔を青くさせて叫ぶ慶斗だった。

兎に角、この戦績を見れば、Bクラス以上は確定だらう。もしかしたらSクラスに入る事も可能かもしれない。

「慶斗っち、負けちゃったよ。」

「俺もだ。暴力属性があそこまで強いとは思ってもなかった…。」
Aクラスとの戦闘を行っていた二人がやってくる。どうやら二人とも負けたらしい。

「二人ともお疲れ様です。こっちは夢の大勝利でしたよ。」

情報を交換しながらも、他愛のない会話を交えて談笑する4人。そこへ二人の生徒がやって来た。天馬と一角獣である。

「とうとう俺達もSクラスでい！」

「うむ。本当ならば、朱雀も含めた二対二の勝負を望んでいたのだが。」

「すいませんでした。今日は別な用がありました。きっと明日からは一緒のクラスだと思いますので、その時に勝負しましょう。」

硬い性格だと思われていたが、話せばそこまで言う訳ではないようだ。

「ねえ、誠也っち。誠也っちって可愛い顔してるよね。慶斗っち見たいに女装してみない？」

Sクラス編入早々、疲れる事が予想される一角獣だった。

組決め

夢のクラスアップ試験の二試合目が始まった。本来なら一試合で終わるのだが、先程のレベルの違いから二試合目が許可されたのだ。相手はAクラス。夢と同じくギリシア系である。

「夢、頑張ってください。」

「うん」

意気揚々とフィールドへと降りて行く夢。慶斗も龍夜達が待つ観客席へと登っていく。転入生の特別試合とあつてか、注目度も上がっている。…巫女服も相乗効果を出しているかもしれない。

【エクスジェンシア】

【…】

炎の翼を持った白鳥と魔獣が出現する。先手を打ったのは夢。呪文詠唱のタイムラグを持たない為、先制攻撃を行う事が出来るのだ。炎の弾丸が相手の魔獣に襲い掛かる。風属性らしく、竜巻の盾で防いだ。

【主の命令よ。疾風の弾丸を放て。バレ・デ・トルメンタ！】

風が弾丸となって夢へと走る。夢はしっかりとその弾道を見極めていた。

「風は気圧の高い所から低い所へ流れる。空気の対流は空気の温度差から現れる。暖かい空気は上昇する。それなら…」

【…】

夢の無詠唱呪文によって、フィールドが一瞬にして灼熱地獄と化した。どうやら罫^{トラマ}の呪文を使用した様だが、規模が違う。本来相手の動きを制限したり、自分のサポート程度にしか使わないのだが、これは最早攻撃並みと言っても過言ではない。

迫ってきた風の弾丸が、急激な熱を受けて上昇気流に乗った。一瞬で熱くなった空気が風の弾丸を押し上げたのだ。

「なるほど、風属性の攻撃は空気を圧縮した物が多い。フィールド全体を灼熱で焼けば空気は押し上げられる。攻撃が全て有らぬ方向へ向う、これこそ畏だ…」

感心した様に龍夜が呟く。これ程の実力があれば、夢は確実にSクラスへと入ることが出来る。魔力保持量だって、慶斗程では無いにしろ常人より持っているに違いない。

「巫女服パワーだ！いいよ、夢ちゃん。頑張れ！」

可憐が学園を去った事で少々悲しんでいた風沙だったが、どうやら、新たな着せ替え人形を手に入れたらしい。かなり喜んでいる。

【…】

白鳥が飛び上がる。上空から炎の針を飛ばす。必死で防ごうとするのだが、風の盾がうまく発動しない。全て上昇気流に持つていかれてしまうのだ。炎の針が体全身に刺さる。火を噴き出す相手の魔獣に、夢がとめとばかりに最後の呪文を発動した。翼を羽ばたかせ、火球を作り出す。それを打ち放った…。

「では、改めて紹介だ。今日付けでこのSクラスに編入となった、天馬、一角獣、夢だ。」

「天馬鹿狩だ。」

「一角獣誠也でい！」

「夢です。けー君。約束どおり来たよ！」

放課後近く、Sクラスに新たな3人の生徒が入った。可憐が完全に学園に戻って来ないことを知った今、Sクラスは6人で新たなスタートを切る事となったのだった。

「今日より、新たにSクラスのメンバーが加わる事となった。それなりに名は知れてると思うので、面倒な自己紹介は省く。今日から

ペアでの戦闘訓練を行うぞ。」

当然の如く警護部に入部した三人。そして、龍夜も夏休み明けとあって、新たなタスクに挑むことになった。ペアでの戦闘訓練。たぶん、魔獣合成を念頭に置いた訓練なのだろう。だが、龍夜にはまだ理由があつた。一枚の紙を取り出す。

「コレを見てくれ。今年から開催される事となった大会だ。」

紙には、征儀伝同士の大会の概要が書いてあつた。どうやら、龍夜は警護部の名義でこの大会に参加するつもりらしい。

「因みに、これは5人一組だ。その場でランダムに組み分けが行われ、ペア戦を二回、個人戦を一回行う。二勝先取で勝ちだ。大会は二週間後、今日からの訓練で大会に参加する二組を作る。全員意気込んで訓練を行うように。」

それから訓練が始まつた。ペア戦を意識して行う為、取り合えずペア作りから始まる事となつた。

「慶斗、俺とでいいか？」

「はい。いいですよ。」

「待つて、私もけー君と組みたい！」

慶斗にすぐり付いてきた夢。向こうでは天馬と一角獣が当然の如くペアを組んでいた。龍夜も玲奈と同じ組らしい。影の薄い三年生の二人もペアとなつていた。

「駄目？翔太さん……。」

「いや、でもさ……俺は入学試験の時からペア組んでた訳だし。ほら、男女のペアはあれかなつてさ……。」

「けー君、男女のペアつてそんなに駄目なの？恥ずかしいの？」

周りからも、“うわあ、女の子虐めてるよ……”とか、“朱雀龍夜の前例があるのに……”などとヒソヒソ声が聞こえてきた。

「ああ、分かつた。分かつたから。俺は中里先輩と組むから、夢ちゃん、君は慶斗と組んで。つてか、そうして。」

「ありがとう！」

と言う訳で、慶斗は夢と。翔太は類と組む事となつた。一人余つ

てしまった風沙がいるのだが、彼女は本来、天真爛漫、天衣無縫と言言葉が似合う性格なので、無理にペアを組む事は無かった。本番でペア戦に持ち込まれない事を祈るばかりである。

「けー君、ペア戦ってどうやればいいの？」

「そうですね…、言葉にすると難しいかも知れません。」

今までペア戦を行ってきた事が何度かある慶斗だが、その時は組んだ相手が龍夜や翔太だった。龍夜の場合、兄弟と言う繋がりもある。そして彼が天才の為、慶斗の戦術を一発で読み取って合わせてくれていた。その逆もある為、自然と息は合うのは当然だった。そして、翔太。彼とコンビを組んだ場数は多い。その内にコンビネーションも確実に上達している。

「何回も練習する必要があります。でも僕らには時間はあまりありませんね。幾つか基本的な戦術を決めておきましょう。」

「おっけー！」

組決め（後書き）

今回を持って、一時この小説は連載中止となります。申し訳ありません。呼んでくださる皆様、今までありがとうございました。次回掲載予定は7月2日の午後。（日本時間）となっております。手帳のすみにでも、チヨコット書いて置いてください。それでは、しばしのお別れ！

相性

とりあえず基本的な事項から確認する二人。同じギリシア系のため、ユニルスが使えないのは明白である。だが、同じ系統同士の為、攻撃の相乗効果が狙える可能性があった。その上、慶斗の光属性はアシストにも強く、夢の炎属性は攻撃に特化した属性である。

「僕は夢のアシストをしようと思います。」

「私はどうすればいい？」

「とりあえず攻撃してください。僕が様子を見計らいながらアシストしますから。」

慶斗の聞く話によれば、夢の扱える技は基本的な技のみ。上級征儀はファイナーレの技しか使えないのこと。おのずと使える戦術も限られてくる。しかし、クラスアップ試験で見せたあの能力の高さを見れば、力押しが効くのは確実だろう。魔力保持量の多さは定かではないが、トラーマの呪文でフィールドを焼き尽くすほどだ。常人の上を行くと考えても良いだろう。その上、無詠唱で呪文を発動できるのだ。かなり無敵に近い存在と言えるだろう。もしかすると、龍夜でも苦戦する程の相手かもしれない。

「とりあえず実践練習でもしてみよう。」

「はい、けー君先生！」

結果は二人の圧勝だった。相手は三年の二人。今は二人仲良く観戦席の隅で慰めあいながら座り込んでいるのだった。夢は上級生との試合に勝てた事が嬉しかったのか、ピョンピョン跳ねて喜んでいた。見た目は慶斗と同じだろうが、どこか幼げに見えてしまうのであった。だが、本人に歳を聞いた所で覚えていない可能性もあるだろう。そして、慶斗自身も女性に歳を聞くのは失礼だと思っているので聞かないのであった…。

「今日のご飯は何かいい？けー君。」

「何でも良いですよ。それに、僕だって作りますよ？」

「いいのいいの。けー君が喜んでくれるなら、私頑張っちゃう！」

拳を体の前で握って張り切りポーズをとる夢。半ば嬉しそうに照れる慶斗。事情を知る龍夜や玲奈はニコニコしてるし、翔太はポカンとしている。風沙だけはニヤニヤしながら二人に静かに近付いていく。

「新婚さんみたいだねえ？慶斗っちに夢たん。」

慶斗はあたふたして“そんな事無いです！からかわないでくださいです！”などと言っているし、夢に至っては頬に手を当てて首をフリフリ。“そんな新婚さんだなんて、お風呂にする？ご飯にする？それとも私？だなんて…”。どうやら一人で妄想の世界に突入しているようであった。そんな様子を見て納得したように頷くと、今度は龍夜と玲奈の方へと向っていった。どうやら、ただ冷やかしがしたかっただけらしい。向こうの方でも玲奈が赤面してるし、龍夜は明後日の方向を向いていた。

「今日は解散！」

直後、龍夜の解散宣言が出されたのだった…。

「く」

「夢、本当に手伝わなくても良いんですか？一応僕も兄いと住んでいた頃は料理してましたよ？」

「けー君、私の作る料理、嫌い？」

目をウルウルさせて聞いてくるのだが、留美によって耐性の出来ている慶斗にはあまり効果がなかった。

「嫌いではありませんよ。でも、夢にだけ負担を掛けては行けないと思っただけです。」

「ありがと、けー君…。」

ギョツと慶斗に抱きつく夢。やはり耐性は出来ている慶斗なので、特に驚くことはなかったが…。あまりにも反応の薄かった為か、夢

はムスツとし始めた。

「けー君、女の子に抱きつかれても何とも思わないんだ。ふうん、そうなんだ。」

「ただ慣れてるだけです。」

「慣れるほど抱きつかれるんだ。けー君モテモテだね。」

“あう、そんな事は無いのです…”。 ” と言う慶斗だが、夢は更にギョツと津よく抱きしめた。

「私ね、本当は少し怖いんだ。記憶が無くて自分が何者かも分からないし、身の拠り所も知らない。だけど、けー君の隣ならなんだか安心できるの。お願い、私の事、嫌いにならないで！」

ぎこちないながらも、夢の頭を撫でる慶斗。元気はつらつと言った感じの夢と思っていたが、内心はこんなにも寂しかったのだと気付く。自分がそれを少しでも癒せるのなら、真正面から受け止めたと思った慶斗だった。

「夢、なんだか焦げ臭くありませんか？」

「あっ!？」

鍋から黒い煙が昇っていたのはご愛嬌…。

「ごちそうさまです。夢、おいしかったですよ。」

「ごめんね。今度からは焦がさない様に気をつけるね…」

黒い煙を吐き出した料理は炭化とはいかない物の、最早食べられる状態ではなかった。しょうがないので、別な有り合わせで夕食を済ませた二人。謝る夢に、気にしてないと言った振りの慶斗。

「お風呂沸いたら夢が先に入ってください。」

「私の入ったお湯でエッチな事考えるんだ。いやらしい…」

“そんな事しませんっ！それなら僕が先に入ります。” と叫ぶ慶斗。

「冗談だよ、けー君。だけど、けー君が先に入って何をするつもり

なのかなあ？」

またもや茶化し始める夢。慶斗はまたもや赤面している。

「僕、今日はお風呂に入りません。先でも後でも夢に誤解されてしまいます…」

かなり落ち込んだ様で、床に座り込んで“の”の字を書きはじめてしまった。それを見て苦笑する夢。慶斗の背中から体を預けるように乗りかかる。首に腕を回してそつと囁いた。

「先も後も駄目なら、一緒に入る？」

「だだだだ、駄目ですよ！そんな事！」

「冗談だよ、けー君。じゃ、私お風呂入って来るから」

赤面する慶斗を残して、夢は去っていくのであった…。

「これでは、僕の精神が持たないのです…」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8524k/>

えくすじえんしあ 魔獣召還学園物語

2010年10月8日12時47分発行